誰かにとっての君は。

鬱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
誰かにとっての君は。

【Ｎコード】
Ｎ５０１１Ｌ

【作者名】
鬱

【あらすじ】
誰も知らない。それはつまり、孤独。

1頁

空を仰ぎみれば何かが浮かぶような気がした。
しかし何も浮かばず、ただ時間は過ぎ去り、初夏の風が頬を撫でる。わたしは何度目になるか分からないため息をフウと吐き出し、眩い空にガラスを隔てました。
つまり、窓を閉めたわけでございます。

おぼつかない足取りでベットから室内の地面に足を下ろします。フローリングの床は少しばかりひんやりとしていて、心地よい。
勉強机しかない空虚な部屋をそろりと出ると、ちょうど姉様が部屋から出る所でした。姉様は気だるそうないつもの表情を三倍ほど気だるそうにして目を擦りました。
姉様は学校指定のジャージといった感じの寝間着姿で、普段はストレートの髪を今はゴムで縛り、お侍様のようにマゲをお生やしになっております。
「おはよう」
「……おっ、おはようございます」
くぐもった声でわたしは返事を返しました。焦燥がぞわりと首筋を舐め上げるのですけれど、姉様は特に何もいわずわたしを抱きしめました。
「あっ」などと女々しい声を上げたのはわたしで姉様は終始無言。身を固まらせて緊張しているのはわたしで姉様は終始やわらかい。
優しい香りが鼻をかすめます。
「低血圧だから、ちょっと、こう、させてね」
「は……い」
やわく姉様はわたしを抱きしめ、汗ばんだ匂いをわたしに染み込ませる。でもわたしはそれをおかしいなどとは思わないのです。何故ならそれは日課で当たり前のことで、わたしが今までもしてきた

ことだから。

だから、姉様の接吻をわたしが拒むはずがなく、教えられた通りに舌を返すのです。姉様の口内は酷くねばついていて、熱く、気だるそうないつもとは違いとても貪欲でした。

唇が離れ、目を瞑っていた姉様は二重の瞼を開きました。そして今一度私の体を抱きしめると小さくありがとうと言いました。

わたしは人に触れられるのは苦手なのですけれど、そんな無礼なことは容易に言えず、言うよりも言わない方が失うものが少ないだろうなどと浅はかに考えているのです。

「本当は……嫌なんでしょ？」

「そ、そんなことないです」

姉様は感が鋭いのです。

わたしは姉様の気だるそうな笑みから顔をそらしました。これで嘘はバレないはずです。

「いつも体を固くさせてるから、分かるよ。……それに、そう。ストレス感じると体を前後に揺らす癖、あるしね」

「その、あの……」

「大丈夫、人は常に過去をオウものだから」

そう姉様はいい切ると、わたしを過ぎ去り、一階へ降りる階段へと消えてゆきました。

わたしはただその場で固まり、冷や汗を拭うのでした。

朝食を食べ終わり、いそいそと外に出たわたしは静かな朝日を浴びつつ道路の隅を歩きます。

時間が早いからでしょうか、辺りに人らしい人はおらず、雀の鳴く声だけが耳に届きます。まだ眠っているかのような早朝の香りは嫌いではないのですけれど、いろいろな感情が素直に喜ばしてはくれません。沢山の教科書が入った鞄を肩にかけているのですけれど、心の重さはそれを上回り、ただただ辛辣な表情をわたしに望むのです。

つまり朝から鬱気（うつき）とした気持ちなのでございます。

わたしが赤信号を前にして早朝の空を眺めていると、どなたかが私の頬を後ろから撫でました。女々しくわたしは「ヒャア！」などと声を上げ、後ろに体を強ばらせながら向けました。

「車なんて一台も通ってないのに、信号待ってるなんて律儀だねー」

クラスメイトの東さんでした。彼女はニコニコと笑いながらわたしの頬を撫で続けます。

わたしは自分でも分かるくらいに頬が赤みを差し、汗がでるのを感じました。羞恥心です。恥ずかしいのです。

「あ、の、手、やめて……ください」

「やーよ」

猫を思わせる微笑みで彼女はにっこり笑い、頬から首筋にかけて、それをこそ子猫をあやすようにわたしを撫でつけました。わたしはその間、信号が青になったことも忘れ、涙を目尻に浮かべつつ、女々しい声を上げながら悶えておりました。

やっとのことで開放され、私はゼイゼイと息を切らします。張り詰めすぎたせいか首筋が痛くなってしまいました。心を落ち着けるために深呼吸と体側……つまり体の側面に手を当てて指をカタカタと揺らしました。体を揺すったり、指をカタカタと動かすと非常に心が安らぐのです。

「うひひひ、めんこいのう」

そういって東さんはにやりと笑いました。わたしはまた何かイジワルをされるのではないかと気が気でなかった為、青になった信号をそそくさと抜けます。当然彼女もついてくるのですけれど、無視です。無視でございます。

「今日はねー、神足（こうたり）と一緒じゃないんだよ。珍しいでしょ？」

「……」

わたくし、怒っているので無視です。

「今日は……いや、今日もかな。まあなんかさ、元気なさそうだっ

たけど、また何かあったのかい？」
　東さんは感が鋭いのです。わたしはドキリとして少し歩みを遅らせてしまいました。
　彼女は優しそうな瞳でわたしを見つめた後、半ば独り言のように口を開きました。
「まあ、想像は何となくつくけどさ、しょうがないんじゃないのかな。それに今更どうしようもないって」
「それでも……それでも僕は常に自分を目で追ってしまうのです」
「だからみんなに声をかけられても、何を言っていいか分からなくて固まっちゃうんだね」
「申し訳なくなるのです。以前の僕は一体、どういう人間で、どういった感じで人に触れていたのだろうと。明るく声を返していたのか、静かに声を返していたのか。それを必死に考えてしまって、パニックになるのです」
「まだ家族と慣れてないんだね。いや、世界中の人間とかな？　君を知っている人は沢山いるけど、君は一人だもんね。……記憶喪失って意外と大変なんだね」

　記憶喪失。記憶を失うこと。
　わたしの最初の記憶は病院の消毒液の匂いから始まりました。目を覚ますと窓辺の席に気だるそうな女性が座っていて、わたしに微笑んでくれました。彼女は嬉しそうに名前らしき言葉を発したのですけれど、わたしには覚えがない名前。知っているけど知らない言葉。そんな違和感の連続にわたしは過呼吸を起し、やって来た医師によって鎮静剤で眠らされました。
　人は記憶、過去という蓄積からパーソナリティを作り上げるのですけれど、わたしにはそれがなくなっていたのです。テレビやペンだとか物の記憶は残っているというのに人だとか、それに関することになると全く思考ができない。
　つまりそれは身を削ぐような孤独感、身を削ぐような喪失感でし

た。

ポニーテールの気だるそうな女性は優しくわたしに気にしなくていいというのですけれど、その優しさは前のわたしに向けられたもので今のわたしに向けられたものではないのです。それが辛かった。世界中がわたしと距離を置いているようで。

わたしの父と名乗る男も母と名乗る女も、わたしにとっては初めて見る人で、治ってよかった微笑む言葉が痛かった。

学校の友人も、朝声を掛けてくれる老婆も自分の部屋もノートも全てが初めて見るもの、感じるもので、ただ今存在するわたしを邪魔だといっているようにしか思えませんでした。

わたしはわたしに成り切ることもできず、溶け込むことも開き直ることもできず、ただ陰鬱に生きていたのです。

今日の朝も。

「私のことも忘れちゃうんだもんね、ひどいよ」

「……ごめんなさい」

「私のことだけは覚えてくれてた……なんてドラマチックなことは現実じゃないもんだねえ」

彫りの深い顔を上げて彼女は笑いました。わたしは何だか申し訳なくなって小さく萎縮です。そんなわたしの肩を彼女は「気にすんねぇ」と江戸っ子口調でポンポン叩いてくれるのですけれど、気にしないなんてことは無茶というものです。

「それで、今日は何があったのさ。ほれ、お姉さんに話してみー？」

にっと笑う彼女の表情にわたしは今朝の記憶を再生させました。

2頁

リビングに入り、まず感じたのがコーヒーの匂い。父様（ちちさま）はわたしをチラリと見るとミルクに濁ったそれをゆっくりと口に運ばれました。わたしの口の中にも砂糖の甘さが広がるような錯覚。

姉様は気だるそうな表情でパンの上にブルーベリーのジャムを塗りたくり、かぶりついておられます。母様（ははさま）はいつも通り冷たそうな表情でベーコンエッグを焼いておられました。

父様が「おはよう」というのに合わせて、母様が前を向いたままおはようといい、姉様は一瞥もくれることなく、口をモソモソと動かしながら「ほひゃひょう」と言いました。

心理学の権威である父様は、染み付いたような笑みでわたしに首輪と猫じゃらしを見せました。わたしはどういうことだろう、もしかしてわたしの覚えていない何か意味するものがそれにはあるのだろうかとその場で固まり悩んでいると父様は仰られました。

「うちのペロの首輪と猫じゃらしだよ。覚えていないかな」

憶えていないかな。

その言葉にぎゅうっと胃が締め付けられるのを感じました。思い出せと急かされているような焦燥に、どうしたらいいのか分かりません。ただ足が震えて、ぼろぼろとした音になりきらない言葉が口から漏れます。視線がどこかに逃げようと勝手気ままにに暴れまわり、車酔いのような波にわたしは攫（さら）われました。

ふらりと浮遊感が身を包みます。音が遠くなり、景色が床にこぼした砂のように散らばり消えてゆく。

「あ……れ」

「大丈夫？」

気がつけば姉様にだき抱えられておりました。どうやらわたしは一瞬ばかり気を失ってしまったようです。とりあえず涙をぬぐい、わたしは姉様と父様と母様にごめんなさいと謝りました。覚えてい

ませんと。
　ベーコンエッグを皿に移した母様と、カップを置いた父様は「エピソード記憶に問題が……」だとか「精神的な……」などと複雑な単語の応酬を交わしておりました。母様は脳生理学の権威なのだそうです。
　つまりお二人はわたしの言葉なんて聞いていなかったのです。
　ただ姉様だけが気だるそうに「いいよ、ゆっくりで。思い出せなくても別にいいよ」と微笑んでおられました。
　わたしはただただ申し訳なくなって「猫の名前……思い出せなくてごめんなさい」ともう一度謝りました。わたしを起こしながら姉様はいいました。
「犬の名前だから」
「え、でも猫じゃらしが……」
「猫みたいな犬だったのよ」
「そう……ですか」
「もう、死んじゃったんだけどね」
　少し辛そうに笑う姉様の表情、わたしの記憶復活の道を一生懸命模索するご両親にわたしは発狂しそうでした。
　そして食事を流し込み、逃げるようにして家を出たのです。

「いい家族じゃん」
　そう東さんは笑いました。
「問題があるのは君の気持ちで、まわりは別に問題無くないかい？」
「でも、今の僕がいらないと……お前じゃないと言われているようで辛いのです。ぼくが今頼れるものは何もなくて、ただ無防備で……でもみんなはそんな僕を追い立てまわす。そんな気がしてしまうのです」
「考えすぎだと思うけどねー。わたしから言わせれば今の君もこれまでの君もあまり変わってないように思うよ。前はぜーんぜん喋ってくれなかったし無口だったし、今のほうがあたしは好きだね」

今のわたしを肯定してくれる優しさに、わたしは少し気恥ずかしい気持ちを覚えました。でもそんな気持はおくびにも出さず、いつものように平常を貫くのです。

記憶をなくしてあまり時間は経ってはいないのですけれど、東さんは常に優しくポジティブで、わたしを励ましてくれます。

どうしてでしょう？　それだけが謎です。

以前聞いたことがあるのですけど「記憶を取り戻したら分かるかもね」などと含みを見せるだけで語ってはくれませんでした。

「そういえば、君んち犬飼ってたんだねえ。あたし知らなかった」

「猫じゃらしで遊ぶ犬です」

「どう考えても猫だよねそれ」

「猫のような犬です」

「どんな犬だよ！」

「遠くで見ると猫にしか見えないですし、鳴き声はにゃーんと聞こえるのですけど、近くで見るとどう見ても犬で、鳴き声はワンなのです」

「それ、ユーマとかそういう類（たぐい）だよねー、どう考えてもさあ。あれかね、塀の上で寝てたりとかするのかな？」

「猫のような犬なのでありえるかもです」

姉様は結構嘘をつく方なので、それが真実かどうかは分かりかねます。わたしが初めて目覚めた時も「私は君の彼女だよ」と仰っていたくらいです。愛し合っていただとか、結婚を前提に付き合っていたなどと言い、わたしが狼狽している様を内心ほくそ笑んでいるようなイジワルな方です。

そういうことを東さんも分かっているのでしょうか、にっと笑い、口を開きました。

「いひひひひ、そいつぁ面白そうだね。一度写真とか持ってきてみせてよ。できれば遠くと近くで撮った写真の二枚があると嬉しいよ」

「今度見つけたら持ってきますよ」

なければ猫と犬の写真を撮って彼女に渡します。
明るく笑う彼女に釣られてわたしも小さく微笑み、早朝の静かな校門を潜ったのでした。

静かな廊下を進み、自分たちの教室の戸を開けると、そこにはクラスメイトの八瀬(やせ)くんと神足(こうたり)さんがいました。八瀬くんはジャージ姿なので、今から朝練なのだと思われます。隅の席に座っている神足さんは……よく分かりません。わたしのことをあまり好いていないようなので。

「よお、相変わらず朝早いな」

それはお二人にこそ言いたいのですけど、と思いましたがわたしは口をつぐみ、窓辺の席からわたしを見つめる神足さんを見ました。あっ、目そらしました。

「あのさ、あたしもいるんだけど忘れてない？」

ぎゅるりと獣のような瞳で東さんは八瀬くんに微笑みました。八瀬くんは短い髪の毛を少し手で撫でつけ、ひっそりとわたしに耳打ちしました。ふわっ、くすぐったいのです。くすぐったいのですけど！

「記憶を忘れてもあの女の恐ろしさは身に染みてるはずだろ？　悪いことはいわねえから、防犯ベルとスタンガンを今すぐ買いに行け、な？　アイツを痴漢した奴がどうなったのか、覚えてるか？　覚えてない？　それは幸せだな、おい。俺は今でも夢に見るぜ」

「ひひひ、八瀬君」

「お前、相変わらず気持ち悪い笑い方するのな」

「うるへー！　早く、朝練いけコラ！」

東さんは短い髪を振り乱し、八瀬くんの首根っこを掴むと、廊下に向かって蹴り飛ばしました。ピシャリと戸を閉め「疲れたー」と呟きました。

扉の向こうで八瀬くんはゆっくりと起き上がり、“な、見ての通り”といった顔でわたしに手を振り、どこかへと消えてゆきました。

振り返れば東さんは神足さんの席に座り、神足さんに髪を梳かしてもらっています。神足さんはおかっぱ頭で奥二重という日本的な女性で、非常に真面目な方です。東さんと神足さんは非常に中が良いらしく、その様子はまるで、かしづくお付きのものとお姫様といった感じでしょうか。……仲がいいとは違うのかもしれないと、今更ながら思いました。

ですけれど、神足さんは二人は本当に仲睦まじ気なのです！　東さんは忌憚ない言葉で彼女に話しかけ、神足さんは彼女に敬語で遠慮がちに……？

ええっと、仲はいいはずです。恐らく。

きっとわたしの見ていない場所では、多分。

3頁

青空を仰ぎみれば何かが変わるような気がした。だけれども、わたし自身は何も変わることなく、そこにあり続け、ソフトフクリームのような大きな入道雲は流れてゆく。

「いい天気だよねー」

「さよっ……そうですね」

東さんは、ニコニコと向日葵のような笑みを零し、隣の神足さんは「左様でございますね」といいそうになりましたが、どうにか持ち直したようです。東さんは神足さんの敬語が好きでないようで、神足さんはいつもそれを気を付けています。

ひと気のない屋上の日陰でわたしたちはお弁当を開けていました。実はわたし、お弁当を忘れてしまっていたのですけれど、途中姉様がクラスにやってきてお弁当を届けてくれました。寝間着姿と同じジャージ姿だったのと、最後にわたしの頬に口づけをしていったのがとても恥ずかしかったのですけど、非常に助かりました。今もそれを思い出すと少し頬が赤くなります。

そういえば、東さんと姉様は知り合いのようでしたけれど、どういった繋がりがあるのでしょう。そして何故、東さんはあの後、わたしの腕をつねったのでしょうか。笑顔がとても恐ろしかったのは気のせいだと信じたいです。

彼女たちはわたしの前でご飯をパクついてます。置いてけぼりのわたしは少し自分の時間を早く動かし、お弁当を開きました。

「……あ」

ピンク色のハートマークがご飯の上にあるのは何故でしょう。ふと脳裏に姉様の気だるそうな笑みが浮かんだのはどうしてでしょう。まさか、姉様がそんなことをするはずが……ないと思います。いえ、多分ですけれど。

しかし姉様は一体何をされている方なのでしょうか。ご本人から

は学生と聞きましたけれど、いつも家にいるような気がします。あれでしょうか、今流行の自宅警備員というやつでしょうか。

「あー、ハートだ！　ハート！　ハート！　みてみて、美雪！　ハートだよ。お姉さんとラッブラブなんだね！　愛妻弁当なんだね！　うわー、すっげー！」

東さんがわたしの弁当箱を箸で指しました。横で神足さんが「指し箸はお行儀が悪いですよ」と困り顔でいっています。

妙に明るい声ではやし立てる東さんにわたしは何だかどんどん恥ずかしくなって、お弁当箱を閉じて何も言えなくなってしまいました。何だか、その、ちょっと、涙が。

わたしの顔を見た東さんはおどけた表情からバツの悪そうなものにその表情を変え、頭を掻いてわたしの顔を覗き込みます。

「……いや、あー、ごめん。泣かせるつもりじゃなかったんだよお？　ほら、ほら、あのさ、わたしのゼリーあげるから、ごめんよ。あのね、その」

「いいです」

わたしは涙を拭い、少しふてくされたように吐き捨てました。すると東さんは晴れ晴れとした顔で「そうだ！」と言いました。ソーダが飲みたいというわけではないようです。

わたしのお弁当箱をスルリと奪い、蓋を開けるとハートマークに箸を突き立て、え？　いやその、グチャグチャにかき混ぜ、えっと、うーん。

「ほら、これでハートは消えた！　これで解決だぜっ」

「あ、ありがとうございます……？」

わたしはそれをおずおずと受け取るのですけれど、これはわたしがズレているだけなのでしょうか。それともこれが世にいう発想の転換というやつでしょうか。

自慢げにニコニコと笑い、自分の箸を舐めている東さんに見つめられたわたしは否応なしにその斑模様のご飯を食べたのでした。

「東さん、お行儀が……」

そしてわたしは神足さんに無視され続けたのでした。

授業が終わり、昼食の時間が終わり、午後の授業が終わった頃、校舎は薄い琥珀色の西日に染まり、どこからか聞こえる楽器の安寧（あんねい）な調べは時の瞬（またた）きをも緩やかにさせます。

屋上からは運動に励む陸上部と帰宅に向かう生徒の姿が見えました。

「何をしてるんだ、お前は」

そんな声に私は振り向きました。声色から推察した通り、神足さんでした。彼女は些かきつい目線でわたしを捉えます。わたしはフェンスにやわく身を預け、風になびく髪の毛を片手で押さえました。

「御前（ごぜん）がお前をお待ちしてる。早くこい」

「僕、そんな約束していません」

「関係ない。御前がお待ちしているのだからお前は黙ってそれに従っていればいい」

冷ややかな声の調べ。東さんに掛ける声色とは別次元のもの。

神足さんはわたしに近寄ると、片方の腕を掴み、引っ張りました。爪が食い込み、少し痛い。「わわわ」と慌てながらわたしは前に進み、転びました。

そんなわたしに苛立を覚えたのでしょうか、彼女は小さく舌打ちをしました。タカのように鋭い目がわたしを居抜き、怯えさせます。ですけど、わたしはそれを表には出しません。

「ここには二度と来るな。御前に誘われても拒否しろ」

「何故……です？」

「こんな、こんな場所に来てもお前の気持ちは安らがない！　意味はないんだ！　休まったように思うだけで、お前には意味がないっ……！」

わたしの制服の胸元を掴み、彼女は訴えるように、心からわたしを憎むかのようにそう言いました。運動部の掛け声と吹奏楽部のチグハグな音程が異様なほどに場違いでした。

胸元を掴んでいたその白い手は突き飛ばすかのようにわたしを押し、押されたわたしは強く頭を打ちながらいったのです。

「あの、どうして僕が……気持ちを、安らげるために、屋上に来ていたって、分かったんです？」

西口の扉に向かっていたその足はそこでピタリと止まり、後ろ姿の彼女は彫像のように己の時間を止めました。わたしは服の埃を払いながらおずおずと立ち上がり、神足さんの返答を待ちます。しかし、彼女は何もいいません。動きません。もしやわたし以外の時間は停止しているのだろうかとも思いましたが明らかにそれは杞憂で、そうこうしている間にバチンと彼女の平手がわたしの頬を突きました。口の中が切れてしまったのでしょうか、鉄さびの味がほんのりと舌の上を汚しているような気がしました。

神足さんの表情は酷く攻撃的です。眉間にシワを寄せています。

私が何かよくないことを言ったせいなのでしょうか。何かいけないことをいってしまったのなら直ぐに謝りたいのですけれど、その理由が分からないわたしはただただ呆然とその場で立ち尽くし、ストレスを和らげるために指を動かし、体を揺すります。

「お前、本当は分かっているんだろう！　全部！」

困ったようにわたしが首を傾げると、彼女は涙目になりながらわたしをフェンスに押し付けました。ぎしりと緑色のフェンスが後ろで揺れます。

わたしの怯える息遣いと彼女の荒い息遣いが混じり合うような、そんな距離。どこかに助けを求めようと視線を動かしても、昼とは違い屋上にはわたしと彼女以外誰もいません。

「その癖が何よりの証拠だ！　何が目的なんだ！　私を、私と御前を馬鹿にしているのか？　私を責めて、御前を騙して、お前はそれで満足なのか？　なあ、答えろっ！」

「……あの、あの、あのあのあのあ、あ、あ、あ、あ」

わたしはどうしていいか分からず、壊れたレコーダーのように言葉を紡ぐのですけれど、その先の言葉は出ず、嫌な汗がただ額を流

れて出る。わたしはどうしていいのか分からず、涙が溢れそうになるのですけれど、そんなことをしても意味はなく、ただ相手に迷惑が掛かるだけだと分かっているのでぐっとそれを堪えます。

胸の動悸が早すぎて目眩がします。歯がカチカチと鳴って、足が笑い、えっと何がどうだったんでしょう。えっと……えっと。

ハイライトが掛かったかのようにわたしの景色は真っ白に染まりました。

4頁

目が覚めて、いつも思うのは体の重さ。わたしの体はこんなに重かったのだろうかという感情なのでしょうか。それともこれは夢の世界の心地よさの反動なのでしょうか。わたしには分かりません。

カーテンを隔てた薄ぼんやりとした蛍光灯の光、独特な消毒液の匂い、分厚い布団。……どうやらわたしは保健室のベットで横になっていたようです。

とりあえずとばかりに体を起こし、スリッパを履きました。白乳色のカーテンをサアっと横に流すとテーブルに突っ伏して寝ている東さんが見えました。それ以外は誰も室内にはいません。

テーブルの隅にはわたしの鞄と東さんの鞄。窓の外は薄暮(はくぼ)の様相に変わり始めています。

わたしはとりあえず彼女の向かいのパイプイスにギシリと座りました。起こしたりはしません。折角、気持ちよく寝ているところを邪魔しては失礼というものです。

しかし、何故彼女はこんなところで寝ているのでしょう？　確かに保健室は静かで寝心地がいいのでしょうけど、眠いなら家に帰って柔らかい布団にくるまった方が心地よいと思うのです。

うつ伏せの状態で寝ている彼女の頭をぼんやりと眺めていると、その手に何かが握られていることに気がつきました。いぶし銀のフォルムのそれはボイスレコーダーで、その下の白い大きめの紙には「起きたら再生してね」と書かれています。わたし宛にメッセージされたものらしく、わたしの名前が星印に挟まれて、強くその存在を誇示しています。

ボイスレコーダーは彼女のマイブームなのだそうです。会話のやり取りや授業内容を録音しておくと後でいろいろ便利だとかなんとか。

わたしはレコーダーを彼女の手からそうっと奪い去り、再生のボ

タンを押します。特に操作はしません。とりあえずわたしは再生をしろと言われただけなので、間違っても特に問題はないでしょう。

ぽちり。

『ご飯だよー、ごはーん』

備え付けられたスピーカーから流れたのはそんな家庭的な声。

「え、ご飯っ？　どこどこ？」

バッと身を起し、半開きの瞼のまま彼女は、飛び起きました。首を左右に動かしありもしないご飯を探しているようです。もしここに神足さんがいたのなら「東さん、涎がみっともないですよ」と酷く狼狽したのではないでしょうか。その手には薄桃色のファンシーなハンカチーフが握られているはずです。

しばらくし、首だけを右往左往させた彼女は、わたしの顔を見て自分の状況を飲み込んだようで、にっこり笑うとうーんと唸りながら背筋を力いっぱい伸ばしました。

「おあよー」

「えっと、おはようございます」

「ん、どうしたの？　わたしの顔ばっかみてえ」

イヒヒヒと笑いながら彼女は白い歯を見せてニンマリと笑います。

「あの、どうして保健室で寝ていたんです？」

「えー、それ本気でいってるのー？　君が貧血で倒れたっていうから、慌ててここまで来たに決まってるじゃーん？」

「……貧血」

「あれ、貧血で倒れたんじゃないの。美雪が倒れてたところ見つけてここまで運んだんじゃー？」

そうか、あれからわたしは気絶してしまったのか。

また。

「はい、そうです」

「えっとね、先生が君んちに連絡するっていって……」

東さんは柱に掛かった大きな時計をちらりと見て言葉を続けます。

「まだ十分ちょっとしか経ってないねえ」

ということは十数分前に眠ったということでしょうか。熟睡していたように見えたのですけど、もしそうなら未来の青ダヌキに心配されるメガネくんを彷彿とさせる眠りっぷりではないでしょうか。

「寝付きがいいんですね」

「立ったままでも寝れるぜっ！」

えっへんと胸を張る彼女がおかしくてわたしはついつい口を歪めてしまいました。後ろを見せて、なんとか笑いを堪えますが、少し肩が震えます。

小さく咳き込み、わたしはいつも通りの平常を保ち、東さんに振り向きました。

当の東さんはどこかポカンとした顔で、頬をほんのりと上気させてわたしを見ています。風邪でしょうか？

「あんまり君、笑わないからさ、そういう顔みるのすっごい久しぶりなんだけど、やっぱりすっごく魅力的だよ。うん。君はもっと笑った方がいいと思う。もうね、おねいさん、胸キュンのズッキュンズッキュンなバッキュンバッキュンなのよ」

「……？」

やはり風邪でしょうか。失礼かもしれませんが支離滅裂のような気が。

東さんはにっと笑うとチョイチョイとわたしを手招きしました。わたしは小さく首を傾げて彼女の元に近寄ります。目前まで来ると、彼女は立ち上がり、わたしを……抱きしめっ！？　えっ、首筋！？　くちで……あうあう。耳は、首はちょっとそのプライベートな空間なので来客はお断りをををを、あっふあ、吸い付かないで……あああ。

「うわあ、すっご！　心臓バックバクいってるねえ？　顔もヤバイくらい真っ赤だーよ？　ひひひひひ」

「うっうっ……」

わたしは抱きしめられたまま、東さんを上目遣いに睨むのですけど、顔が真っ赤なせいか、涙目なせいかシマリのないものになって

いるようです。
　やんわりと腕を振りほどこうとするのですけど、彼女の手は石のように重く、そして固いのです。
「もっと君の笑顔がみたいなあ。いやこっちの顔もタマランですけど！」
「うーっ！」
「あーー！　今のいいっ！　今のうーって奴もっかいいってちょーだいっ！！」
　……嗚呼、わたしはどうすればいいのでしょう。先生、早く帰ってきてわたしの助けて下さいませんでしょうか。
　顔が熱くて、頭が重くて、恥ずかしくてバターのように溶けて消えてしまいそうです。
「あっ、うっ、あの、お尻、その……」
彼女の背中に這っていた手がわたしの体のラインを滑らかにすべり、お尻の方に来ているのですけど！　揉んでるのですけど！
「今だけ堪忍してくれいっ！」
「うーっ……」
　キリリとした顔で東さんはわたしそういったのですけど、わたしは当然断ることなんてできませんし、かといって了承することも精神的に不可能です。
　ただわたしは池の畔のコイのように口をパクパクさせて羞恥心とセクハラに耐えるのでした。
　えっと、誰か助けて。
「あ、あの、その」
「ん、どうしたね」
「えっと、えーっと」
「ほらほら、君の苦手なトークを頑張らないと、手が服の中に……
……っ！？」
　ななななな、何か言葉を。えっと、うーんと、あーっと。
「こ、神足さん、あの、神足さんはどこに？」

「美雪？　美雪は先に帰ったよ。本当はいたかったんだろうけど、空気読んでくれたみたい」
東さんが眠いということが分かっていたということでしょうか？　彼女なら東さんをこんなところで寝させるくらいなら、眠らせたまま背負いつつ家まで送りそうな勢いなのですけど。
ふと彼女の表情が先程とは打って変わって、どこか真面目なものになっています。わたしの体をまさぐろうとしていた手も動きを止めています。
「あのさ、ちょっと聞きたいんだけど」
「……はい」
「もしかして美雪のこと好きなの？」
「え？」
「今さ、美雪のこと聞いたよね」
「はい」
「どうなの」
「別に好きとか嫌いとかではないです」
「ふうん」
じっとわたしの目の奥を見つめます。そしてだんだん顔が……近くなってませんか？　あれ？
頭の後ろの手が私の首筋を固定していて、顔が動きませ……あ、吐息があのう、そのっ。
がらりと扉が開く音。わたしと東さんはそちらを見ました。
気だるそうな笑み。いつもはストレートの髪の毛を今日はゴムで縛っています。
「泥棒猫」
ジャージ姿の姉様でした。
あ、後ろに先生もいらっしゃいました。

5頁

「ちょっとあなた達、何してるの！」

そう怒鳴り声を上げたのは保健室の先生で、姉様に割り込むように保健室に身を滑らせたのですけど、姉様の「ていっ！」という言葉とともにクラリと身を歪めさせ、倒れそうになりましたが姉様のキャッチのおかげで地面との衝突は避けられたようです。

どうしたのだろうとわたしが姉様の顔を見ていると、彼女は己の手刀を掲げて仰いました。

「経絡秘孔のひとつを突いた。主に首の部分の……」

つまり手刀で先生の意識を奪ったということだそうです。というか、そういうこととして大丈夫なのでしょうか。

「ん、あー、大丈夫。ほら、あなたの意識はルパンが頂いたって書いておけば何とかなるよ」

そう気だるそうに笑いながら姉様は何も書かれていない画用紙に文字を書き連ね、室内の床で寝そべっている先生の額にペタリとセロハンテープで固定されました。ルパンではなくて最後がキャッツアイとなっているのですけど、深くはつっこみません。

「あのさ、何ていったっけ……。えっと、ヒガシさんだっけ」

「アズマ、です」

「ああ、そう。で、東さん。早くうちの子から離れてくれる？」

「……っ」

東さんはしぶしぶといった感じでわたしから身を剥がし、少し寂しげに笑うのですけど、わたしとしてはやっと気分を落ち着けられといった気持ちでした。

ふらりと近寄った姉様はわたしの頭を撫でると、少し朗らかに（でも相も変わらず気だるそうなのですが）微笑みました。

「また気を失ったんだって？　びっくりしてここまで飛んできたよ。マッハで」

「はい、ごめんなさい」
「別に迷惑とか思ってないよ。心配したってだけ。……で、なんで抱き合ってたの？」
「えっとそれは……」
ここで正直にいうべきなのでしょうか？　いやしかし、ちらりと横目で見る東さんは非常に気まずそうな顔をしています。つまりそれはいって欲しくないと思っているのではないでしょうか、とわたしは推察をするのですけれど、姉様はその答えを欲していて。
姉様はわたしの首筋を指で撫でています。ああ、先程のことでアザができてしまったのでしょうか。
どうしたらいいのでしょう。
「んー、馬鹿正直だね。人に迷惑を掛けたくないって顔してる」
「いえ、あの実は僕が……」
「そんなわけ、ないよ。自分からあの子に抱きついた？　ありえない」
「……」
庇おうとしたのが裏目に出て彼女を余計追い込んでしまったような気がします。
姉様は終始変わらぬ表情でわたしの目の奥を覗き込むのですが、不意にその表情は冷たくなり、顔は東さんに向けられました。
「あなた、変態なの？　急にこの子に抱きついて体をまさぐるとか尋常とは思えないよ」
「……」
東さんは何も言いません。ただ足元を見ながらスカートの裾をぎゅっと握り締め言葉に耐えているようでした。
わたしはなんだか酷く胸が痛むのですけど、何もしてあげられることありません。
「ベットで寝てたらしいけど変なこととかしてないよね？」
「っ！」
「ねえ、何でかな。何で今、君は口元を隠したのかな」

東さんは咄嗟に自分の口元を手で覆い隠しました。
えっとそれはつまり……どういうことなのでしょう？
姉様の表情をそうっと盗み見ると、微笑みを作っていた顔が、それよりか幾分か濃い、“笑い”に変わっていました。
何か胸騒ぎがします。喧嘩でしょうか。
わたしが原因の。
「自分のしてること、理解できてる？　自分の立場とか家のことも含めてさ、分かってる？　それにそういうのが許されるのは漫画とかアニメの世界だけだよ。現実でやるなんて正気の沙汰じゃないね」
「あたしはっ！」
「ねえ」
彼女の言葉を遮るように、無視するかのように姉様はわたしに顔を戻し、聞きました。
わたしは目尻に溜まった涙を拭いて、首を傾げます。何を聞かれるのだろうと嫌な意味で胸が高鳴り、喉が乾くのを感じます。
「あの子のこと、好き？」
ちらりと東さんを見るとどこか期待したような表情でわたしを見ています。何かを待ちわびているような、そんな表情です。つまりわたしは思っていることをいえばいいということでしょうか？
一度、小さく息を吸ってわたしは答えました。
「……別に好きとか嫌いとかじゃないです」
「ほらね」
誰にいうでもなく、姉様はそう呟き、クスリと笑いました。
わたしは何かいってはいけないことをいってしまったのだろうかと不安になるのですけれど、姉様は大相清々しい表情をなさっていました。東さんも姉様ほどではないにしろ、その表情は晴れやかに見えました。
「あははははははは、そっかー。退化……いや進歩かな。うんうん、進展してるよ、随分と」
「なんか言いたいことある？」

「いえ、何にもないですよう？　まあ、あるとすれば夜は暗いですから転んだりしないように気をつけて下さいってところですかね」
「そうね。夜は暗いからね」
「ええ」
二人は楽しそうに笑いあい、わたしはよく分からないけど丸く収まったと胸を撫で下ろし、どちらがいうでもなくその場で別れたのでした。

ほんの少しばかり冷たかった風に熱が混ざり、暗んだ夜道を通り過ぎていく。
私たちは手を繋ぎ合いながら無言で歩いてくのですけれど、そこに無言の気まずさというものはなく、むしろ心地よい静寂が時を流れていました。
姉様はわたしの知らない歌を鼻音で奏で、わたしはそれに聞き入りながら道を進みます。
「今日は二人とも帰ってこない日だよ」
「そうですか」
「うん、だからどっかお店に入ろうか」
「でも……」
「じゃあ、家がいい？」
そういって彼女は悪戯っぽく微笑みます。
「えっと」
「ぱあっといこうじゃない。遠慮することないよ、だって家族だしね」
「いえ、そういうわけじゃ……あっ」
気だるそうな表情の姉様は強く手をひっぱり、タクシーを止めました。運転手の男に一言、行き先のホテルの名前を告げたのですが、運転手は車を動かさず、何かいいたそうな顔をしています。わたしは恥ずかしさに俯き、靴の先を見つめていると、姉様が少し語調を強くして「何か？」と運転手にいいました。運転手は何も言わず、

ため息をついて私たちを目的の場所まで運んだのです。
郊外のホテルは静かな光を放ちながらそこにそびえ立っていました。わたしは姉様に手を引かれるまま、カウンターを抜けて奥へ奥へと進みます。エレベーターに乗り込むと姉様は指をぎゅっと絡めていいました。
「楽しみだよ」
「……」
わたしはただ沈黙を友として、これから襲い来るであろう羞恥心を想像して、エレベーターが止まってしまえばいいのになどと考えていました。しかし現実はそうもいかず、目的のフロアにわたしたちたどり着いたのです。
「何名様ですか？」
そう高級ホテルのレストランフロアに。

ホールではピアノの生演奏が行われていて、談笑している客はみな一様に品があり、きらびやかな服装なのですけど、わたしは制服姿で姉様に至ってはジャージです。しかも足は裸足にスニーカー。
とんでもなく目立つのですけど、姉様はそういったことを気に掛ける素振りは一切見せず、マナーなど知らんと言いたげに料理を口に運んでおられます。ナイフとフォークがあるのにボーイさんに「箸持ってきて」というくらい周りの視線に無関心です。わたしは周りの目が恥ずかしくて仕方がなく、縮こまってしまうのですが、姉様は「ちゃんと食べないと大きくなれないよ」といってわたしに食事を進めるのです。ファミレス気分なのは間違いないでしょう。
食事はフルコースでとても美味しいのですけど、あまり食べた気がしません。こんなことならやっぱり家で姉様の“よく分からない何か”を食べた方がマシだったように思います。いや、でもあのバイオハザードは……うーん。
「ちょっとトイレいってくるね」
「……はい」

姉様は立ち上がり、わたしの額に軽くキスをすると微笑みながら向こう側に消えていきました。周りの辛辣な視線が痛いです。

わたしは黙ってナイフとフォークを進めます。ガラス張りの夜空を眺めて、気分を落ち着けました。中頃まで来ると周りの客もわたしたちに慣れてきたらしく、あまり注目はしなくなっているので最初に比べれば幾分か楽です。

ふとピアノの演奏に耳を傾けていると、近くのテーブルで子供が三人なにやら言い合いをしていました。みな十代といった感じで、外国人のような顔立ちです。長く癖のある白髪（はくはつ）の少女は目が真っ赤です！

「料理なんて出前でいいのです！　そもそも女が料理できなきゃいけないという理論が間違ってるです！」

「だからさー、それ関係ないじゃん。お母さんが夕飯作るって自分でいったんだから、その理屈は変でしょ？　ああ、こんな気取った料理じゃなくてゆー君が作った料理が食べたかったなあ」

「そんなこといっちゃ可哀想だよ。お母さんだってプラモ以外で僕らにいいところを見せたかったんだよ」

「それさ、暗にプラモ以外できることないっていってない？」

「……優さん、子育てってなんでしょうね」

遠い目をして少女は独り言のように呟きました。

「三日間殆ど何も口にしないでプラモ作ってるような子を作らないことじゃないの？　あと引きこもりならないようにとか？」

「それって僕のこと？」

「ただいま」

「え、あ、お帰りなさい」

「何、見てたの？」

「いえちょっと夜空を」

姉様は気だるそうに首を傾げて、椅子に座りました。

6頁

「ここで止めて下さい」

そう姉様が言われてからどれくらいの時間が経ったのでしょう。周りはただ停滞しているかのように、静かに時を流し続けています。

食事を終わらせたわたしたちは、またタクシーに乗っていたのですけど、姉様の急な一言により我が家から少し距離のある場所で下りることになりました。どういうことだろうと姉様の表情を覗くと彼女はただ一言、「少し歩こう」と微笑みました。わたしは肯定も否定もせずただ流されるままにそれに従ったのでございます。

流れる時と同じくして、雲も空を泳ぎ、金色の満月に蓋をします。自然公園が近いからか、緑の多い並木道はとても静かで、床のパステル調のタイルは目に優しい色合い。眺めているだけで嬉しい気持ちにさせます。

姉様は気だるそうな笑みを携えながらポツポツとわたしに言葉を紡ぎ、わたしはただひたすら正直にそれに答えました。

繋がられた手は決して離しません。絡めた指は決して離れません。

「ご飯、美味しかったね」

「はい」

「ふふ、美味しいときはもっと美味しそうな顔しなきゃだめだよ。嬉しい時は笑って喜んだりするみたいに」

「……はい、ごめんなさい」

ふうっといって姉様は髪を振り解きました。風にふわりと膨らんだ髪の毛がわたしの顔を撫でました。上下はジャージなのですけど、それだけで姉様の美しさはぐっと上がります。姉様はわたしが評価するのがおこがましいほど美しく、可憐なのです。ただいつも寂しげなのが気になります。

「お腹いっぱいになると疲れるよ」

「そうですね」

「やっぱりあのままホテルに泊まった方がよかったんじゃないのかな？」

「あの、明日学校ですし、お金が勿体ないです」

「ふふ、君は何も分かってないね」

気だるそうな雰囲気はどこへいったのでしょう、姉様は年端のゆかない少女のようにケラケラと笑います。わたしは何がそんなに可笑しいのだろうと首を傾げていると、姉様は月の光を浴びながらいました。

「明日ね、学校いったら……あの、えっと、ヒガシさんに」

「アズマさんです」

「その東さんに“昨日はお姉ちゃんとホテルに行きました”っていってごらん」

「……？　わかりました」

「ふふ、やっぱり分かってない」

タイルの床をテクテクと歩き、姉様は流暢な英語で小さく歌います。

母さんがわたしを殺したの。
父さんがわたしをたべている。
兄弟姉妹がテーブルの下に座って、わたしの骨を拾い、それを冷たい大理石の下に埋めるよ。

「……どうしたの？　どうして泣いてるの？」

「わかりません」

「そっか」

ただ。

その歌は悲しくて、美しくして、儚い。

そうわたしは思いました。

暗くシンと静まり返った家の中、わたしたちは手を繋いだまま階

段を駆け上がりました。
　扉の前になってわたしが手を離そうとすると姉様は離れそうになった手を力強く握り、仰いました。
「今日は一緒に寝ようか」
「えっ」
「嫌？」
「イヤではないですけど……」
「じゃあ、いいよね」
「あの、お風呂、入らないと」
「入らなくても、いいよ」
　そうはいいますけど、わたしはお風呂に入らないと布団の上で寝たくないのです。汚れを落としてからじゃないとイヤなのです。
　姉様はそれを分かっているのでしょうか、小さく笑い、扉の戸を開けて、わたしの部屋にわたしを連れて入ります。
「床でさ、布団にくるまって一緒に寝よう。蛾の繭に包まれるみたいにさ。蜘蛛に絡め取られるチョウチョみたいに。掛け布団なら汚れてもすぐ洗えるから、大丈夫」
「……うーっ」
「いやなら夜這いするよ」
「あの、夜這いってなんですか？」
「添い寝と同じ意味……かな。ああ、そうだ。明日、ヒガシさんに“お姉ちゃんが夜這いしに僕の部屋に来た”っていってごらん」
「はい……わかりました」
　クスクスと笑う姉様はいつものように疲れた表情ではなく、とても明るく見えます。
　姉様はそれからわたしの掛け布団を自分とわたしを囲むように、二人羽織（ににんばおり）のように掛けました。わたし、まだ一緒に寝るともいっていないのですが、姉様には関係ないようです。
　顔が近くて、くすぐったくて、じっと見つめられるのが恥ずかしいですけど、わたしはなるべく平常を装い我慢しました。

「今日は学校どうだった？　学校は楽しい？」
「学校は大変です。楽しいかどうかはまだ分かりません」
「辛かったらいつでも辞めていいんだよ。お姉ちゃんが養ってあげる。お姉ちゃんは世界中が君の敵でも味方でいてあげる」
そう姉様は笑うのですけど……それは。
それはきっと前のわたしに向けられた優しさで、前のわたしに向かうべき感情。だからわたしには関係がなくて、わたしは少し辛くて、その言葉は今のわたしに向けられたものじゃないとは言えなくて、わたしはただ……。
「ありがとうございます」
その一言しかいえませんでした。
もしわたしが今まで通りのわたしだったのなら、きっとこの言葉は飛び上がるほど嬉しかったのでしょう。でもそうじゃないのです。
今のわたしは。
「ねえ、学校の話しして」
「えっと、今日も東さんと朝一緒になって、少しイジワルされました。学校につくと八瀬君を見かけました。八瀬君は東さんをからかって教室からつまみ出されました」
「ふうん、それで？」
「東さんと神足さんが仲良くしているのを隣の席でぼうっと眺めていたら、東さんが急にどこかに行かれて、僕と神足さんだけになって……」

教室内はわたしと神足さんの二人だけです。神足さんはわたしと一緒なのが気不味いらしく、どこかソワソワしています。わたしはむしろ静かな時間が好きなので沈黙は嫌いではないのですけれど、周りの方々はそうではないようです。
空気を察して離れようにも神足さんはわたしの席の隣なので、今離れたところで意味はないのです。
「お前といると周りが不幸になる」

「……？」

不意な言葉にわたしは少し驚きました。どういうことだろうと首を傾げ、彼女を見ました。

「お前のせいで私も御前も、そして八瀬も不幸になるといっているんだっ！」

「どうしてです……？」

「どうしてもクソもあるもんか。誰も傷つけたくないと思うなら……傷つきたくないと思うなら、私と御前に近づくな。穢らわしいっ！」

「ごめんなさい」

彼女が何に怒っているのか分かりません。でも謝るだけでもきっと違う。そう思うのでわたしは謝りました。

けど彼女はそれが酷く癇に障ったらしくわたしの胸元を掴みドスンっと溝に拳を叩き込みました。胃が破けそうな鈍痛、吐くか吐かないかの絶妙な掌底。

「かはっ……」

「お前は今まで通り、記憶を失ってからの通りに適当に生きて適当に人生を終わらせろ。私と御前に必要以上近寄るな」

お腹の中に石を詰め込まれたかのような不快感にわたしは小さくうずくまるのですけど、神足さんはやめてくれません。わたしの髪の毛を掴んで顔を近づけます。

「私のことを御前にいってみろ。耳と目と舌を引きちぎってやる」

「うっうっ……」

「へえ、そんなことがあったの」

「はい」

「それからクラスのみんなが教室に入ってきて……それで」

「どうしたの？」

「八瀬君の顔にアザができていました。僕がその顔を見ると彼は笑いながら大丈夫っていっていたのですが、でも……」

わたしは痛いのも痛い場面を見るのも苦手で、傷口を見ようものなら卒倒してしまうほどの貧弱ぶりなのです。八瀬君の青あざを思い出して気分が悪くなったわたしを姉様は優しく抱擁しました。顔を擦りつけて笑います。

「優しいね。心配したんだ」

「部活中に転んだといってました。僕、運動が嫌いになりました」

体を揺らし指をカタカタと刻みます。

「うんうん、そこは昔も今も変わらないなあ」

「そう……ですか」

「うん。あ、それで、誰がその八瀬君に怪我を負わしたと思う？」

「えっ？」

それは一体どういうことなのでしょうか？

わたしが答えを待ちわびていると姉様は鼻歌を歌い始め、静かに目を閉じました。

「答えは……いつか、わか、るよ。ひとは……過去をオウ……からね」

「あの、おやすみなさい」

「おやすみ」

7頁

小鳥のさえずりに浅い眠りから目が覚めて、わたしは意識を覚醒させました。

白い天井、高い天井、わたしに少しばかり絡むようにして眠っている姉様。カーテンから浅く漏れる弱々しい光。

すべてがすべて新鮮なそれ。どこかで見たことがあるような違和感と既視感の混ざり合うなんとも表現しがたい感覚にわたしは目眩を起こしそうになりました。

壁掛けのシンプルな時計はまだ起きるには早い時間をわたしに教えてくれています。

姉様を起こさないようにそっと体を起します。温もりは肌から薄く剥がれ落ち、朝の冷たい空気にぞわりと侵食されました。初夏なのですけど、まだ朝や夜は少し寒いのです。

わたしは部屋を出て、トイレで用を足すと、足音を立てないようにゆっくりとリビングへ向かいました。ガラスの嵌め込まれたドアを開きます。

「おはよう」

そう呟いたのは母様でした。細身の体をソファにどっぷりと浸からせて、早朝のテレビに目を向けています。

母様は冷淡とした顔立ちの方で、酷く表情に感情というものがありません。失礼かもしれませんが人というよりも機械といった方が相応しい、そんなお方です。恐らく、今ここに隕石が降ってきて、それがわたしの脳髄を砕いたとしても母様はきっと驚かないでしょう。

普通ならば付き合い難いと思われるかもしれませんが、でもだからこそ、わたしには付き合い易い方です。

それは何をしても当然の事象だと受け取ってくれるから。わたしはもう既に前のわたしとは違う生き物だと分かってくれているから。

彼女にとってわたしは前の記憶をうちに秘めたデータボックスでしかないのです。もしくは研究材料、といったところでしょうか。

「おはようございます」

「酷く感情の欠落した表情だ。いや、これは私が言えたことではないな」

「……前の僕は違ったのですか？」

「前の君も大きく違いはない。君は生まれつき感情を表に出すということが苦手な性質をもっている。もっと厳密にいうなら自閉症という表現が適切だろう。君は十代の青年が一般的にすることよりも庭でアリの行列を見ている方が好きな人間だった」

それは凄く素敵だと思うのですけど、世間様は違うのでしょうか。

「そうですか」

「これも混ざりモノの結果かな。いや、これはこちらの話しだ。……しかし、いくら過去を追ったところで君にその意味はないように思えるが、どうしてそんなに自分を知りたがる？　いや、過去を知ることで自分のアイデンティティを確立させようとしているということは分かるのだが、君らしい君の思う答えが聞きたい」

ガラスの小さなテーブルに置かれたカップを（匂いから鑑みるにコーヒーでしょう）口に運び、コクコクと飲まれています。

「僕はどこにいっても孤独です、だから……」

「孤独だから“他人の記憶”で孤独を埋めようとしているか。それは自分が傷つく行為だよ。その記憶は君のものではないのだから。その記憶を頼りに動いても、その記憶らしく振舞っても体には、心には違和感が付きまとう。少しでもそれらしくないことをしてしまえば酷く君は傷つくことになる」

「そう……です」

「一度割れてしまった花瓶はもう元には戻らない。どんなに戻そうとしても、それはひび割れた別物で、どんなに同じようなものを作ったとしても、それは似たような何かでしかない。はっきりいえばいい。自分がここにいていい証拠が欲しいのだと、前の自分に向け

られた優しさではなく今の自分に送られる優しさが欲しいと」
　酷く機械的な声色と表情で彼女はそう答えました。わたしのことは一度も見ないで、ただ独り言のように。もしかしてわたしはここにいなくて、わたしは幽霊のように透けているのではないだろうかと不安になるような態度で。
「記憶のない君は酷く自分が不確かだ。自分の存在を証明する為の“何か”が欲しい。自分らしさが欲しい。今、そこに存在しているという確かな何かが……。しかしね、そんなもの、今から作るしかない。自分からどうにかして。それができないから苦しいのだろう」
「……母様は僕が記憶を取り戻した方が嬉しいですか？」
「ああ、その方が嬉しいだろうね」
　そう告げ、しかしと区切ります。
「しかしね、一度失ってしまったものを執拗に求めようとするほど私は貪欲ではない。もう私の息子は死んだ。私はそう思っている。“彼”は違うらしいがね」
　悲しい一言です。でも少し嬉しかった。
　わたしはわたしでいいのだと言われているようで、少しだけ。
「おいで」
　母様はそこで初めてわたしを見ました。頬は小さく歪み、シニカルに笑っているように見えます。
　細く白い手をわたしに伸ばしました。わたしはそれをおっかなびっくり掴みます。母様はわたしを引っ張り、胸元に寄せました。
「わっ」
「君はもう私の息子ではないのだが、君にとってはまだ私は母親なのだね。それを今、思い出した。思えば私は前の君にも、今の君にも母親らしいことなんて何一つしてやれていない。今それを果たそうと思う」
「……はい」
　わたしもそっと母様を抱きしめ、甘く漂う匂いに体の力を抜きました。大きな温もりに体の緊張をほぐしました。

ただひたすらそれは……。

少しばかり母様の温もりに甘えていたわたしは、しなくては行けないことを思い出し、母様に訪ねました。

「あの、家族の写真はどこにありますか？」

「そんなもの見ても、今更意味はない……が、君が望むならきっと意味があるのだろう。確か家族の写真はあの子の部屋にあったと思う」

「ありがとうございます」

「ついでだ。起こしてやってくれ。彼や君と違って、あの子はなかなか起きないからね」

「……はい」

わたしはリビングを後にし、自分の部屋に戻りました。

そっと扉を潜り、床の上で微睡（まどろ）んでいる姉様を優しく揺すりました。

「あの、朝ですよ」

「んん……」

「朝です。起きて下さい」

「や……だあ」

布団を被り、顔を隠されました。わたしはカーテンを開いて朝日を部屋の中に取り込みます。

寝ぼけているならと、わたしは言い出しにくいことを進めておこうと切り出しました。

「あの、姉様の部屋にあるアルバムを見てもいいですか？」

「好きにして……」

「またあとで起しに来ます」

「あいよー……」

放っておけば何時までも眠りこけていそうな姉様を少し心配しつつ、部屋を出ました。

一応、姉様の部屋の扉をノックしてから入ります。ノブを捻り、扉を開くと自分の部屋とは違う生活臭が鼻を掠めました。目前に広がる姉様の部屋はモノトーン調の色合いで、とても洒落ているように思えました。窓際の四角いテーブルにはマッキントッシュのノートブックがスクリーンセイバーの状態で放置されています。わたしの監獄のような何もない部屋とは大違いです。

黒い本棚からわたしはそれらしい分厚いアルバムを取り出し、いくつか床に重ねました。床に正座し、一つ目を開こうとした瞬間、バンっと扉が開かれました。

見上げた先にいたのは姉様でした。彼女はズンズンと室内に入り込み、マッキントッシュのパワーを強制的に落とすと、わたしが重ねたアルバムのいくつか手に取り、本棚に戻します。

あの、それまだ見てないのですけど……。

「何してるの？」

「あの、写真を……」

「そういうのは私がいる時にしてくれる？」

「……はい」

「人が寝ぼけてて、ワケが分かんない時に言質取るって酷いよ」

「あ、ご、ごめんなさい」

「分かったならいいけど、次からはやめてね」

「……はい」

「君の写真、大体それに収まってる。こっちのはプライベートな奴だから見ないで」

「はい、すみません」

「それ持っていっていいから出てってくれる？」

「……はい」

酷く冷淡な顔で姉様はわたしを見つめました。わたしはフラフラと立ち上がり、失礼しましたとお辞儀して部屋を出ました。

あの顔はまるでそう……母様のような。いや、それよりももっと。

少し、わたしは泣きました。

8頁

雨に打たれる捨て犬のようにトボトボと階段を降りてリビングに向かいます。父様は既にテーブルに座っておられました。わたしは対面する位置にあるソフォに腰を下ろし、静かにアルバムを開きました。

「おはよう」

「おはようございます」

父様は眠そうに欠伸をされています。少し肥満気味なお腹が青いパジャマの中で膨らみました。

わたしの視線に気がつかれたようで、彼はにこやかに笑いました。

「今日も可愛いね」

「あ、ありがとうございます」

「足もスベスベしてて」

「えっ……」

「うなじと首のラインが綺麗で吸いつきたくなるよ」

「えっと、その、ありがとうございます……？」

「はは、お尻触らせてもらってもいいかな？」

「……」

「足の指もナメナメしたいな」

「あ……えっと」

明朗、爽やかにそう言われたのですけど、わたしはそこで固まってしまいました。父様の口からは常会話のようにその言葉が紡ぎだされたのですけど、わたし基準で言えば多分それはセクシャルなハラスメントになるのでは……などとおこがましくも思うのです。

東さんに同じようなことといわれた時はわたし、どうしていたのでしょうか。確か、嫌だといってもどうせ触られるのだと無言を通していたような気がします。

「お父さん、変なことというのはやめなよ。固まっちゃってる」

「ははは、前だったら直ぐに対応してくれたんだけどね。やっぱり結構重いみたいだね」

姉様がいつの間にかわたしの横に立っていて、頭をぽんと撫でました。父様はどこか役者のような笑みで肩を竦めます。

どうやらわたしは試されていたようです。どこまで記憶障害があるのか、といった感じに。

母様は相変わらず我関せずといった感じです。

「……あの、何度も聞くようですけど、僕は一体どうして記憶を失ったのですか？」

母様が焼きあがったウィンナーをお皿に移しながら言いました。

「結果は不定だ」

「不定だ、なんていわれても、それだけじゃ納得できないでしょ？もっと優しくこれまでの過程を話してあげないと駄目ですよ」

父様がそう言います。姉様は気だるそうにイスに腰を下ろし、目で「そろそろ朝食の時間だからそれをしまって席につきなさい」といいました。

わたしは開いたばかりのアルバムをパタンと閉じて、立ち上がります。

少しだけ姉様が怖い気がするのは気のせいでしょうか。もしそうならわたしのせいで自業自得なのでしょうけど。

「ある日、君は家のベットで痙攣してね。君のお姉ちゃんが発見して病院に連絡、それから僕らのいる大学病院まで運ばれて検査、のちに手術。切っ掛けとしての因子は君の脳みその血管が破裂したってことなんだけど、まあこれはいいか。その後、障害が残ることもなく君は無事だったわけだけど、それ以外のものが……つまりね、そう、記憶がなくなっていたんだ。ああ、そのまま食べていていいよ？　えっとそれでね、普通そういう場合の記憶障害ってのは全てが消えるんだ。この意味、分かるかな。歩くという意味も食事を食べるということの意味も、この……ウィンナー、うん、美味しいね。これの味も含めて全部失われるはずなんだ」

「僕は違うのですか？」
ここまで深く話しを聞くのは初めてです。
フォークに刺した食べかけのウィンナーを口に放り込み、父様は首肯します。
「うん、全然違う。君はウィンナーが何かということをちゃんと認識してるしデータとして持っている。ありがたいことに一般的な記憶喪失者と違って糞尿を垂らすこともないし、食事の意味や言葉をいちから教えなくても君は分かっていた。しかし一方で人間に関する記憶、それに準ずる記憶というものが一切消滅してしまっている。これは非常に興味深い症例なんだ。僕と彼女はそれが脳生理学的なものなのか心理学的なものなのかを日夜、研究し、議論してる。どちらよりなのか、でこれからの脳や心に対する見解は大きく変化するだろうね」
「そう、ですか」
はっきりとお前は研究材料として生かしてやっているのだといわれたような気がしました。
少しばかりスローペースになったわたしの食事速度に敏感に気づかれた母様が父様の頭をパシリと叩きます。「いたっ」と頭を父様はさすりました。
「……あっ！　い、いや、もちろんひとりの人間として君のことは心配だと思っているし、記憶が戻るなら嬉しいさ。そうじゃなくても、僕は一向に構わない。こ、これから思い出を作って行けばいい」
「いえ、いいんです」
空になったお皿を台所に運びます。母様が小さく「偉いぞ」と仰いました。
「ああ、その悲しげな表情も凄く可愛らしいなあ……ウフフ」
「……」
どうやら先程の発言は試されていた、というわけではなかったようです。
わたしは思い出したように「ごちそうさまでした」といってリビ

ングを出ました。

昨日よりも早い時間帯。浅い眠りに包まれた町並みをわたしの靴がコツコツと音を奏でます。

不意にテンポを狂わす別の靴音。

「おはよー」

「……おはようございます」

後ろから駆けてきた東さんが横に並びました。

「朝寒いねー。昨日薄着で寝てたら寒くて寒くて……うわーって感じ」

「そうですか」

「そうですか、じゃないって！　その反応ありえねー！　もうあれだよ、超友好的な宇宙人くらいありえない存在だよ」

「仲良きことは美しきかな、とも言います」

「あー、もうそうじゃないんだよ。なんつかさ、わたし結構必死なわけですよ。今日もこうやって必死な感じ。分かるかなって……分かるわけないか」

「この時間帯なら遅刻はありえないです」

「別に遅刻を心配してるわけじゃないって。なんていうかさ、昨日は完敗って感じなわけなのさ。距離は遠いし、相手は強いし……って感じ？」

妙にテンションが高く、饒舌な東さん。今日は一体どうしたのでしょう？

普段以上に明るい気がします。眠りこけているこの町も起きそうなくらいの明るさといった感じでしょうか。

「わたしにゃ、あの人にはない武器があるのさ。この美貌とかこのカモシカのような美脚のことじゃないわよ？　そりゃ、ちょっとは自信あるけど、でもここでは意味ないのよ！」

ぐっと拳を振り上げ彼女はそう謳いますけれど、わたしはどうすればいいのでしょう。経験上、そうですかで済ますと相手は怒りま

す。
　正しい選択は沈黙、でしょう。
「……なんか言ってよお。綺麗だよとか可愛いよとか美人ですねとか足が綺麗ですねとか愛してますとか見目麗しゅうございますとか」
「風邪引いてます？」
「いうにことかいてそれかっ！」
　ポコンと頭を叩かれました。痛いです。
「あのね、私は学校では誰よりも君の側にいた人間なのだよ？　君のことをよく知っている人なわけ。君がどういう人間で、何を考えて、どんな食べ物が好きで、どの教科が嫌いだったかとか」
「……東さんは僕のストーカーだったんですか？」
「アホかっ」
「……痛いです」
　同じところをまた叩かれました。
　ああ、そうです。今、叩かれたことで姉様にいうように言われていたことを思い出しました。
「あの」
「ん？　なにさ」
「昨日姉様とホテルに行きました」
「……楽しかった？」
「わりと」
「……ほー、一緒に寝てたんですか。それは仲がいいですねぇ」
「いえ、ベットは使いませんでした。床で一緒に」
「ほほう、それで？」
　急に静かになった東さんはニコニコと微笑みながらわたしを見ています。
　わたしは何か面白いことをいっているのでしょうか？　人を楽しませる、という経験はあまりないのでちょっと嬉しいかもしれません。
「家に帰ったあと姉様が夜這いをしに僕の部屋に来ました」

「……また寝たわけ。それは随分、疲れたでしょーね」
「あ、はい。あまり寝れませんでした。ちょっと体が痛いです」
「ふうん」
ピタリと急に東さんが止まりました。わたしはどういうことだろうと振り向き、その場で止まります。
下を俯いている彼女の表情は陰っていてうまく見えません。
「お腹痛いんですか？」
「……」
「大丈夫ですか？」
ちょいちょいと手がわたしを招きます。わたしがそっと近づくと彼女は後ろに周り……ぎゃあああ！
「ここが、ここがええんか！？　ここをたっぷり可愛がってもらったんか？　ああん？　ええんか、いうてみぃ？　こうやって昨日、体を弄ってもらったんか？　このど淫乱がっ！　そうやって昨日も乱れたんか？」
ぎらりと光る彼女の顔がわたしを舐めまわし、体を……。ざらざらしてる！　首が、いやその前に服の中に手が、いえ胸をまさぐっ……ああっやめ、ああっ！！！！
「ーーーーっ！？」
「これか！？　これがええのんかあああ！？」
誰か助けて。

9頁

「うっうっうっ……」

散々弄ばれたわたしはゼイゼイと息継ぎをして、はだけた胸元と乱れた髪を整えます。首のヌルヌルとした唾液と制服の乱れも気になるのですけど、とりあえず見えるところから。

彼女は額に汗を浮かばせながら（でもどこかすっきりとした顔で）ふうと息を吐き、白い歯を見せました。微笑みです。反省など微塵も感じさせない微笑みです。

「ホテルってそういう意味だったのね。なーんだ、てっきり違う方かと思っちゃった」

「うーっ」

きっと睨むのですけど、彼女はわたしの目線を心地よさそうにしています。

「そんで、夜這いも添い寝のこと……と。まー、これは万死に値するとか個人的に思うんだけどさあ」

「何を、想像、してたんですか……っ！」

「いひひひ、今度じっくり教えてあげよーか？」

「……っ！」

彼女の目に少しぞっとしました。悪寒です。寒気です。

わたしは朝から何をやっているのだろうと頭を切り替えて、服を正し、道を歩き始めました。東さんが後ろから追いかけてくるのですけど、無視します。

「置いてかないでよー！　ねえ、おーい？　聞いてますかー？　あーん、ごめんよう！」

「……」

ええ、無視です。

「ねえ、待ってってば」

「……」

前に回り込まれました。
すっと横にずれて通り過ぎました……が、左手を掴まれました。蒸れた手がわたしの乾いた肌に重なって、熱がじわりじわりと伝播するのが分かります。彼女はわたしの手を頬に持っていくと、悪びれた様子でわたしを見つめました。
「……ほんとごめん。すぐ早とちりしちゃうのが私の悪い癖なんだよ。ねえ、許して。君に嫌われたら……生きていけない。君に捨てられたら私は私じゃなくなっちゃう」
「お、大げさです」
「大げさだよ。大げさなほど君と一緒にいたい」
「わ、わかりました。もういいです」
「……ありがとう！」
しっぽを振る子犬のようにつぶらな瞳は見開かれ、顔は光に充ち満ちていきました。彼女はわたしの手を握ったままピョンと飛び跳ね、さあ行こうと胸を張って前へと歩き出します。
どうでもいいのですけど、指を絡めるのはなんかその……やめてほしいのですけど。
「覚えてる？　初めてあった時のこと」
「僕は……」
「そう……だよね。覚えてないよね。あの日はさ、こんな爽やかな朝じゃなかった。進学したばかりの人間がこの道を歩いていて、私も君もその中の一人だった。みんな新しい生活にドキドキしてて、ワクワクしてて、いろんなことを期待してた。そんな緊張した朝だった。
私、学校なんてホントは行きたくなかったんだ。知らない人が怖くて不安だったの。でも家の関係とかのせいでいっとかなくちゃいけなくて……あ、今、意外って顔した。私だって、そーゆーのあるよ？　ああ、それでね、君が私のハンカチを拾ってくれたのが最初の出会いなんだよ？　私ってさ、ほらなんつーか男勝りって感じじゃん？　オッサンとかデカ女ってみんなもいうし。だからさ、

ピンクのファンシーなハンカチ落としましたーなんて言えなくて、君が持ってるそれを私のデス！　って言えなくて悩んでたんだ。そしたら、そしたらね、君が私のところまできて、ハイって渡してくれたんだ。誰かに聞いたりせず、騒ぎ立てたりせず、当たり前のように。クラスの雑踏の中で君と私だけが音で、動いてる何かのように思えた。それでね、何でって聞いたのかな、あたし。えっとね、そしたら君はこういったんだよ」

――何で私のだって？

――……君って感じがしましたから。

「それが何よりも嬉しくて、すっごく恥ずかしくて、私はその時から君と一緒にいたいって思ったんだ。一緒に話したいって思ったんだ。君の無表情のその心の奥にはどんな気持ちがあって、どんなことを思ってるんだろうって知りたくなったんだよ」

「そそそ、そうですか」

力強く握られる手は汗ばみ、彼女の頬は火照る。わたしも何故か気恥ずかしくて、何だか告白を……あるいは口説かれているような気持ちなって額に汗が乗るのです。

夏のそよ風はこの空気には少しばかり熱すぎます。

平常を保つのですけれど上手くできているでしょうか？　若干、呂律が回っていないような気がしたのですけど。

そういう場面になるとからかうはずの彼女がじっと押し黙っているので大丈夫でしょう。ああ、手汗が酷い。わたしの手汗……なのでしょうか？

「あ、熱いね。今日は」

「そ、そうですね」

その日は妙な一日でした。どこへいっても彼女がついて回るのです。子犬のようにわたしの周りをクルクルと囲い、どこかに行く度に「どこへ行くの？」と訪ねるのです。

購買といえば購買までついて行くといい、職員室まで行くといえ

ば、手伝うといってプリントを持ってくれます。親切は嬉しいですし、助かるのですけれど、みんなに見られているのが少し、いやかなり恥ずかしいです。

そしてその度に神足さんが不機嫌そうな顔でわたしを睨むのですけれど、わたしは別に悪くないと思うのです。自分でできますと答えても、彼女はわたしの話しなのど一語たりとも聞いておらず、一人で行くといっても「早く行こうよ」と手を引くのです。お弁当を片手にそっと出ようものなら、先回りして微笑んでいるのですから、もう始末に負えません。

「へえ、それでまた神足って子にぶたれたんだ」

よしよしと姉様はわたしのへそのあたりを撫でました。わたしはくすぐったいのを我慢して、身を固まらせます。指をカタカタしたところで姉様は「あ、ごめん」と気だるそうに微笑まれました。

「触られるの、好きじゃないもんね」

「……」

「んーとさ、話しを戻すけどね、君、凄く嬉しそうだよ。あんまり苦になってないって顔してる」

「そうですか？」

「そうですよ？」

フフッと姉様は笑われました。体をベットに倒して筋を伸ばされました。

「ちょっとだけ、ちょっとだけなんだけど、悔しいな」

「何故ですか？」

「何故だと思う？」

「……分かりません」

「だからだよ」

「えっ？」

姉様は身軽な動きでふわりと体を起こすと、一度も振り返らずいいました。

「もう、遅いから寝るね。お休み」
「お休みなさい」
扉は固く閉じられました。

わたしの言葉に一瞬ばかり目を丸くさせた後に嬉しそうに彼女は微笑みました。
「ふーんへーえほーお、悔しいっていったんだあの人。それはそれは、ひひひひ」
「どういうことなんでしょう。東さんは分かりますか？」
ピアノの鍵盤をひとつ、ポロンと人差し指で押して、彼女は言います。
「分かるよ、分かるけど……教えてあっげなーい」
「むっ……」
最上階の音楽室、誰もいない教室で彼女はそう言いました。お昼が終わったばかりで室内には私たち以外誰もいません。いつも傍について離れないはずの神足さんも。
「そういえばさ、私が初めて君に声をかけれたのもこの部屋だったっけねえ」
「そうなんですか」
「うん、君に話しかけたくても上手く言葉に出せなくて、ずっと君に話しかけれなくて。とにかく緊張しちゃってさ……。同じ部屋にいたのに私ずうーっと窓の外眺めてさ。そしたら君、このピアノで“猫ふんじゃった”を引いてくれてね。私がぼうっとそれ見てたら、君がどうしてそんなに辛そうな顔してるんですか？　っていってくれて、それで初めて君に声かけれたんだよ」
――なんで猫ふんじゃった、なの？
――僕、これしか引けないのです。
「なんだか、その……」
わたしは俯いてしまい、言葉は口から出ません。恥ずかしくて出ません、見れません。

そんなわたしをあっけらかんとした顔で笑い、彼女は口を開きます。
「うん、すっごくロマンチックだった！　うひひ」
「……で、ですね」
「ねえ」
「はい」
「あっあっあっ、あのあし、あのさ、明日さ」
「はい」
「明日の土曜日、うちに来ない？」
「はい……えっ？」
「決まり！　決まりだよ！？　待ったはなーしっ！　なしだからね！」
「えっ！？　あの、ちょっと……」
「聞こえない、きーこーえーなーいー！　うひひひひうほほほほ」

１０頁

トボトボと休日の昼間から道をぶらついているのは何故でしょう。姉様に東さんの家にいくと答えたら見たこともないような美しい笑みで舌打ちをされ、長時間に渡って口付けをされたのは何故でしょう。

わたし、自分が悪いことをしたとは思えないのですけど、やはりわたしが悪いのでしょうか。

そんなことを考えつつ、わたしは「だいたいこの辺」と描かれた簡素な地図を片手にトボトボ道を進みます。川原の緩やかな曲線を進み、すっかりと緑色に染まった桜並木を抜けた先の長い長い坂を越えたところにその家はありました。

特別大きいとはいえません。かといって小さいとはいえません。ただ分厚い門構えから東さんの家がお金持ちだということはよく分かります。

武家屋敷のような門の隅に小さなインターフォンが備え付けられています。わたしはそちらに寄り、緊張を落ち着けながらそっと指を……。

『わあっ！』

「っ！？」

急にインターフォンのスピーカーから流れた音にわたしは驚き、その場で息を止めました。まだわたしはボタンを押していないのですが、一体どういう事でしょう。

『あ、びっくりしたあ？　ほら、上……そそ、そこにカメラついてるでしょ？　そっから君が緊張して五分くらいじっとしてるのが見えたからさ。あ、いま扉開けるよーん』

「……」

少し恥ずかしいです。わたしがここらへんでずっと固まっていたのを彼女は見ていたということなのですから、それはもう。

カタンと音がしてマトリョーシカのように大きな門につけられた小さな門が開きました。へへっと笑いながら彼女がそこから首を出しつつ、チョイチョイとわたしを手招き。わたしは誘われるがままにそちらへと足を運び、門扉を潜りました。石畳の上を歩きつつ、周りに目を運ばせます。

「どう？」

「え？」

「今、うちの庭見てたじゃん？　自慢の庭だからさ、どうかなと思って」

語彙の少ないわたしにはそれを表現する言葉が見つかりません。だからわたしはシンプルに思ったことを口走りました。

「綺麗です。凄く」

「うむ、よろしい！　して、ちみ」

「はい」

「拙者の服装を見て何かいうことはないのかね？」

「えっと……」

今一度、彼女の服装に目を向けます。ふふんと両手を組んでふんぞり返っている東さんは模様の少ない、緑色の着物をお召になっておられます。緑というよりも黒に近いかもしれません。

わたしはフルに脳を働かせて考えます。姉様が下着を見せに来たとき、普通と答え、がっかりされた顔を思い出しました。

だから、多分これで大丈夫。

「凄いです」

「……んん、なんか答えが変だけど好意的に捉えておこうかね！　ささ、入られよ、お客人！」

くるりと身を翻し、彼女はガラス戸を開きました。普段セミロングの髪型が頭の上で纏められていて、うなじがちらりと顔を覗かせます。

「ん、どうしたの？」

「いえ、別に」

ぽっかりと口を開けた玄関にわたしは足を滑り込ませました。

「あの、それで僕はなんで呼ばれたのでしょうか」

わたしは勇気を振り絞って、彼女に問いかけました。彼女は羊羹をパクリと口に放り込み、モグモグと咀嚼させ、飲み込んでから答えます。

「ああ、さっきから妙に緊張してたのはそのせいかね」

「かもです」

「私が君と話したかったから、じゃダメかな？　それ以外は特にないんだけど。っていうかこの栗羊羹ウマすぎじゃない？　母ちゃん、あたしにいつもテキトーなお菓子しか出さないくせに、客人にゃこんな旨いの出してたのか……」

「……」

平たい楊枝を使いまた口に運びました。甘いと言いながらお茶を啜り、ニコニコと微笑みました。

わたしは少し居づらさを感じます。ここは東さんの部屋で、いたるところに彼女の香りや印のようなものがあって、なんだか頭がクラつきます。

「あの、お母様がいらっしゃるのですか？」

「んんー？　誰もいないよ」

「誰もいない？」

「うん、今うちのおかあちんは遠い遠い離れ小島へと里帰り。あたすは学校があるので、居残り。んで料理とかできないからさ、美雪にやってもらってんのさ」

「では今はお父様と神足さんと二人で？」

「んー、とうちんはどこにいるんだろ？　たまにおかあちゃんが捕獲してくるけど、よく分かんないや」

「……」

どうやら東さんにとって父というものはそのへんで捕れるような生き物を指すようです。わたしがもう少し、表現を厳密にして訪ね

てみようか考えあぐねていると彼女は羊羹を楊枝で崩しながらいいました。

「それに両親がいたら君を犯せないじゃあん」

ぱくりと一口。わたしは羊羹へと伸ばしかけていた楊枝をピタリと止めて顔を上げました。

今、なんと彼女はいったのでしょう。

犯せない？　犯すの意味は、流石にわたしも理解しています。でもそれはつまり、無理矢理に相手を……ということではないのでしょうか。

「あの……それってどういう」

「どういう意味もないよ。隅に布団たたんで置いてあるでしょ？　あの上でくんずほぐれつするのさ」

ニコニコ笑いながら彼女はお茶を飲みます。わたしは彼女なりの冗談なのかと思い、きっとそうだと勝手に決めつけました。いつの間にか羊羹をかたした彼女は「よっこらせ」と体を持ち上げ、トコトコと畳の上を歩き、隅に向かうと布団を敷きました。わたしが楊枝を咥えたまま呆然とそれを見ていると彼女は言います。

「私ねー」

「は、い」

「腕枕が好きなんだー。だからね、枕いらないよね？　あ、でも君が枕使うかなあ？」

一応置いておこうと彼女は独り言のようにいい、枕をひとつ雑に布団へ落とします。わたしは怖くなって震える足を立たせて「どこいくの？」

「あの、ご馳走様でした」

「恥じかかせないでよ」

手を掴まれました。酷く汗ばんだ手がわたしの手首を掴んだのです。

「ねえ、わたし君のこと好きだよ」

「……」

「君がさ、お姉さんに私のこと聞かれて好きでも嫌いでもないって答えたとき、凄く悲しかった。あの後、たくさんたくさん泣いたよ。おかしくなりそうなほど、嫉妬した。君のこと、好きで好きで好き過ぎて頭がおかしくなりそうなんだ。君がさ、無表情の君が笑った時のあの可愛らしい顔が好きだよ」

ぐるりとダンスを踊るようにわたしは彼女の方向を向かされました。

わたしは無言を通し、東さんから目を逸らすのですけど、彼女は言葉をやめません。

「ちょっと体触っただけで凄くくすぐったそうにするのも好き。子猫って感じでさ。ぼうっとしてる時の君も、笑いを堪えてプルプルしてる君も、驚いた時の君も、優しい君も、全部全部好き。凄く可愛くて、ぎゅって抱きしめたくなる。君とセックスしたい。君が全部欲しい。それじゃ、ダメ？」

「あっ、あっ、あっ」

「凄い震えてる。心臓がバクバクいってる。あたしも君も。ねえ、だめ？」

頬を優しく、でもどこか煽るように彼女はべろりと舐めました。

わたしは必死に羞恥に耐えて、彼女から目を逸らします。

きっと彼女の目をみたらダメになる。そんな気がします。

引き込まれるような、そんな気が。

「私ね、処女じゃないんだよ。初めての相手、誰か知ってる？」

首をゆっくりと振ります。抱きしめられた腕の中で、ブルブルと震えながら。

その答えをわたしは知っている。いや、分かっている……だけど。

彼女は布団にわたしごと倒れこみいいました。

「最初の相手は、初めてを私から奪ったのは……君。この意味、分かる？　いくら鈍い君でも分かるよね。それがどういう意味で、私たちがどういう関係だったのかって。だから悔しくて、嫉妬してたんだって」

「うっううっううう……」

そ、それは、前のわたしで今のわたしじゃ……あ。

顔が固定されます視線が交差します瞳がわたしを覗きわたしが瞳を覗き彼女の首は横に傾き、閉じられた瞳はゆっくりと這うように、閉じられた唇はゆっくりと這うようにわたしにわたしにわたしにわたしにわたしにわたしに。

わたしへと。

彼女にとって私は。

11頁

はなせはなせはなせはなせはなせはなせはなせはなせはなせ！
離して。
わたしはそれを望んでいない！　今の私はそれを望んでいない。
彼女はわたしを見つめます。腕を振りほどいて後ずさるわたしに距離を詰めながら。
「ねえ、どうして」
ぷんと鼻を掠めるやわらなか匂い。女性の匂い。
「私のこと嫌い？　少しも興味ない？　私、君が好きだっていってくれるなら何だってしてあげれるよ。君が知らないこと、知りたいこと教えてあげる」
彼女はそういって笑います。わたしに微笑みます。赤い舌ベロで唇を湿らせながら、笑います。
ですけどわたしは。
「私といて、苦しかった？　辛かった？　嫌じゃなかったでしょ？　ここちよかったはずだよ。だって私と君は……」
「今の僕は僕で、前の、僕はぁっ」
「今の君も好き。それじゃダメ？　それともお姉さんが好きなの？」
目が薄くなってわたしを見る。わたしを。
あとの詰まったわたしは馬乗りにされて、両手を抑えられて、匂いがわたしを侵食して行く。匂いが温もりが、熱いくらいの湿り気が、わたしの上でのたうつ。蛇のように、ナメクジのように絡みつき、少しづつわたしの殻を衣を溶かしていくのです。咀嚼に似た、それが。
ガラスの光がわたしの目を眩ませます。彼女の顔を撫でる舌ベロが視界を遮ります。一つづつ丁寧に、体のパーツを確かめるようなその動きが、生物的なその動きが。
「ねえ、どう？　答えてよ、ねえ」

「うっうっうっ」
目を見るな目を見ちゃいけない。魔物だ魔物の目だ。わたしを食い破りそれを気づかせない魔物の目だ。わたしの半身がもがれてもそれを気づかせない魔物の目だ。
彼女はわたしの服を脱がせます。わたしのズボンの中を彼女の片方の手がまさぐります。
誰か、誰か助けて下さい。助けて下さい。
大きく膨らんだわたしの頭を、心を見つめながらわたしはそう思いました。わたしが思いました。
それを分かっているはずの彼女はやめてくれません。東さんは衣を、殻を脱いで、わたしとひとつになろうと、して。
襖の開く音。
「御前……、何を、して」
「あっあっあっ……」
願いが聞き届けられた。
願いが、叶えられた。
わたしはきっとイビツな笑い顔なのでしょう。彼女が、神足さんがイビツな表情を浮かべているのだから。
彼女はテーブルをポンと乗り越えて、わたしと東さんを剥がしました。くるりと廻るようなケリがわたしの頬を殴打し、わたしは真横に飛びました。本棚に激突し、バラバラと本がわたしの頭の上に雨のように降ってきます。
東さんが何かいっています。神足さんは聞いていません。わたしは頭を持ち上げられて、前には堅そうなテーブルが……がつん。
「……！」
何かいっているようですけど聞こえません。耳がキインとしていて上手く聞こえません。視界が真っ白と真っ青が混じったパステルな色合いでよく分かりません。斑模様の視界と分厚い紙を間に挟んだような声で何も分かりません。
少しづつ視界が戻ってきます。何かが、わたしの顔を殴っていま

す。誰かは東さんに肩を掴まれていて、何か言われていて、首元を掴んで拳がわたしの顔を何度も、ぐしゃりぐしゃぐしゃ。
酷く冷えた顔で彼女はもう一度わたしの頭を上げて。
机に。
頭。
ぶつん。

暗い暗い土蔵の中、わたしは首に輪をはめられ、地面に寝そべっていました。首輪にはジャラリと重い鎖。先は大きな柱に繋がっています。引っ張っても簡単には取れない手応えです。
高い天井の小さな窓から漏れる光はあまり時間の経っていないことをわたしに教えてくれました。
白い壁とむき出しの地面。壁際には時代劇でみるような座敷牢がいくつも連なっています。
ここはどこなのでしょうか？　単純に考えるのなら東さんの家の端っこにあったアレなのでしょうけど。
「私らは……」
「あっ」
「私らはな、自分の主人を命を張ってでも守らなければいけない。神足の家は代々そうして生きてきた。それは御前自らやったことでも言えることだ。当然、露払いも私らの役目だからな。だが、個人的心情から私はお前に謝罪をしたい。……すまない」
青い甚平姿の神足さんがすぐ隣の暗闇からわたしに声を掛けました。わたしは内心酷く怯え、心臓を縮ませたのですけど、それはおくびにも出しません。
「どうしてああなったのかというのは御前から伺った。それでも一応、お前からの言葉も聞きたくてここに運んだ。首輪はパニックになって暴れられても困るからだ」
「あの、東さんは」
「強制的にお休みになっていただいた。酷いパニックを起こしてな。

無論、私のせいだ」
　少し、ほんの少しだけほっとしました。
　それが顔に出ていたのでしょうか、神足さんは壁に背をもたれさせながら歯を見せて笑いました。
「ははっ、そんなに安心したか。お前は御前が嫌いなのか？　御前に迫られるというのは光栄なことなんだぞ。そう、とてつもなく光栄なことだ。それをイヤだというお前は世の男どもに八つ裂きにされても文句はいえんな」
「あ、あ、あの、僕は救われました。だから……」
「ははははっ、救われた？　おかしな事をいうな。救われた。救われた、か。ははははははっ、救われたと。やっぱりお前は何も分かっていない。いや、だからこそ、か」
　酷く彼女は嘲笑的な表情を作り、笑いました。
「ああいうのは、その、イヤ、だから」
「ああいうのか。ああいうのとは、どういうことをいうんだ？　どうしてああなった。ここのところお前と御前は随分と親密のようだが何があったんだ？　全て話せ」
「え、っとあの」
「まずは……御前にされたことから教えろ」
　そういって彼女はわたしの……上に重なり、手を近づけ、その、顔を近づけました。
「この状態からどうなった？　ん、どうした検証をしてるだけだ」
「え、あっ、両手を塞いで、顔を舌で、僕の……顔を」
「顔を？　舐めまわしたのか？　こうやって」
　滴る唾液がわたしの額にぽたりと零れました。皮膚に当たるか当たらないかの距離を舌が行き来します。
　これは、何かが、おかしい。
「あの、口頭じゃ」
「だめだ。それでは何がどうなったのか分からない。さあ、ここで御前はどうした？　お前に乳房を揉ませたのか？　それとも唾液を

交えたのか？　お前の棒切れのような体をまさぐったのか？　なあ、どうなんだ？　早く答えろ」

息が熱い。何かぬるりとした嫌な汗がわたしの背筋を伝います。

何か嫌な感覚が。

嫌な匂いが。

女性の。

「お前が喋らないなら私の方で想像でするしかないな。お前は御前の乳房を揉みながら、御前と接吻したんだろ？」

「ちが……――んっ」

熱い。

にゅるにゅるした嫌なものが、唇を割って入ってきます。妙に力強く、暴力的な舌ベロが、わたしの中に……。姉様の時とは違う、これは、わたしを貪る、ような。

口端から唾液が溢れて止まりません。息が、追いつかない。

「ぷっ……甘ったるい味だ」

「はあっ、あ、あ、あ、あ、あ」

「ははははっ、何て色っぽい顔をしてるんだ、お前は。私はただ検証してるだけだぞ？」

彼女は熱っぽい目線でわたしを見つめて、笑います。それは……

……東さんのように。

今一度と、彼女の顔が近づきます。顔をそむけるわたしを鎖を引っ張って無理矢理にそちらを向かせました。口を固く噤（つぐ）んでも彼女は構わず舌を突き入れようとします。

あ、ぐえっ。

……それでも閉じ続けた結果、鳩尾に拳が叩き込まれました。開いた口に無理やり舌を入れ、中をかき混ぜます。

体重を全てわたしに預けるような重たい口付け。顔を両手で掴んだ彼女主導の暴力的な接吻。

片方の手がわたしの履き物の中に入って、下半身をまさぐります。わたしの反応を見ながら舌を混ぜ、手を動かします。わたしは涙を

浮かべてブルブルと震えるのですけど、彼女には関係がないようです。

わたしはわたしが壊れないように、潰れてしまわないように、消えてしまわないように必死に指をカタカタと動かします。

でも何も和らがない。

心は決して。

「んんっ！」

不意に熱いものが込み上げ、バチリとイヤな衝撃が脊髄を通りました。体が筋張ったように張り詰め、彼女に触られている部分が、ああ……うう。

ううううううう、うううううえええええん。

「ははははっ、達したな！　お前は私に触られて、私に口づけされて達したんだ。興梠（こおろぎ）、お前は御前ではなく、この私で！」

彼女はむせび泣くわたしに興奮した面持ちで高らかにそういい、ヌルヌルした手をべろりと見せつけるように舐めました。

わたしは、ただ、よく分からない感覚と彼女が恐ろしくて、涙を流しておりました。

ただひたすらに。

12頁

風の音。泣き声。
土埃の臭い。わたしの咽び泣く泣き声。
汗の臭い。肩で息をする彼女の汗の臭い。
胸を上気させて手についた液体をねぶる彼女の息遣い。わたしの閉じるような泣き声とは違う色合いの鳴き声。
「あの興梠（こうろぎ）が私で……私で」
「うーっ、うーっ……！」
「泣くな。まるで、これじゃ……私が悪いことをしているみたいじゃないか」
震えている。わたしとは違う震え。
「家に、帰りたい」
「あの、呪われた家にか？　家族全員が感情の欠如したあの家に？　帰ってどうする……？　私なら、私ならお前を……」
「か、か、か、帰りたい……です」
ぎりりと彼女は歯を鳴らせました。キッとわたしを睨みます。
「お前はっ！　お前は私が最初に目をつけたんだ！　この私がっ！　逃がすものか！　なのに、何故。何故、御前は！　……そうだ、御前は最初から八瀬の倅（せがれ）のような由緒ある家柄のものを迎えればよかったんだ。興梠のような半端者はあの方には相応しくない。そうだ、だから私がそうすれば、高貴な血を汚すこともない。ああ、これは主人のためだ。主人のために……」
彼女はそういって一人ぶつぶつと何かを呟きました。わたしは端っこに逃げて首輪を外そうと試みるのですが、手がブルブルと震えて力が上手く入りません。
カシャカシャと金属の擦れる音がするだけ。手に錆の色が移るだけ。
ぐっと首が引っ張られたこと思うと、ずるずると体が地面の上を

滑っていきます。スラリと伸びた細い腕で彼女がわたしの鎖を自分の元に寄せています。

それはまるで、蜘蛛が獲物を自分の元に引き寄せるかのように。

埃にまみれたわたしの頬を神足さんはそっと撫でました。

「興梠、お前、御前に犯されたいか？」

フルフルと首を振りました。

「そうか、残念だな。あの方はお前を犯したくてしょうがないようだぞ？　あの女性は家の方々は代々、色狂いの気があってな。聞くところによると好いた男を攫(さら)ってでも“こと”に及ぶそうだ。どうだ、そうなりたいか？　……そうか、なりたくないか。なりたくない。お前は御前じゃダメなんだな？　……じゃあ、じゃあな、わ、わたしがお前を貰ってやる。お前の血も肉も、髪の毛一本残さず私が！」

「あ、あ……」

「イヤとはいわせんぞ。お前が始めたんだ。お前が私を狂わせたんだ。お前が忘れても私は忘れちゃいない！　クラスメイトがざわめく音の中、お前が私のハンカチを拾ってくれたんだ。私には似つかわしくない少女趣味のハンカチを、お前が。私はお前に恋をした。無愛想な私と無愛想なお前ならきっと上手くいくと私は心を踊らせた。お前の時折、見せてくれる可憐な笑い声が大好きだった。お前と隣になった時の私の喜びが分かるか？　いつも寂しそうなお前をどれほど私が抱きしめてやりたかったか、わかるか？　なのに、それなのに……その後、御前がお前に惚れた。理由は知らない。言っていたかもしれないが、耳に入ってこなかった。ただ事実を呪ったさ。……そして叶わぬ恋だと諦めた。

全てが崩れた音がしたよ。生まれて初めてあの時、自分の主従関係を呪った。今まで誇らしかったものが煩わしく思えた。お前が隙を見せてくれるのは私だけのはずなのに、全て上手くいってるのに、何故あの方は水をさすのだろうと。

ああ、私は何を言ってるのだろうな。だけど何故だろう。凄く心

がすっきりする。ははははは、なんてことはない。私は御前に嫉妬してたのだな、それを認めたくなくてただ冷静を装い、お前に辛く当たった。これが私の正体だったのだな、本当の私だったのだな。……私の澄ました顔の内側に巣食うのもまた、鬼だったか。なあ、興梠、知っているか？　人が鬼になることを生成りというそうだ。私はあの日、あの時から鬼になっていたらしい。お前を見捨てたあの時から」

神足さんは立ち上がると泣き笑いのような奇妙な表情を作り、腹を抱えて笑いました。片方の手で目元を押さえ、もう片方の手でお腹を押さえています。

溢れ出る感情を抑え込むように。

一方、わたしは酷く混乱していました。

何故、彼女がそのエピソードを語るのだろうと。だってそれは東さんがわたしに語ったエピソードだったはずです。わたしを……その、好きになったというエピソード。

彼女も同じ体験をした？　いや、そんなことはないでしょう。

では、何故？

「ははは、どうしてだろうな。もう、何が何だか分からない。お前をここに連れてきた時は使命感のようなものが確かにあった。だがな、お前が身動きせず動かないのを見ていたらな、変な感情が湧いた。私の中のほの暗い奥底から奇妙な声が聞こえた。御前は眠っている、コイツも眠っている。何をしても誰も騒がないし、見ていない……なんていう醜い感情が。卑しい声が。笑ってくれよ、御前のためと息巻いてる女が、気がついたら自分の股をまさぐりながら、眠りけこけているお前の体を触っていたのだから」

この人は、危ない。何かが、圧倒的に何かが足りないのをわたしは感じました。

人として大事な何かが砕けて戻らない。戻ることができないのだと。

「かっ、帰りたい」

「……そうだな、今日は帰さなければ不味い日だからな」
彼女はふうと息を吐くと、いつものような冷淡な表情に顔を変え、ポケットからツルツルとしたおうとつの少ない鍵を出しました。感情の篭らない声で「上を向け」とわたしに指示し、首輪を外します。
おっかなびっくり自由になった首を片方の手で撫でていると、彼女はわたしを後ろの柱に押さえつけました。首筋を粘ついた舌ベロと唇が、あ、ふ、ゆっくりと行き来、します。
わたしはまた怖くなって泣き出すのですけど、彼女はそうする度に顔を赤く染め上げ、ぎらついた目でわたしを見ました。
わたしが止めてと言おうと、何度も口を開いたり閉じたり繰り返していると彼女は顔を持ち上げ、真剣な目でいいました。
「なあ、教えてくれ。どうして、お前と御前は急に仲を深めた？私の知っている、お前は全てに無関心で、滅多なことでは笑わない。自分のことも語らない、無口な奴だった。人に興味を持てないような奴だった。お前の笑い顔を見るために私は随分と時間を費やしたんだ。なのに、何故……？」
わたしは答えようとして口を噤みました。言っていいのだろうか、と。彼女を傷つけないだろうか、と。
誰にも迷惑を掛けないだろうかと。
そんなことを考えていたはずなのに、気がつけば言葉が口から溢れていました。わたしはわたしのことが知りたくて、わたしが正しいのか知りたくてその答えを求めました。
それはきっと東さんの語る、“過去のわたし”の話しが今のわたしを形成しているからなのです。何もない空っぽのわたしに授けられた何かだからです。
ここ数日の間に彼女はわたしについて周り、昔のわたしのことを聞かせました。どんな食べ物が好きで、帰りにどんなものを買い食いしたかだとか、そんな些細なことをです。わたしの嫌いな教科や、わたしの好きな教科のエピソード、そんな小さくて些細なことです。
昨日の朝も、昨日の帰りも。

なのに。

「くっ……ははははっ、ありえない！　その話しの半分は作り話だ。そして残りの半分は私とお前の話しで、御前とお前の話しじゃない。……ああ、そうか、御前は私が興梠に惚れていたことを知っていたのか。知っていて……私から奪ったのか。なんて、なんて酷い人なんだ」

それは無意味だった。意味をなさなかった。

わたしの喜びも、悲しみも全て、意味をなさなかった。

立ちくらみのような違和感が体を突き抜けました。わたしはわたしが思うよりもそれを心の拠り所にしていたのだと今、気がつきました。気がつかされました。

吐き気がします。醜悪さに。

気分が悪いです。心の醜さに。

光の失われた目がわたしを見つめ、声を発しました。

「なあ、興梠。酷い話しだろ。私からお前を取り上げて、お前から希望を取り上げて。次は私らから何を取っていくつもりなのだろうな、あのお方は」

「あ、あ、あ、あなたが嘘をついてるかもしれない」

「そう思いたければ思え」

「あ、あなたが僕を騙してるのかもしれない」

「そう思いたければ思え」

「あなたが、あなたが！」

「私もそう思いたいよ」

彼女はどうして笑うのでしょう？　何故、笑うのでしょう。

こんなにも悲しいことなのに。こんなにも辛いことなのに。

わたしは何故、泣いているのでしょう。

こんなにも滑稽なことなのに。こんなにも怒り狂いそうなことなのに。

誰かわたしに変わって教えてください。

わたしは誰を恨んで、誰を憎み、どうすればいいのか。

誰か。

「ひとつ、話しを聞いてくれないか。興梠」

彼女はそういってわたしの方を見ました。

13頁

階段をトントントンとテンポの良い音が刻みます。私はそのまま手すりを掴みながら、自分の部屋へと向かいました。二階の廊下から見える外の景色は淡い黄金色（こがねいろ）の空気に染まっていて、昼から夕焼けに変わる前の美しい景観をわたしに見せてくれます。まさにそれは一瞬の瞬きでした。

わたしはドアノブを捻ります。かちゃりと音がして姉様が部屋から顔を出しました。赤く腫れた顔を見せては不味いので即座に顔を部屋に入れました。

「おかえり」

「たったあ、ただいま」

「遅かったね」

「……ですか？」

「ですよ」

「お、お夕飯ができたら呼んでください」

「いつも呼ぶ係は君でしょ？　それに今日はお母さんいない日だよ……ってそっか、君は何も憶えていないんだっけ。あのね、今日はお母さんは里帰りの日なんだ。数日は帰ってこない。お父さんはお偉いさんとゴルフがどうとかで帰ってこない。だから数日はわたしと君だけで家を切り盛りしなきゃ、いけない。どうする？　なんか作ろうか？　それとも、外食にする？」

「変なものが混ざってない手料理がいいです」

彼女は普通の料理ができるのです。ですけどれど、これを混ぜたらどうなるのか、新しい何かが生まれるのではないだろうかなどと危険なことを考えて、それを実際に試してしまう人で、主にそれを食べさせられるのはわたしなのです。それにわたしがどれほど苦しめられたか彼女は分からないでしょう。

ええ、ちゃっかり自分用に普通の料理を確保しているのですから、

分かりたくても分からないのです。
「ワガママ」
「至極、普通の要求です」
「分かったよ、じゃあできたら呼ぶね。ああ、それとさ……」
「ありが……え？」
「何でそんなに女臭いの？　顔、傷だらけなのは何でなの？」
どくんと胸の奥がなりました。気がつけば彼女はわたしの後ろに立っています。声の位置、雰囲気と息遣いで分かりました。
「またイジメられたの？」
「……」
また？　また、とはどういうことでしょう？
何を、彼女は、知っている？
「何で顔、さっき隠したの？　何でそんなに汗臭いの？　こっち向いて、ねえ」
「……」
「黙ってたら、わかんない。ああ、そっか。抱かれてきたの？　あの東さんって子に」
「それは、違います」
「違うます？　フフッ、変な言い方。でもさ、その言い方って、東さんに抱かれたのは違うってことだよね。ふうん、そっか、じゃあ神足の小娘に抱かれたんだ。あの子、そういう子だったんだ。これはちょっと、予想外かも」
肩に両手が置かれました。わたしはどきりと体をはねさせます。
姉様は強制的にわたしを前へと進ませました。
「殴られて、動けなくなったところを犯されたの？　それとも犯したから殴られたとか？　いや、君はそんなことはしないよ。わたしが一番よくそれを知ってる」
スンスンと姉様の鼻がわたしの首筋を行き来します。
「唾液の臭いだ。それにキスマークがいっぱい。よくこんな恥ずかしい印つけたまま外歩けたね」

「あの、あの」
「何をそんなに怯えてるの？　別にとって喰おうってワケじゃないよ。ただね、ただ少し、気が狂いそうなほど嫉妬してるだけ」
「しっ、と？」
「うん、嫉妬。あるいは憎悪。あるいは憎しみ」
いつも気だるそうに笑っている姉様らしくない発言です。何に対して嫉妬しているのでしょう。何に対して憎しみを？
わたしに？
彼女は肩においた手をそのまま滑らせるようにして纏わりつかせました。痛いくらい、爪に肉が食い込むほどの力でわたしを抱きしめます。
「あ……いっ」
「何も聞かないから、少しだけ、少しだけ許して」
「わかり、ました」
「……ありがとうね」
体が震えています。息を詰まらせるような唸り声。獣の低くわななく声。
ふうふうと息を切らした声が後ろで聞こえます。ギリギリと歯をくいしばる音。彼女の体温がどんどん高くなっていくのが背中越しに伝わります。ポタポタと滴る唾液がわたしの肩と首筋をぬるりと汚し、服に重い染みを作るのですが、わたしは耐えます。
恐怖に耐えて、恐ろしさに目をつぶり、狂気に口を噤みます。普段の姉様以外の何かに。何かを。
不意に髪の毛が鷲掴みにされました。人とは思えないような力で壁に押し付けられます。肺から空気が無理矢理に引きずり出されたかと思うと、俯き、どこか陰った表情の姉様が涎を滴らせながら、近づき、わたしの頭に爪を立てながら舌をねじ込んできました。
わたしは恐怖のあまり、自分でも些か大げさではないかというくらい体中を震わせるのですけれど、姉様は焦点の合っていない目で、ただ肉を貪るように粘膜を混ぜます。ボタボタと唾液が服に、ある

いは足元に溢れるのですけれど、彼女は表情を変えません。
ただ手の位置を首元に移動させるだけ。移動させて、少しづつ力を込めていくだけ。
「一人は嫌」
「……」
「誰もまともに笑わないこの家で一人は、嫌」
「……」
「わたしも笑えない。作り笑いはいくらでもできるのに、まともに笑えない。母さんと父さんと同じ。君がいないとわたしは笑えない。安心できない。君がいないだけで怖くて怖くて、恐ろしくて恐ろしくてしょうがない。だから、いなくならないで。わたしを見捨てないで、一人ぼっちにしないで、お願いだから」
ぶつぶつと彼女はそういいます。焦点のあっていない瞳で、金色の太陽の光に鈍く頬を照らされながら、わたしに。
殺意の篭っていない手は、昆虫のような冷酷さを見せながら確実にわたしを死へと向かわせています。白く細い手は確実にわたしを死へと。
顔が重い。喉の動きが小さい。血管が破裂しそう。
「好きよ」
「……」
「ふふっ、何もいってくれないんだね。何も答えてくれないんだね。だから、だからこそ……」
手は不意に離されました。わたしは壁に背をつけたままズルズルと床に尻餅をつき、ゼイゼイと息を吸いました。
姉様は雑に自分の口を手で拭うと、髪を掻き上げ、いつもの気だるそうな笑みを見せて笑いました。どこかぞっとしたのは気のせいではないのかもしれません。
「約束だから、聞かないし、何も言わない」
「は、い」
約束どおり彼女はわたしを開放しました。

でも。

でも確実にわたしに呪縛と呪詛の言葉を彼女は吐いていった。そうわたしは思いました。

１４頁

わたしはただひたすらに、セロファンに覆われた重たいページを捲る。捲る、捲る、捲る捲る、捲る捲る捲る、捲る捲る捲る

では何故、姉様や父様は犬がいると、いたと言ったのでしょうか？　わざわざ使い古された首輪を用意してまで。

最初からそんなものはいなかったとして、何故わざわざそんな嘘をわたしにつかねばならなかったのか。

ふと頭の隅で神足さんのいった言葉が思い出されます。ざわりと首筋を撫でるような嫌な感覚。

「みんながわたしに嘘をついている……？」

何故、そんな必要が？

“もし、続きが聞きたいのなら私の家に来るといい。しかし、もし来るつもりなら、それ相応の覚悟はしてもらう”

そういって彼女がわたしに何かを期待するような目で見たのを思い出します。何か、全身を品定めするような目を。

行くべきでしょうか？　いや、しかし、わたしはもう“あんな話し”を聞きたくない。そうでなかったとわたしは思いたい。もしあれが本当で、わたしのそれが本当で、彼女が……東さんのそれが本当ならわたしは一体どうすればいいのか分からなくなってしまう。どう彼女に接すればいいのか。

もし、わたしがそれに気がついていると東さんが知った時、どうなるのかが怖い。彼女がどう思い、どうするのかが怖い。全てが変わってしまうような、そんな恐ろしい未来が怖い。

何かが既に崩れかかっているような気がします。わたしの何かが、音も立てずにゆっくりと、咀嚼するような鋭さで。

トントントンと姉様が階段を登っている音がしました。わたしはびっしょりと汗を掻いた自分に今更ながら驚き、辺りを見回します。既に夕暮れで、部屋は暗い。

ノックが三回。

「入るよ……って、部屋暗いね。電気、つければいいのに」

白いエプロン姿の姉様は気だるそうな微笑みで、そう言いました。

わたしは一瞬、先程の姉様を思い出して言葉に詰まるのですけど、何とか持ち直して無理矢理に声を引き出します。

「……集中、してました」
「ふうん、まあいいけど。ご飯だから下に来て」
「はい」
ああ、そうだ。
そういえば、アルバムはひとつだけではなかったはず。あの姉様の部屋にあった大量のそれに犬の写真があるかもしれない、とわたしは希望にも似た何かを掴み、今まさに部屋から出ようとしている姉様に声を掛けます。
「あの、すみません」
「どうしたの？」
ドアの縁を掴み、首だけでわたしの方を見ます。
「あの、別のアルバム……あの部屋にあった他の奴を見せてほしいのです」
「イヤ」
表情の光がすうっと消えました。鋭利な刃物のような冷たい表情で彼女はわたしを見つめました。
母様は全人類をモルモットとしてしか見ていないような、そんな冷たい目なのですけれど、姉様の目はそれとは違い、もっと感情的なのですが、それは負の面に傾いているような気がします。
憎悪だとかそういう何かに。
「何故ですか？」
「イヤだから。それ以上もそれ以下でもないよ。……不服そうな顔だね。じゃあ、例えばわたしがさ、後片付けは全てわたしがやるっていう条件下で綺麗で清潔で体になんの害もないゴキブリを君の体に大量にぶちまける、と宣言したとしたら君は嫌だと思うでしょ？
それと同じような感覚だよ」
「でもそれは、根底にあるものが違います。それは元々わたしに無意味で、得のないことだから嫌だというわけです。これは合理的です。でも姉様の拒否は非合理的で、理由が不透明です」
「ああ、アスペルガーはああいえばこういう……」

酷く冷淡な、呆れ返ったような、そんな表情で彼女はわたしに振り向きました。

「例えば、君が目の前で車に引かれそうになった時、わたしが君をかばって引かれたとしようか。それは合理的と言える？」

「……いえません」

「いえない。そう、いえないよね。そういうこともあるってこと。つまり、わたしや君だとかそれ以外の人間が不利益を被るかもしれない場合、わたしはその人の為に見せないという選択肢を取らなきゃいけない。君が過去の記憶について悩んでることも知ってる。前の自分の影を追いかけていることも。自分の影に囚われるよりも、前を向いて歩いた方がいいと思うの」

「あの、つまり、それって僕に何か隠していることがある……ということですか？」

「……」

「何を――――」

「ねえ、何が聞きたいの？　答えてあげるから、言って」

姉様は冷淡な顔をニッコリと微笑ませてそういいました。

急かすような、遮るようなそんな目で。

「あの、犬が写真に写ってないんです。どこにも。そんな欠片すらみえない。僕はそれが非常に不安です」

「犬？　犬なんて最初からいないよ」

「えっ？」

「犬の話なんて君にしたことはないよ。夢でも見たの？」

「そんな……だって。確かに首輪が」

「んん、何か勘違いしてるんじゃないかな。そんな事実は存在していないよ。この家で動物は飼ったことはない。変なことをいうのね、さあご飯が冷めちゃうから下に行こう。先に行ってるよ？　早く来てね」

「あっ……」

言葉を遮るように姉様はそう言い切りました。議論の余地を挟ま

せないそんな背中が見え、扉の向こう側に音と消えてゆきました。

15頁

「今、トッピング中だからちょっと待って」

たまに父様と母様が帰ってこないということがあります。父様も母様も学会ではそれなりに有名らしく、地方へ出向くことも少なくはありません。講演会などが長引くとお二方が二週間もご帰宅なさらないなどということもザラです（今回は学会や講演会とは無関係ですが）。そんな時はわたしと姉様で家を切り盛りしなくてはならないのです。食事や家の掃除、起床なども誰かに頼ることはできません。できることは全て己がやらねばならず、また責任も自分でとらなくてはならないのです。

基本的にめんどくさがりやの姉様はだらける事に必死で、あまり家事をしてはくれないので、否が応なしにわたしが自分から進んでやるのですけれど、わたしは唯一料理ができないので、そればかりは姉様に任せています。

「何を入れているんですか？」

「ん、髪の毛」

そういって姉様は細かく切り刻んだ髪の毛をわたしの料理にパラパラとまぶしました。それにふと、わたしは神足さんに言われたことを思い出し、おずおずと姉様に口を開きました。

「あの、髪の毛とか、よく入れますけど、普通はそういうことしないのではないですか？」

ぴたりと姉様の手が止まり、切り刻まれた黒い雨はカレーに降り注ぐことをやめました。姉様は気だるそうに微笑みながら、わたしに振り返ります。

左手の包丁が鈍く、システムキッチンの灯りを反射させ、わたしに鋭く尖った先を見せました。

「誰がそんなこといったの？」

「……」

「うちはうち、外は外だよ。仏教ともいればキリスト教徒もいる。カットリックも入ればプロテスタントもいる。ブードゥー教やゾロアスター教もいるでしょ。でも互いに文句いったりする？　あれは違うといい合ったりする？　基本的にはしないよね。それがそこのルールだから」

「あの、でも、お二人がいる時は、そういうことしないですよね。そもそも髪の毛は食べ物ではないのではないですか？」

お二方がいる時、たまに姉様が料理を手伝うことがあるのですけれど、その時はわたしの料理やお二方の料理に髪の毛を混ぜたりなどということはしませんし、見たことがありません。

これまで普通に血やら髪の毛やらを当たり前のように口にしてきましたけれど、言われてみれば確かに髪の毛や血といったものは食べ物ではありません。古今東西、多くの生き物が生息していますが、羽や毛といったものは必ずムシられるものが世の中の常というもので、それを口にするという文化は見たことも聞いたこともありません。

では何故、姉様はあえてそうするのでしょうか？

「別に汚くないよ。これ」

「そうじゃないです」

そういって姉様は包丁を持った方の手で自分の髪の毛を指さすのですけれど、そういった話しとは違うと思うわたしは果たして正しいといえるのでしょうか。

例えば今までハーブだと思って食べていたものがただの雑草だと分かった時、普通はそれを食べることをやめるでしょう。それが正常というものです。ふりかけだと思っていたものがプラスチックの粉だったと判明したら病院に行くでしょう。家で使っている石鹸が人間の脂肪から作られたものだと分かれば、きっと怖気とともに使用を改めるでしょう。それが普通で正常です。

「イヤなの？」

でも姉様は正常をとらず、それを続けろという。

「い、イヤとかではなくて、必要のないことはしたくないですし、そもそもそれって何だか変だと思うのです。姉と抱き合ってキスをするのも、お風呂に入るのも、口移しで料理を食べるのも、下の世話を互いにするのも、抱き合って寝るのも、普通に考えて何かおかしいです。わたしは、普通に暮らしたい」

「東さんがそういってたの？　それとも神足？」

「……話しを誤魔化さないで」

「わかった、今日はしない。これでいい？」

「そ、それは解決になってないです。何故、そんなことをしたのですか？　どういう理由で……」

姉様が遮るように口を開きました。

「普通普通ってさ、そんなに普通が偉いのかな。ちょっとくらいオカシイ方が人間らしいとわたしは思うよ。例えばさ、君はストレスを感じると指をカタカタさしたり、体を前後に揺らしたりする。でも、それって傍から見たら凄く不自然で、普通のことじゃない。どうしてそういうことするのって言われても君は本能的なものだとしか言えないし、答えられないよね？　わたしもそう。

それを止めろって言われても、異常だって言われてもどうしようもないことだよね。……それでも君はわたしに異常だ、止めろっていうのかな」

「……いえ、あの、ごめんなさい」

「いいよ、美味しく食べてくれれば」

そういって姉様は鼻歌を歌いながら、作業に戻るのですが、わたしはどこか納得がいきません。なにかこう、上手くはぐらかされたような違和感が脳内でストレスとなって、のたうつのですけれど、明確な答えは出ず、姉様の仰った論を崩すに値する言葉が見つかりません。

ただユラユラとわたしの指が揺れるのみ。

体を洗い終えたわたしはお風呂場の戸を開けたのですけど、目の

前に少し奇妙な光景が広がっていました。目を瞬かせ、言葉に詰まります。

今日は先程の反発があったせいか一人で風呂に入ることをよしとしてくれた姉様がわたしの下着を鼻元に押さえつけ、どこか遠い目をしながら、わたしの表情を見つめています。左手は下半身のジャージの中に伸びていて……ふいに姉様がふうっと強く息を吐いたかと思うと体を小さく丸め、ビクビクと震え始めました。淡紅色の表情は真っ赤に染まり、うるんだ瞳がわたしを捉えるのですけど、明らかに何か変です。

「どうしたんですか？」

「別に、なんでも、ないよう……」

姉様は左手をジャージから出し、赤い顔のまま、わたしにそう告げました。洗濯機の中にわたしの汚れた下着が投げ込まれるのですけれど、布地が湿っているのは何故でしょう？　たまに姉様がわたしの下着や服、使い終わった食器で何かをしていることがあるのですが、わたしにはよく分かりません。なにか焦燥のような感覚が一瞬、抜けていくのですけれど、確かな概念としては確立せず、幻のように消えていきます。

「洗濯、僕がやっておきますよ」

「わたしがやるからいいよ」

チラチラと横目でわたしを盗み見る姉様の視線が妙に恥ずかしい気がするのはどうしてでしょう？

「拭いたタオルも一緒に入れたいのです」

「……じゃあ、ここで拭き終わるの、見てる」

「それは、なんか、その」

「……冗談」

姉様は気だるそうにそう言いながらぬるりとテラついた手を蛇口で洗うと、脱衣所を出ていきました。

不意に湧き上がる謎の感情に、わたしは先程、姉様が投げ込んだ下着を手に取ってみました。

何かがべとつき、湿って重くなったわたしの下着。これは……唾液でしょうか。

唾液？

「……っ」

今、猛烈に嫌な気持ちがわたしを襲いました。ざわりとした舌先で肌を舐められたような不快な感覚です。それと相まって足元を掬うような、強い羞恥心がわたしを高波となってさらうのですけど、それに対して論理的な説明ができません。ただひたすらに姉様の行為はよくないことだとわたしの本能が囁くのですけれど、上手く言葉にできません。

わたしは顔を赤く染め上げながら洗面台にもたれ掛かり、鏡の前で自分の下着を片手に固まり続けました。

16頁

日曜の早朝ほど緩やかな時間が流れているものはないとわたしは思います。鳥のさえずりはどこかのんびりとしてて、朝日の昇ったばかりの住宅街はしっとりとした空気が流れ、基調をグレーに統一しています。

鉛を乗せたかのような重い足をわたしは前へ前へと進ませるのですが、上手くいきません。体が重く、気分が晴れません。

わたしは散歩が好きなのですけれど、どうしてでしょう。今日の散歩はこれっぽっちも楽しくありません。季節外れのウグイスが咳き込んだような鳴き声を上げました。辺りを見回せど、ウグイスの姿は見えません。わたしは探すことを諦め、小さな川原をゆるゆると進み、坂を上り、東さんの家を通り過ぎ、寂れた庭の広がる平屋……神足さんの家で足を止めました。

黒い瓦屋根とこげ茶色の壁、すりガラスの引き戸。東さんの家から一分もしないだろう距離にあるそれ。

先日のそれを思い出したわたしは手に汗を吹き出させ、乾いた喉に唾液を流し込みました。辛いです、とても。もしここで偶然にも東さんに出会ってしまったらということを考えると辛いです。神足さんに何をされるのだろうと思うと辛いです。家に帰った後、姉様がわたしに何を思うのだろうと考えると辛いです。

進んでも辛いです。帰っても辛いです。ここにいても辛いです。

わたしを中心とした歪（ひずみ）の正体が掴めなくて辛いです。それはきっと良くないもので、わたしの忘れてしまったもので、忘れた方がよかったものなのでしょう。前のわたしは一体、何をしたのでしょうか。

いっそ悪党だったら。

「不気味に家の前にずっと立たれても困る」

その言葉にわたしはどきりとしました。首を左右に動かし、言葉

の主の姿を探すのですけれど見当たりません。透明人間になった神足さんがどこかに潜んでいるのでしょうか。

「後ろだ」

「あうっ」

彼女はわたしの首に手を回して耳元で息を吹き付けるような囁きを零しました。ぞくりと刺すような息に力が抜けかけました。

「こんなところで突っ立っていたら危ないだろ。もし御前に見つかったらどう言い訳するつもりだったんだ？」

「いえ、その」

「でも、来てくれたことは感謝する」

「っ！」

べろりと、頬を温い舌がひとかき。

彼女はわたしの手を取り、引き戸をガラガラと開きました。わたしの頭はそこに入るべきではないと何度も苦言を申すのですけれど、わたしの体はそれに耳を傾けず、思考停止を続け、彼女に引っ張られるがままなのでした。

ピシャリと戸が閉められ、わたしは玄関の一段上がった場所に寝かされました。靴を無理矢理に脱がされ、服の首根っこを掴まれズルズルと廊下を引きずられます。わたしはそこでやっと口を開きました。

「あ、え、その、お邪魔します」

「誰もいないから、別に気にしないでいい」

「え？」

彼女は引きつったような笑みでわたしを見ました。武者震いのような、何かこう、よくない笑みです。

「ここにはずっと私一人だ。ああ、これは前もいったか……ってお前は覚えちゃいないよな。ああ、今思えばあの日が人生で最高の日だった。あかね色の夕日が窓から斜めにさしていてさ、カーテンから漏れる光に部屋の埃がヒラヒラと漂っていて」一番奥の部屋で彼女は止まり、扉を開けました。少し甘い香りがします。「無理いっ

て家に上がってもらって、私がお前に何も言わずにキスをしたらお前は泣き出して、私はどうしていいか分からなくて、お前を傷つけてしまったような気がして、お前がべそを掻きながら帰るのをただ呆然と見つめてた」

少女趣味の部屋が目前に広がりました。ベットには動物のぬいぐるみ。少女趣味というよりも子供っぽいと表現すべきかもしれません。

わたしを重そうに部屋に投げ入れると、神足さんは扉を閉め、カチャンと鍵を掛けました。何度もガチャガチャとノブを回し、開かないことをチェックしてからこちらに振り向きました。

わたしが慌てて立ち上がると、彼女はわたしの片足をコツンと転ばし、うまい具合に横のベットにわたしを転ばせます。……などと関心している場合ではないです。これは、本当に危ないです。危険です。

柔らかな白い布団の上にわたしの体が落ちました。

「数日後、学校でお前は謝ってくれた。緊張していてパニックになったんだって。よかった、私は嫌われてなかったんだと安心した。凄く、深く。また来てくれると答えてくれたお前に胸を踊らせた。距離が少し近づいた気がした。……だけど、その日、お前は犯された。ボロ雑巾、そう、ボロ雑巾みたいにされた。あの日、聞いた。聞いてしまった！　お前の泣き声をっ！　息を殺して泣くお前の声が……今でも耳にこびりついていて離れない。お前を見る度に辛かった。不登校になったお前の空席を見る度に胃がキリキリと痛んで、何度もトイレで戻した。滅多なことじゃ行動スケジュールを変えないお前が学校に来なくなった。悲しくて苦しくて、苦痛で孤独だった。

お前が記憶をなくしたって聞いて、私は喜んだ。嬉しかった。だってな、それはお前が何も覚えていないということだから。辛い時の記憶を忘れたということだから。全てがゼロになってお前は開放された。でも記憶をなくしたお前は前の自分を知ろうとした。思い

出したところで、知ったところで全く意味がないのに。不幸になるだけなのに」

彼女はわたしとは違う種類の震えを喚起させながらセーラのスカーフをスルリと解きました。わたしの上に身を合わせます。合わせながら懺悔めいた言葉を続けました。

……だから私はお前が思い出そうとすることを妨害した。御前と一緒にいることもそれに繋がると思って。だがしかし、あははは、御前のことは今思えば嫉妬だな。ただの嫉妬。お前と御前が仲良くしているのが耐えられなかった私の言い訳だ。いや、それだけではないか。私は心の中で許せなかったんだ。私からお前を奪っていったことが、お前にあんなことをした御前が平気な顔をしてお前と話しをしていることが、腸（はらわた）が煮えくり返るほど許せなかった。

ああ、こうやってお前とベットで身を重ねるのが夢だったんだ。お前の心臓の高鳴りを聞きながら、こんな風に目を閉じたかった。

ん、随分とリラックスしているように見えるか？　これでも今すぐ発狂しそうなほど緊張している。お前に拒絶されて、逃げられてしまうのじゃないかって。あの時のように。

でも、お前はどこにも逃げない。逃げたとしてもお前は自分の知っている道にしか逃げられないし、今日は四時まで家に帰らない。

……随分と不思議そうな顔だな。何故、知っているか分からないか？　それは前のお前がそうだったからだ。よくは知らんがお前はそういう“きらい”の人間なのだそうだ。それを随分とお前は悪用されていて、傷ついていて……よく犯されてた。

お前は必ず土日は外に散歩に行く。どんなに傷ついていて。嫌な事があっても、お前は殆ど表情を変えない。殆ど声を上げない。辛いことには極限まで耐える。

だからお前が顔を歪めて泣いていたあの日、私は耳と目を閉じ、口を噤んだ。呪文のように何も聞こえないし、何も見えないと一人呟いた。これは光栄なことで、これは正しいことで、私は何も悪く

なくて、アイツは寧ろラッキーだったんだと。呪われた家から出るチャンスじゃないかと、アイツが幸福を掴むチャンスだと自分に言い聞かせた。笑わなくなったお前の顔、私に何も言ってくれなくなったお前の口、私を見なくなったお前の目を見ながら、ただ信じた。汚されたお前を風呂場に連れて行き、シャワーで流しながら。いつも寂しそうで、生きているのがツラそうな目に怯えの色が混ざっても私は自分に言い聞かせ続けてたっ！

お前が御前に犯されるのは凄く光栄なことなんだって……！

17ページ

空を仰ぎみれば何かが浮かぶような気がした。
しかし何も浮かばず、ただ時間は過ぎ去り、春の生暖かい風が頬を撫でる。私は何度目になるか分からないため息をフウと吐き出し、重いような軽いような浮き足立った足をフラフラと前に進ませた。
つまり今は登校中の朝で、私は御前と一緒に学校へと向かっていたのだ。

「よく分かんないけどさあ、好きなら告白すればいいんじゃねーのとか思うんだけど」
「べべべべべ、別に好きとかそういうのじゃないです！」
私は振り向いて御前に違うと冷静に答える。御前は耳に手を当てて私の言葉をめんどくさそうに流した。
このお方は分かってないのだ。私はただアイツに恩返しをしたいだけであって、別にそんな恋だの愛だのは全く感じておらず、全然アイツのことなど気になってはいないのだ。ただハンカチを拾ってくれた者と拾われた者という拙い間柄ではないか。どうして、人はそうやって何でもかんでも色恋沙汰に結びつけようとするのか。理解に苦しむ。アイツにだって好きな人を選ぶ権利はあるし、そういう想い人が……いるのだろうか？　いたらどうしよう。
いや、だけど、しかし。
「あー、一人でうんうん唸ってるとこ悪いけど、そのコオロギ？とかいう人とどうして知り合いになったんだっけ？」
「興梠です！　“お”じゃなくて“う”ですよ、東さん」
「ごめんごめん。んでその興梠さんとどういう経緯があったわけさ」
早朝の薄い光に照らされながら御前は目をこすりつつ笑う。桜の花びらがひらりと風に乗って舞い、御前の美しさを際立たせる。私はそれを少し羨みながらも何回も話したはずの話しを始めようと唇

を濡らした。何だかんだで私もこの話をするのが楽しいのかもしれない。……どうしてだろう？　やはり美談だからなのか、私にとっての。

「そう、あれはですね――――」

「あ、一応言っとっけどさ、落ち着いて喋ってね？　美雪さ、喋ってるうちに勝手に盛り上がって興奮して、なんか聞いちゃいられないからさあ。もう、なんていうのかな。青春ラブとかそんな感じ」

私は大きく吸い込んだ肺の息をまずい、と止めて吐き出す。冷静に冷静にと深呼吸を繰り返し、記憶の歯車を緩やかに滑らせた。

御前が「面倒だからいかない」といった始業式のあの日、私はクラスの中で孤独を感じていました。周りは孤独を恐れていたのか薄い緊張の膜を張りつつもそれから逃れる為に知りもしない相手に話しかけ、調子を合わせて醜く笑っていました。私はただその光景をぼんやりと眺め、何故そんなにも人は孤独を嫌うのだろうと考えていました。人に囲まれる煩わしい生活よりも、ひっそりとした木陰に生える草木のような人生の方が有意義ではないだろうか、と。私には意味のない会話よりも教室に充満する真新しいワックスの臭いや、窓から漏れる浅い陽の光の方が意味があるように思えたのです。

クラスを眺めているといろいろな人間がいました。誰かと話したいのに話しかけられない人、いろいろな人間に声をかけている人、知り合い同士で話しをしている人、話しかけられて喜んでいる人。

そして全く他人に無関心を貫いてる人。それが興梠でした。

顔は整っているにしても、まず目が酷い。何も渇望せず、何も望まず、何も見ていないその瞳はどんよりとヘドロのように濁り、その身からは他人を寄せ付けることを良しとしないような、腐臭にも似た気迫を滲み出していました。

私はその時、なんて辛気臭そうな面だろうと内心、興梠を見下していました。きっとこういう人間が猟奇犯罪を犯すのだと水飲み場に向かいながら横目で奴を一瞥したのです。

水を飲み、席に戻り、また私はクラスの観察を始めました。御前に近づきそうな人間、御前に危害を加えそうな人間、それ以外の人畜無害な人間。そう頭の中で振り分けていました。ふと「あの興梠という人間はどこに振り分けるべきだろうか」と私は少し離れた奴の席に目を向けました。すると奴は事も有ろうに自分の席で私のハンカチを握っていたのです。持て余し気味で、どうすればいいのだろうと言いたげに。

即座に私の顔はさっと赤くなり、次に青白く染まりました。

私のだ、と言って取りに行こうにも“そういうハンカチ”を持っていると思われること自体が私には耐え難く、その選択はできません。奴はこのまま、やってきた教師にそれを拾い物だと手渡し、その教師はきっと静まり返った教室で何も考えず、落としたものは誰か、と問うのは自明の理のように思われました。私にとってそれは拷問です。

後々職員室へいって恥を押し殺しつつ、あれを回収するしかないと私が俯いていると、興梠は本当にそこにいるのか、と疑いたくなるような希薄さで私の前に立ち、無言でピンク色のファンシーなハンカチを差し出しました。私は咄嗟（とっさ）にそれを受け取り、机の中に隠すと、興梠にどうして私のものだと分かったのだとやや強い口調でいいました。恥から、でしょうか。よく分かりません。

興梠はその問いかけに少し黙り、濁った瞳で静か口を開きました。瞬間、私の世界の音が消えたのを感じました。

「……君って感じがしましたから」

そう言い切ると奴は音も立てず、わた毛のようにふわりと自分の席に戻り、ぼうっと虚空を見続けました。一方、私は戦慄のような体の震えにただ呆然と興梠を眺めていました。いろいろな感情がせめぎ合い、湧き立ち、呼吸が止るような思いだったのです。

私の本質を容易に見抜いた眼力、事を荒立てない優しさ、自分の幼稚な想像力だとか外見で人を判断することの意味の無さだとかいろんなものが混ざり合い、気がつけば放課後で、気がつけば席替え

で隣り。
　それはそれはもう、生きた心地がしない一日でした。

「なんかさあ美雪、熱入りすぎ」
「そ、そんなこ……そうですか？」
　事実、私は少し汗ばんでいて、しゃべり疲れています。御前は花のように笑うと白い歯を見せて、おどけるような表情を私に見せました。
「うん、火傷しそうなくらいあっついあっつい。まだ春だよ？　カンベンしてくれよねー」
「ご、御前は興梠のことは何もご存知ありませんか？」
「その興梠……命（みこと）だっけ？　全然知らないっかな。っていうかわたしさ、ほらクラスメイトすらまともに覚えてないし、不登校だし？」
「……ああ！　次期当主がこの体たらく。これでは故郷の父と母に顔向けできません。……私は私で神足の名を汚してばかり。一体どうすればいいのでしょうか。神様、教えて下さい」
　私は頭を抱えて深い深い、それこそ谷底のように深い溜息をつきます。私はこのお方のお目付け役の筈なのですが、昔からこのお方は自由気ままで、私の小言などのらりくらりとかわし、惰眠を貪ることと食べ物にしか興味がないのです。朝は眠いから起きない、昼は眠いから起きない、夜はお腹いっぱいだから寝るなどと今時、幼子（おさなご）ですら言わないようなことを笑いながら平然と言ってのけるのですから、もうどうしようもありません。何事にも動じないということは良いことでもある反面、悪いことでもあるのだと私は最近になって悟るようになりました。
「まあ気にすんねえ。それよりもさ、今日のお弁当何なの？」
「ああ！　父上、母上……私はどうすれば！」
　まずは涎を拭いて差し上げるべきなのはよく分かりますが。

18ページ

靴を上履きに替え、静かな校舎を歩く。シンとしていて、空気の停滞した臭いに私は光悦とした気持ちを抑えられない。私は映画が始まる瞬間のあの真っ暗な画面が一番好きだ。何かが始まりそうな一瞬というのは胸が踊らされる。どうしてかは分からない。御前にそのことを以前話したことがあるが、珍妙なものを見るような顔で「変わってる」と笑われた。

「なんでこんな朝早くから学校来なきゃいけないわけよー。あたし、眠いよう」

欠伸を噛み殺す御前の手を引いて先に先にと私は進む。というかその理由は昨日、晩ご飯の時に言ったと思うのだが、どうやら食事に夢中で全く聞いていなかったようだ。私は少し疲れたものを感じながら彼女を見つめるが、彼女はあっけらかんと笑うばかりで動じない。

「一応、その、私はこういう人間と話しをしているのだ、ということをお伝えしようと思いまして……」

「……思いまして、じゃないでしょ」

御前は敬語を使うと機嫌が悪くなる。初めて会った時からなるべく敬語は使うなと私に厳命していたのだ。

「あ、いえ、思ったんです。そ、それに朝の方が人が少ないですし、興梠も大体八時頃にいくと席に座ってますから」

「ほーかほーか、友達紹介的な感じか」

「ええ、興梠はいつも暗いですし、東さんの明るさを少し分けてあげられたら、と」

「うーん、鬱陶しいとか思われなきゃいいけどさあ、そこら辺大丈夫なわけ？」

「たっ、多分……」

大丈夫だと思いながらもその足は重い。まだまともな会話らしい

会話をしたことはないに等しい。私の捲くし立てる言葉に興梠がただ相槌を打っているというのが最も正しい関係なのかもしれない。何だその老人介護のような関係は。

そう思うと途端に胸が重くなって、手が汗ばむ。先へ先へと進んでいた足も止まり、私は自分のつま先を見つめた。足が重い、動かない。

くしゃりと髪の毛を揉まれ振り向くと優しく笑う御前がそこにいた。

「まあまあ、気にすんねえ。明るく元気出していこーって感じだよ」

「そうですね」

「そうだよ」

引っ張っていたはずの手が前に引っ張られ、重かったはずの足がだんだんと軽くなる。

姉のような妹のような、娘のような母のような、そんな大きな人の手に引かれながら、私は前へ前へと自ら足を動かす。眉を引き締め、姿勢を正し、酸素を入れ替え、教室の引き戸を開いた。そして御前を先に入れ、戸を閉めると端の席でぼうっと黒板を見つめている興梠まで近づき、私は口を開く。

「か、髪型変えたのか？」

御前は吹き出した。

興梠はどんよりとした目で私を見つめ、可愛らしく首を傾げた。笑いを堪える後ろの声は気にしない。気にしたら羞恥に圧殺されて何もできなくなってしまう。

「いえ、変えてませんよ」

「あ、そそそうか。あっと、おはっおはよう」

「おはようございます」

「美雪さ、朝っぱらから何面白いことやってんの？　いっつもこんな感じなわけかい？」

「こっ、この人は私の友人の東瑞希さんだ」

気恥かしさを気合いで押しつぶし、私は話しを先に進める。
興梠は席に座ったまま首だけでおじぎをした。
「ふうん、君が興梠命ちゃんかー。話は聞いてるよん。……んー、可愛い顔してるけど、目が死んでるねえ。まだマネキンの方が愛嬌あらあね」
「あ、東さん！」
「そうですか」
興梠はどうでもよさそうな生返事。御前は微笑みながらも品定めするかのように興梠の一部始終を見つめている。私は父親に恋人を紹介する娘のような気持ちであたふたと二人を見つめる。本来、当事者のはずの私は何故か今ここでは部外者という雰囲気。どういうことなのだ。
うん、と御前がうなずき胸の前で腕を組んだ。そして私に振り向き、満面の笑みを零す。私は何となく安心した気持ちになりかけるが、彼女の声質が冷たいことに若干の不安を覚えた。
「美雪、この子に近づかない方がいいよ。心が死にかけてるし、傷つけられ慣れてる。不幸を呼ぶよ、この子」
「東さん、急に何を……」
「この子、まともじゃないよ。一度、粉々にした人形を無理やり組み立てなおしたみたいな感じする。友達は選ぶべきだとあたしは思うね」
不意にあなた、と誰かが口走る。誰かといってもこの場にいるのは私と御前と興梠だけで、状況から言えばそれは当然、興梠だった。興梠が誰かに向けて何かを話そうとしているということに今の御前の言葉すら私は忘れかけた。
何だ、何をいうつもりなんだ？　他人に無関心なはずのお前が何をいうつもりだ？　お前の何をそうさせたんだ。もしかして……怒ったのか？　いやそんな馬鹿な。
「あなた、人を傷つけたことがある人ですね。そういう笑い方してます。それに」

一瞬、御前の表情が酷く冷たいものに変わる。興梠は言いかけた言葉を続けていいものかどうか考えあぐねているようで、口の中で言葉を転がしているようだった。

御前はそんな興梠を高圧的に見下ろした。御前は体で黙れと物語る。しかし興梠にそんなことが分かるはずもなく、言葉は口からこぼれ落ちた。

「それに、なんだい？　命ちゃん」

「……それに、あなたから血の臭いがする」

「は？」

「誰か人、殺したこと、あるんですか？」

「……」

私は御前の顔を恐る恐る見上げ、そしてぞっとした。建前は冷静を装うが、内心は酷く怯えた。

御前はもうその怒りを隠してはいかなかった。不愉快そうに唇の端をねじ曲げて体中に怒気を孕ませ、興梠を見下ろしている。興梠はそれが分かっているのかいないのか、ぼんやりとしていて全く動じていない。私は何とか助け舟をだそうと思慮を巡らし口を開きかけるが、何も浮かばず、ただ呆然と立ちすくした。

興梠は何か触れていけない部分に触れてしまったのだ。長年、連れ添った私が知らないような何かに。

ああ、そうか。興梠は無意識に人の本質を覗いてしまえる人間なのだ。私のハンカチを拾ってくれた時のように。だから隠していてもそれを見てしまうし、元々のきらいがそれを語らせてしまう。

それがどんなに恐ろしいことでも疑問を抱けないし、抱かない。

私は御前に声を掛けようと寄り添うが、到底触れられるような状態ではなかった。柔らかいいつもの雰囲気は消え失せ、冷たい刃のような刺々しい視線が興梠を見つめている。

ダンと御前が興梠の机に手を置いて不敵に笑った。私は驚き、体をびくりと震わせる。しかし、いや、やはり興梠は動じない。

「だ、として……何が問題なのかね、コオロギちゃん」

「今、幸せですか？」
「っ！！」
ぐっと御前が身を引かせ、目を見開いた。私には何が起こっているのか分からない。
興梠は続ける。
「毎日が楽しいですか？」
「……」
「ご飯が美味しいと感じますか？」
「……」
「……考えたことありますか？」
冷や汗。御前の冷や汗。
興梠の今にも掻き消えそうな声は御前を揺さぶり、何かを苛み続けている。彼女はついた手のひらをゆっくりと拳の形に変えた。
ああ、不味いこれは、興梠が殴られ暴力が拳が飛んで、血が、死。
「御前、やめて下さい」
私は従者らしく感情を殺して冷静に意味を伝える。その行動について回るツケを考えてくださいと。人を殺すつもりなのかと。
彼女の握りこぶしを私の両手で覆い、彼女に微笑みかける。ゆっくりと手の力を抜くように目で語りかける。今度は私が御前の気持ちを和らげる番だった。
固く握られた手をゆっくりとひらの手に戻し、彼女は静かに深呼吸した。そしてにこやかに笑う。
「……興梠命ちゃん、悪かったね。あたし、なんかテンパちゃった」
「いえ、僕の方も変なこといってしまったみたいで、すみませんでした」
「あー、ボクっ子なんだ。かわゆいねえ。美雪の部屋にある甘っ甘な洋服とか着せてあげたい感じだ！　あはは」
「あああっ、東さん！」
私は少し顔を赤らめながらも、気を和らげる。先程のことは数分、あるいは数十分もの経過のように感じたが実際にはほんの一瞬ので

きごとで、興梠本人は御前が自分を殺すつもりだったなどこれっぽちも分からなかっただろう。そして、知らないまま終わってよかった。

御前はヒラヒラと桜の花のように廊下に向かって後ろ姿のまま手を振った。

「この場は若い二人に任せて、あったしは購買に退散するよ。ほんじゃあねー」

小さく欠伸をしながら眠そうに御前は消えた。空気は軽く、何だか興梠と話しやすい空気。

だけど実際には最悪の出会いだと私は思った。

19ページ

私は空を仰ぎみて、ふっと溜息をひとつ着く。屋上から見える薄く塗られたような水色は白いちぢれ雲を泳がせながら柔らかくきらめいていた。何見てるの、と声がかかって私は視線を戻す。目の前には嬉しそうに箸を握る御前。そしてゆっくりと丁寧に弁当の包みを解く興梠がそこにいた。

興梠をクドくのは苦労した。その反対に御前はとても簡単だった。「興梠と仲良くしてくれないのなら、もうお弁当は作りません」というだけで事は足りた。御前はあの一件以来、興梠をあまり快く思っていないらしく、どこか気まずそうにしていたのだが、何とか元の鞘に収まることができた。

興梠は弁当を見られるのが嫌いらしく、いつもお昼になると学校中をうろついて、ひと気のない場所を探していた。それを不憫に思った私は一緒に弁当を食べてやろうと声を掛けたのだが、興梠は露骨に顔をしかめて首を横に振り、拒否を示した。私はそれからというもの、昼になると興梠の背中を追いかけ、如何に青空の下で友人と食べる弁当が旨いのかということを力説し続けた。そして一週間目の今日、奴はついに根負けし、今こうしてこの場所にいる。一週間昼抜きだったが、それは興梠も同じだし、何よりいっぱいコイツの言葉が聞けたのが嬉しかった。主に「嫌です」の言葉が中心だったが。

「いえ、いい天気だと思って……」
「ひょうだね、いいへんひだへ」
「口にものを入れている時は喋っては駄目ですよ、東さん」
「ほーい」
子供のように料理を口にほうばって御前は首を前後に首肯させる。

私は溜息を混じらせつつ、自分の弁当の蓋を開けた。サイズは御前の三分の一程度の大きさだ。うん、煮物は味が染みていて旨い。

「……」

興梠をちらりと盗み見る。奴は弁当箱の蓋で中身を隠しながら忙しなく箸を動かしている。何がっても私たちに中身を見せたくないようだ。御前の位置からなら何とか見れるのではないかと思い、目配せを試みるも、彼女は「え、それくれるの？」という顔をするだけ。チーズちくわは私の好物なのであげません。

私は思い切って聞いてみることにした。

「なあ、興梠。何でそんなに弁当が見られたくないんだ？」

奴はびくりと体を震わせて、私の顔を見た。見たあとにゆっくりと視線を逸らして、「えっと」だとか「あー」だとか気まずそうな顔を作る。私はその傍から見れば無表情とほぼ相違ないコイツの微妙な変化が見れることが嬉しいが、表情には出さない。

興梠がうんうんと回答を考えているその隙をついて御前が後ろからそっと弁当箱を盗み見て、箸を差し込んだ。

「あっ」と私と興梠は声を上げ、さらわれた唐揚げが御前の口の中に滑り込む様を見つめた。瞬間興梠の蓋が手から零れ落ちて、弁当の中身があらわになった。

端的に表現するのなら、それは可愛らしいもので、うさぎの形に切られたリンゴだとかさくらんぼだとか本当に少女趣味の弁当に思えた。いや、どちらかといえばお子様ランチのような雰囲気というのが正しいのかもしれない。

私の「あっ」という二度目の言葉に興梠は弁当が見られたことに気が付き、顔を真っ赤に染めた。どうしようと慌てふためくが、御前が唐揚げを咀嚼しているのも気になっているのか、どうにも不恰好で、小動物のようで、そう……可愛らしかった。

「あの、これ、はその姉さんが……！　僕はその」

「別に他人の弁当にけちをつけるほど私は俗人じゃない」

「みひゅきはいいほなんだほ」

「……東さん、ちゃんと飲み込んでから喋って下さい」
「ほーい」

興梠はしどろもどろに言い訳をしていたが要約すると、姉がわざと他人に見せられないような弁当を作ってきていて、自分はそれが恥ずかしくてしょうがなかった。だから見られたくなかったのだそうだ。

もう隠す必要はないと私と御前がいうが奴はそれでも頑として弁当箱を隠し、耳まで赤く染めて体を前後に揺すっていた。御前がそれを先日の仕返しとばかりに指摘してからかった。不意に興梠の体のゆすりが止まったかと思うと、奴は小さく嗚咽を漏らしながらグズグズと泣き始め、御前のからかい顔が凍りついた。

「ねーねー、だからごめんって！　いやあ、さあ、そんなつもりはなくて、えーっとだから、ね？　ああ、ほら、おじさん飴持ってるからこれあげちゃう！　ほれほれ、イチゴ味とイチゴ味とイチゴ味があるよ？」

私は興梠の背中をさすりながらジト目で御前を責める。御前は私の視線に冷や汗を掻き始めた。明らかにこれは御前が悪い。

「……なっ、泣いてません」

ぼろぼろと涙を膝の上に零しながら、かすれた声で興梠は否定する。ちょっと花粉症で、と鼻声の言葉。

どうやら自分が泣くことで御前に迷惑がかかるのではないだろうか、ということを気にしているらしかった。でも、だからといって、その言い訳の仕方はないだろうと私は内心思った。本当にそれで丸く収まると思っている節があるのが相変わらずズレていると言わざるを得ない。

「興梠、大丈夫だ。私が今夜お前の敵討ちをしてやる。東さんの今日の夕飯は味のないおかゆに決まったぞ。安心しろ」
「美雪、そりゃあんまりだよう！」
むせるように震えていた興梠の顔に少し表情が戻った。

私は興梠の顎を持って、顔をハンカチで拭いてやった。きめ細かい肌、赤く染まった瞳、やわそうな唇、うなじ、香水でもつけてるのかと言いたくなるような甘い桃のような香り。どくどくと胸が高まり、手に汗が滾る。じっとりと汗ばんだ髪の毛は汗を吸っていながらも柔らかく、ずっと触っていたくなるような心地良さだ。

「あの、もう、いいですか」

「……あ、ああ！　すまん、大丈夫だ」

興梠はくすぐったそういい、離れた。どうやら私は興梠の顔を少し長く触り続けてしまっていたようだ。慌てて取り繕うも、興梠は何となく引き気味で、御前はにやにやと私をみて笑っていた。

「美雪、なんか今さ、犯罪一歩手前だったよ」

明日の朝もおかゆです。

何だかんだで弁当は終わった。私は興梠に明日もここで食べようと約束を取り付けた。

教室に戻る途中、トイレに寄った私は個室に篭ると、興梠の汗と涙を拭いたハンカチを鼻に押し当てて胸いっぱいにその匂いを吸い込んだ。

「あっ、涎が……」

20ページ

「授業の終わったあとは何とも清々しい。そう、お前も思わないか？」

「あ、あのう」

「春の景色はどれも玉虫色で記憶に刻み込まれるような、そんな色を帯びていると私は思うが……お、お前はどう思う？　いや、だから夏だと緑だとか秋だと茶色というような感覚が頭の中にあるじゃないか。それが春は豊富で、どれもどぎつい色であるように思うんだ。その、興梠はどうなのか、と思って」

「僕は春は優しい色合いなんじゃないかなって思います……じゃなくてですね、えっと」

「春は優しい……優しいか。いい表現の仕方だな。私には真似できん」

「あ、あの！」

興梠は大きな声を出して、足を止めた。いつものどんよりとした瞳はどこか焦りの色が見え隠れしているように思える。私はどうしたと奴の顔を覗き見た。一緒に下校することは何か不都合でもあるのか。いや私もそれなりに緊張はしているが、最近は興梠との会話にもそれなりに“慣れ”を感じつつある。コイツは俗的な質問よりも私よりの質問に答えてくれるし、それが好きなようだ。だからこそ嬉しい。

「あの、東さんは」

「さっきお前も見ただろう？　御前は家に帰られた」

「いつも東さんと一緒じゃないんですか？」

「ああ、家が近いからな」

「じゃあ、あの、こっちは家と正反対だと思いますけど」

「そうだが、何か不都合でもあるのか？」

「……」

興梠は何か言いにくそうに手をカタカタとタイプを刻むように動かして、私を上目遣いに見た。
「あの、あ、あれなんですか？」
指差す方向を見る。ごめんなさいと小さく声が聞こえた。振り向くと興梠が走り出していて……とろいな。私は唇を濡らし、スカートをはためかせながら走り、興梠の前に回り込んで、両手で道を塞いだ。
ばふんと興梠が私の胸の中に飛び込んできて、一瞬私はそのまま抱きしめそうになるが、ぐっとそれを堪える。興梠は両手で鼻を押さえながら私を見上げた。その仕草がまた可愛らしい。
「どうして逃げる？」
「……どうして、ついて来るんですか」
「お前の家が気になる」
「見ても面白く無いです。普通の家です」
「その面白くない普通の家が見たい」
興梠は何かと付けて秘密主義であろうとする。家族のことや家の場所は秘密にしていて、一切口にしようとはしないのだ。私はそれが気になって仕方がなく、何度も尾行したが興梠はそういうことに敏感で、何度もまかれた。私は頭を切り替え、正攻法（と呼べるのだろうか？）で攻めて見ることにした。
露骨に嫌な顔をするのが若干、胃を痛ませるものの、興梠は基本的に怒ったりはしない人間で、謝ればすぐに許してくれた。私はちょっと図々しい女で、興梠の善意に甘えているのかもしれない。それは今も。
が、それでもいいと最近は思う。行動に移さねば興梠は絶対に私に笑ってくれない。私を見てくれない。
以前、ちょっとしたことで笑った興梠のあの笑顔。私はもっともっとあれが見たい。
「家、見せるの恥ずかしいんです」
「気にするな。私は馬鹿にしたりはしない」

「だから、その」
「さあ、いこう」
「えっ」
私は無理やり興梠の手を握り（心の中で奇声を上げつつ）、前へ前へと足を進ませた。勇み足で進むからか、興梠は何度も突っかかったように転びそうになる。興梠は否が応なしに横に並び、私と一緒に歩んだ。顔はもうしょうがないと諦めているような表情が見える。私の勝ちだ。
「あの」
「何だ？」
「家、こっちじゃないです。さっきのところ、左です」
「いいじゃないか。少し遠回りをしよう」
「えっ」
「ダメか？」
「そのう」
「よし、決まりだ！」
「あ、あ、あ……」

興梠の家はそれ相応にでかかった。
車庫には大きなシャッターが蓋をしている。少し長めの階段が玄関から真っ直ぐ伸びていて、訪問者を見下ろすような位置に近代的な家があった。コンクリートの打ちっぱなしの家だ。
話しを聞くに、興梠の両親は医者であり学者でもあるらしい。興梠はもう見たから帰れと言わんばかりの視線で私をちらちらと見咎めるが知った事ではない。何か伝えたいのなら喋れ。
諦め混じりの興梠は門の暗証番号を私が後ろにいるのにも関わらず、ぽちぽちと押していく。……九〇八の三一〇か。
「あの今日はその」
「ああ、かえ――」
「遅いね」

帰ると言おうとしたところで冷たい声が響いた。私は内心驚きながら、声のした方を向く。

表情の薄い、ジャージ姿の女がいつの間にか、門の向こう側に立っていた。周りの空気が停滞しているかのような雰囲気。興梠とは別次元で退廃的だ。おそらくこれが興梠の姉なのだろうと直感的に悟った。

「あ、あ、ごめん……なさい」

「二分五十秒の遅れ」

「うっうっ……」

興梠は体を揺らして、指を忙しなく動かして、怯えの表情を見せた。私はどういうことだと二人見つめるが、興梠の姉はそれを当然のようにしている。

興梠姉は私の存在にそこで初めて気がついたらしく、眉を持ち上げ首を傾げた。ああ、興梠と同じ仕草だ。

「そちらは」

「私は……」

「あなたには聞いてない。で、命……そちらの方は？」

「あ、あの」

「早く」

「……僕の友達、です」

「そう」

「はい」

興梠の姉は優しく興梠に微笑みと頭を撫で――――

「うっ」

髪の毛を掴み、壁に押し付けながら興梠の唇を奪った。私を横目で見ながら、興梠の口の中に舌を挿し込み、興梠の唇に唾液を流し込んだ。興梠が必死に抵抗しようと手で押しのけようとするが、姉の一睨みで静かになった。いや実際にはむせび泣いていて、誰のともつかない涎を零しながら、私を見つめていた。

その瞳が求めるものはただ一言の、ただひとつの“助け”。しか

し私は声が出せない、声に出せない。やめろの一言がいえない。やめてくれの一言がいえない。やめてやってくれの一言が。

私はただ呆然とそこに立ちすくし、興梠が暗い家の中に連れていかれるのを見ていただけだった。

21?

空を仰ぎみれば何かが変わるような気がした。
しかし何も変わらない。何も現実は変わらない。

ジャブジャブジャブジャブ。ゴゴゴゴゴゴゴ。
水が渦を巻いて下水に流れていく。蛇口は忙しなく水を流し続けていて、あたしの手の泡を汚れと共に落としていく。あたしは洗いすぎて自分の手が赤くなり始めていることに気がつき、そこで洗うのをやめた。トイレの鏡には汗だくの女が写っていて、それはあたしだった。
手の匂いを嗅ぎ、すり込んだような石鹸の匂いに安心する。
もう、血の臭いはしない。
私はもう一度蛇口を捻り、手に水を貯めて顔を洗った。まだ春先の水は冷たくて気持ちいい。頭が研ぎ澄まされるような感覚を覚える。
「血の臭い、か……」
どうして、いや何故アレはあたしのことが分かったのだろう。

事の始まりは私の世話係の神足美雪の一目惚れから始まった。
まず、あたしは学校というものに対して価値を一切感じてはいない。だから常に家にいるし、惰眠を貪り、好きなことをして好きなことを考える日々を最高のものとしているし、そうすることに躊躇や迷いはない。穀潰しといわれようとも、それだけの資産があるのだから何ら問題はないと思う。だけれど美雪はそうでないらしく、あたしにしっかりと学びそして家を背負って欲しいと思っているらしかった。
誰があんな家を継ぐものかとあたしは思うが、神足の家のものはもはや宗教と呼べるほどに、そういうことを刷り込まれていて、今

更その考えを改めるようにするのは無理に思われた。
美雪はいつか私が母の故郷に帰り、立派に務めを行うことを夢見ているのだろうけども、あんな地獄のような場所にはいこうとは思わないし、戻りたいとも思えない。誰が戻ってやるものか。
だから私は美雪が毎朝学校に行きましょうと誘う言葉をヒラリヒラリとかわし続けた。
いつものように堕落した生活を堪能していたある日のこと、美雪は顔を赤らめて、あたしに頭の中に花でも咲いたのかと疑いたくなるような桃色の話しをいって聞かせた。内容は何とも誇張されたような話しだったが言ってしまえばハンカチを拾われた者と拾った者の拙い関係らしく、美雪のいうような白馬に乗った王子様が現れたような甘ったるいそれとは違った。
初めは呆れつつそれを聞いていたものだったが、不思議なことに何度も聞いているうちにだんだんとそのコオロギという虫のような名前の人間のことが気になり始めた。どんだけ素晴らしい人間なのだと。
美雪の話しを聞くとおよそ人間らしからぬ感情の持ち主で、いつもぼうっとしていて目はどんよりと濁り、一日に喋る言葉の数は二百文字もないだろうということだった。どこに惚れる要素があるのだろうとあたしは思うのだけれど、どうやらその虫人間は顔がすこぶるいいらしい。なんだお固い神足の家も所詮は顔かとは誰の声か。
その興梠と名乗る人物は確かに人間離れした風体を持っていた。瞳は死んでいるし、何だか体から負のオーラがにじみ出ているし、女々しい顔をしているし、兎に角マイナス要素しか見えてこないが、うん、確かに顔はいい。いや美しいとは違う。可愛らしい顔立ちをしていた。
だがしかし、体からにじみ出ているその何かは、明らかに良くないもので、閉じきった心はあえて自分から行っていることのように思えた。つまり日常的に傷つけられ慣れていて、他人を許容……あるいは信用できないような人間になってしまったのだとあたしは思

った。

正直、そういう人間と美雪が付き合うのも面白くは思えたが、あたしは一応これでも美雪のスポンサーであり、面倒を見てもらっている立場であり、私には恋人がいないのに先に美雪にできるのも何だか腹立たしいという気持ちもあり、ズバズバとこいつは使えませんと否定した。その時の美雪の表情といったらもう、あれだ、ソフトクリームを食べる前に床に落としてしまったような子供のそれだった。

対して興梠命（コウロギミコトと読むらしい）は馬鹿にされているのにも関わらずぼんやりとした表情であたしを見ていた。阿呆だなコイツと思いつつあたしは奴に何か言いたいことでもあるのかと視線を送ると奴はゆっくりと口を開いてこう呟いた。

「あなた、人を傷つけたことがある人ですね。そういう笑い方してます」

流石普段から傷つけられているだけあるな、とあたしは蔑むように奴を内心嘲笑するが、次の言葉でそれが焦りに変わった。

「それに、あなたから血の匂いがする」

絶句した。

「誰か人、殺したこと、あるんですか？」

ブルブルと体が震えた。次々と投げかけられる言葉に心臓を掻きむしられるような苛立ちと怒りを覚え、殺意が湧き出してきた。コイツの口を今直ぐ閉じなければあたしは直ぐにでも砕け散ってしまうように思えた。

よし、殺そう。その減らず口に拳をねじ込んで、歯を全部へし折り、舌を引きちぎってやろう。

そう思い、私が握りこぶしを作った瞬間、美雪があたしを制した。あたしは直ぐに冷静になり、自分はなんて恐ろしいことを考えていたのだと思い立った。

ここで殺したら足が付く、やるのならもっとひと気のない場所にしなくては。

女々しい顔立ちの興梠命と美雪をあとにしたあたしはそれから即座に女子トイレに駆け込むと自分の手を何度も何度も洗い流した。何度洗っても血の臭いがするのだ。あの時の血の臭いが止まらないのだ。冷や汗を掻きながら私は狂人のように歯を食いしばり、手を洗い続けた。

血の臭いは消えた。だけれど、人を殺した時の感触は、まだ拭えない。

22?

美雪の興梠熱は日に日に増していっているように思う。一度、美雪にモアイよりも表情の少ない人間のどこがいいのかと聞いたことがあるけれど、返ってきた言葉は「とにかく優しくて、何をするにでも可愛らしい」とのことだった。殆ど会話らしい会話なんてしたことない癖によくそんな歯の浮いたようなセリフが出るものだと思いつつ、まあ頑張れといってしまうのはあたしの優しさのなせる技ではなかろうか。しかし、美雪はそうやって興梠に対する自分の想いを指摘されると声を裏返しながら顔を赤らめ、違う違うと否定するのだけど、明らかにその違うという態度が違うわけで、美雪はどう考えても興梠に熱を上げていた。

先日の授業中は特に滑稽でそれが顕著(けんちょ)だった。クラスのみなが数学教師の出した問題にウンウンとうねり声を上げているような静かな教室で、不意に美雪が隣の席に座る虫人間に「今日はいい天気だな」と話しかけ始め、何事かと思ったあたしを含めたクラスメイトと教師は遠目にそれを見つめた。美雪はあまりの緊張からか、それらには気がつかず、興梠に「そそ、そういえば興梠は誰か付き合っている人はいるのか?」と聞き始めた。虫人間は「……いません」と人の言葉で話し、心配そうかつ緊張気味の美雪の表情は明るい色に変わったが、あたしたちはその初々しい空気に当てられ、何とも言いがたい気恥ずかしい気持ちでいっぱいだった。

クラスでは美雪と興梠の関係を見守るというのが暗黙の了解になりつつあって実に面白いのだけれど、あたしとしてはあの危険な人間と美雪が一緒になるというのは度し難く思え、そして腹立たしかった。美雪は先日のことがあったからか、あまり表立ってあたしに興梠と仲良くしろとは言わないものの、やはりさりげなく話題に出して仲を取り持とうとしてくれやがるので、あたしはその度に興梠

が如何に人間として不足しているかを説き伏せると、美雪は萎れた野菊のようにしゅんとして頭を垂れるのでなかなかに気分がよろしいが、そうなると決まってその日の夕飯は残念なものになるので、諸刃の剣としてあたしはこれを封印することに決めた。魔封波じゃ。

興梠と美雪がツガイになったとして、そのことについてはどうでもいいと二割りくらいは思っている。だから美雪がストーカーのように昼休みになると興梠の背中を追って、一緒に弁当を食べようと懇願しているのも、にやにや笑うクラスメイトに紛れて、まあしょうがないと見過ごしてはいたが、そこにあたしが巻き込まれるとなると話は大きく変わってくる。

露骨に否定の表情を作って「嫌です」と言い続けていた興梠を一週間もつけ回した甲斐はあったらしく、美雪は高らかにその日の夕飯に自慢してきたので、おめでとうの一言を述べてさっさと目の前の食事にありつこうと涎を拭いていたら、あろうことかあたしも一緒に昼を食べるのだと美雪はいった。意味不明。

何でも、あたしと興梠はどう見ても仲が悪いので、二人の仲を取り持つために仕方なくこういう場を設けたのだと美雪はできる世話係のような顔であたしに言ってみせたのだけど、どう考えてもそれは“二人きり”というのが恥ずかしくて耐えられないだけで、あたしを利用しようとしているのは見え見えだった。なのであたしは「やだよ、あいつ性格悪いもん」というと美雪がムッとして反論してきたので、めんどくせえと吐き捨てると美雪は今にも泣きそうな顔で下唇を噛みながら、赤くなった鼻をお盆で隠し、鼻をすすりながら「……もう、もうお弁当作ってあげません」と涙目にあたしを責めた。卑怯だろ、卑怯ですよ、卑怯です、と内心あたしは思ったけれど、弁当も大事だし、まあここはぐっと堪えて了承してやった。あたしの優しさは留まること知らないと見える。

当日、虫人間に久しぶりと声をかけてやったら、毎日会っているでしょうなんて奴はつまらないことを言ってくれて、少し苛立った

がまあ美雪の顔を立てて我慢してやることにした。

どこで食べるのか、と美雪に問うと屋上ですと美雪はいった。その為にレジャーシートなるものも持ってきたのだそうだ。日本語にするとゴザだが、それだとかなり残念な感じになるのでここではあえてレジャーシートと呼ぼう。

美雪は控えめにいってもあたしと同等レベルの美人なので、そのアンコの詰まった顔を持つヒーローのレジャーシートを高らかに教室で出すのはどうかと思うのだけれど、本人がよしとしているで、笑いを堪えつつもあたしもよしとすることにした。ちなみに虫人間はアンコどころか脳みそも詰まっていないらしく、終始ぼんやりとしていた。

食事を始めるとあたしはもう二人のおピンクな空気など（厳密にいってしまえば美雪一人のものかもしれないけれど）どうでもよく、ただ目の前にある料理に箸を向かわせ、幸せにこの身を浸らせていたのだけれど、美雪は興梠の弁当の中身が気になるらしく（好物が知りたかったのだと思われる）、何度もチラチラと奴の方を伺ったり、あたしに見るように目配せしてきたが、あたしは無視を決め込んで惚(とぼ)けてやった。そもそも主人を顎で使うな、と思うのだけれど。

興梠はそんな美雪のバレバレの視線を警戒していて弁当の蓋で中身を隠しつつ料理を食べていたが、何だかその女々しい姿に苛立ちを感じたあたしはそっと後ろに回り込み、唐揚げを奪い去ってやった。二人は「あっ」と呆気に取られた表情であたしをみていたのが何ともおかしかった。

興梠はあたしに意識を持っていかれたせいか、手から蓋がこぼれ落ち、弁当の中身を美雪に見られて顔を真っ赤に染めていた。しどろもどろでそのちびっ子弁当の言い訳をしていたのが何ともおかしかったので、幼児言葉でからかってやったら奴は耳の先まで赤くし、ゆらゆらとバネのついた人形のように体を揺らし始めた。あまりにもその動揺っぷりが普段のそれとは似つかわしくないので、美雪が制すのも無視してからかい続けてやったところ奴はボロボロと涙を

流し始めて、小さく俯いた。
あの時以来、あたしはどうにも人の涙というものに弱くなっているらしく、この時も何だか全身の力が抜けていくような感覚に苛まれ、罪悪感が足をすくった。美雪はあたしをまるで親の仇のように責め立てるし、もう何なのって感じで凹んだ。あたしなら飴ひとつで黙る自信があるというのにコイツはなんて贅沢なんだ、と。

23?

あたしと興梠に先に教室に戻るようにいうと美雪はそそくさとどこかに消えた。あたしは隣の生きているのか死んでいるのかよく分からない生き物と一緒に数分間も同じ道を歩かなくちゃいけないのかと思うと、気が重くてしょうがなかったが、居ないものと考えてさっさと先に行ってしまえばいいじゃないかと思い立ち、そのまま興梠を顧みず前へと進んだ。

興梠の奴は終始トロくさく、人に道を遮られるとそこで止まってしまい、相手が通り過ぎるのをじっと待っているという、見てるこっちがイライラするような動きを見せてくれやがったので、苛立に負けたあたしは、踵を返して手を引っ張ってしまった。優しすぎるとは罪である。

階段を降りつつ、あたしが「それは他人に譲歩してんじゃなくて、他人を恐れてるだけだ」というと無視人間は何かに気がついたように瞳をほんの少し見開いて「そうかもしれないです」と呟いた。ああ、イライラする。そこでも曖昧なのか！

曖昧な答えしか出せないのかアンタは、と言ってやろうと思い、途中まで言いかけたところ、嫌なやつが含み笑いを見せながら上がってきているのが見えた。八瀬の阿呆だった。

八瀬の阿呆は何だ何だといいながら嬉しそうに興梠の側に立ち、「イジメか、おい。お前もコイツに苦労してんだな。俺も苦労してんだよ。あれだな、俺とお前は苦労仲間ってことで友達だな」とワケの分からないことを述べた。失せろと消えろと死ねを二回づつ律儀に唱えると奴はおちょくったように「流石人殺し、言葉の迫力が違うな」といってどこかに消えた。

あたしは喩えようない屈辱と普段押さえ込んでいた箱から溢れ出した感情に歯ぎしりして階段の踊場に佇んだ。興梠はそんなあたしに近寄って、大丈夫ですかなどと宣(のたま)う。大丈夫なわけあるかと低く

唸りながら奴の手を弾いて、あたしはトイレの固執に駆け込み、水を流すと、ポケットの中からレコーダーを出した。スイッチを入れる。声が聴こえた。

あたしは――――悪くない悪くない悪くない

きっと牛肉が好きな人だって、豚肉が、鶏肉山羊肉馬肉……それらが好きな人だってきっと、それが殺されているところを見たら、吐き気を催す。そして自分の食べているものについて疑問を覚え、罪悪を感じ、トラウマを覚え、きっと自分という種を許せなくなるんだ。そういうもんだ、ヒトってのは。

とにかく、あたしはそうだった。

トイレから出ると心配顔の美雪が入り口に立っていた。興梠はどこにもいない。いたところで何とも思わないけれど。

美雪は興梠にあたしの具合が悪くなったのだというようなことを聞いたらしいが、その過程に到るまでの話しは聞いていないようだった。あたしはとりあえず生理が酷いというと美雪は眉をしかめて「それはそれは……」とあたしを気遣った。女ならこの痛みは共感していただけることとうけ合い……まあ嘘なんだけれど。

今更ながら思うが、美雪は不憫な奴だ。あたしが何をしたかも知らず、あたしが自分の母を殺したことも知らず、あたしが一族から爪弾きにされていることも知らず、ただ妄信的にあたしの世話を甲斐甲斐しくもみているのだから、不憫といわないでなんと言おうというのだ。もう、どうやってもあたしはあの家に戻ることはできないのにも関わらず、あたしの将来に期待をしているのだから、これほど滑稽な話しはない。あたしもそのことについて言ってしまえばいいのだけれど、それは怖くて恐ろしくて独りになることなのでそれは、それだけはできなかった。

あたしに唯一残されたものは何かといえば家でもなく、金でもなく、東美雪一人なのだ。この希望の為にあたしは今日も嘘をつき続け、嘘の仮面をかぶり続け、嘘の笑みと嘘の冗談を吐き続ける。あわよくば、その嘘が暴かれることなく真実で在り続けますようにと願いながら。

24？

今日もあたしは一人で家路についた。

美雪曰く「興梠に何かあった時に、友達として私が対応できるようにしておかなくては」とのことで、今日も興梠の家までストーキングを楽しんでいるらしい。建前は立派だが実際には個人的な目的の為に奴の家が知りたいのは明らかだった。まあ、美雪がそれをやりたいと思うのならやればいいとあたしは思う。

そういえば、何でもこの町の図書館には地球のことなら何でも知っている情報屋がいるらしいが、そいつに聞けば美雪が知りたいことは大体事足りてしまうのではないだろうかと思うのだけど、何十年も前から言われている噂なので眉唾な話しなのかもしれない。しかし、美雪にこれを教えたらきっと血眼になってその人物を探し、興梠のことを根掘り葉掘り聞くだろうなあとあたしは思った。ちょっと怖い。

まあ見ている限りでは美雪は奥手（たまに奥手なのか、そうでないのか分からなくなるけれど）なので変なことにはならないと思うが、たまに美雪は変態っぽい空気で興梠を見ていることがあるので不安になることがままある。嫌いな奴の安否を気にするというのも何か変な感じがするけれど、あの目は、いやほんと危ない。これが愛という奴なのか。

とりあえずあたしは玄関に入るとカバンを廊下に投げ捨て、美雪の家に向かった。特にすることもないし、おやつの場所は美雪しか知らないし、両親はたまにしか面会に来ないしと、暇で暇でしょうがないのだ。美雪の部屋は美雪の凛としたイメージとは違い、随分と子どもっぽい感じがして見ているだけで面白い。美雪はああ見えても結構子どもっぽい性格で、アンコの詰まったヒーローのアニメが好きだし、土日にやってる特撮を見て手に汗握っているような奴なのだ。この前はベタベタなラブロマンスで涙ぐんでいた。純粋す

ぎてたまに危ういものを感じてしまうけれど杞憂であって欲しいと思う。

とりあえず玄関の隅に置かれたサボテンの鉢植えの下の鍵でガチャリと平屋のロックを解除し、引き戸を開けて靴を雑に脱ぎ去り、廊下に上がる。真っ直ぐ台所に向かうと、あたしはおやつのを探した。散々あたしは自分の家でおやつの在処（ありか）を探したのだけどまったく見つからないあたり、おそらく美雪が隠し持っているのだと検討をつけているのだが、多分正解だと思う。と思ったら早速見つけた。冷凍室が二つある大きな冷蔵庫の一つめの冷凍機能が切られていて、そこにおやつが詰まっていた。そんなことできるのか、へー、ハイテク。ってか、うわ、うぜー！　カロリー計算のメモとか貼ってあるし、御前はビタミンが足りてないとか、お肌はツルツルっすよ、ええ。

戦利品を胸に抱いて頬を綻ばせながらルンルンと廊下に出ると、美雪がそこに立っていた。「東さん」と一言。あれ、怒ってる？もしかして。

あたしは一瞬、どうしようと考えてそのまま「おかえり」といい、その後に勝手に上がった有無を伝えた。美雪はそうですか、と一言呟き、もう一度そうですかといった。妙な空気にあたしが大丈夫かというと美雪は無理に微笑んで大丈夫ですという。お夕飯直ぐに作りますねだって。明らかに大丈夫じゃありませんぜ。

通りすぎようとした美雪の腕を掴み、言わねばならぬことを正直に包み隠さずここで申せというと美雪はあたしをフルネームで呼んだ（凄く胃がざわめいた）あとに、自分は選択肢を間違えたと言い始めた。その選択肢は絶対に間違ってはいけない部類のものだったという。よく分からないけど何となく察するに、目の前で自分の愛犬が溺れて何をしなきゃいけないか考えろ的な選択肢だと思われる。

助けを求めているものを助けなきゃいけない、それが私にはできなかったあああああああああああああああああああああああ

あああああああ

それを興梠に当てはめて考えてみる。興梠が保護されたとして、姉が有罪にならなかったらどうするの？　有罪になったとしても、興梠はこの町でやっていけなくなるし、どこかに引っ越したとしてもその影はついて回る。助けることはつまり、レイプされたという因子を奴につけてしまうことになるってことなのだ。ハッピーエンドになったとして後々、その姉とやらに復讐されたらどうするの？

興梠が、あるいは自分が殺されるようなことになってもいいの？

有罪になったとして別の誰かがその姉の餌食になったら？　興梠のこれからの世話は誰が見て、興梠のおかしくなった行く末を誰が正しいといってやれるわけ？

美雪、お前は純で綺麗で美しいよ。間違っていることを間違っていると言える人間は稀で稀有で美しい。そんな人間があたしを慕ってくれているのかと思うと誇らしくすらある。けどね、みんながお前のように美しく正しいわけじゃないんだ。そう上手くはいかないんだ。世の中の人間は間違っていると言うことで生まれるリスクから身を守るために“無視”だとか“無関心”を装うんだ。みんな内心違うと分かっていても、リスクがそれを上回ると思ったらそうするのさ。それも一つの正義なんだよとあたしは思うがそれを口にできるほど、あたしは残酷でも冷酷でもないので、ただどうしようどうすればと泣いている美雪を抱きしめてやることしかできなかった。

あーあー、だから言ったのに。不幸を呼ぶよって。

25ページ

帰り道、やっぱり春の色合いはどぎつく私には映った。何もかもが強烈なのだ。川のせせらぎも、ウグイスの泣く声も車の排気音も暖かい空気も全てが全て。

御前の家を通り過ぎ、私は一旦自分の家に向かう。おかしなことに鍵が空いていた。玄関には御前の靴。どうやら勝手に上がられていたようだ。

台所の手前の道で嬉しそうにスナック菓子の袋を胸に抱えている御前と鉢合わせをした。御前は少し驚いたのか体を小さく跳ねさせた。

「東さん」

「あっと……おっかえりー。いやさ、家でごろごろしてるのもつまんないから勝手にあがちゃった！　あはは」

そのついでに隠しておいたお菓子を見つけたようだ。また違う場所に隠さなくてはいけない。

「……あれ、美雪どうしたの？」

「何がですか？」

「なんか、凄く落ち込んでる顔してる。何かあったの？」

「いえ、別に」

その言葉に私ははっとして顔に力を入れ、頬を持ち上げて笑った。不自然だったせいか、余計に御前の顔から笑みが薄れていく。

「本当に大丈夫？」

「ええ、勿論ですよ。ああ、今からお夕飯作りますね。今日はこちらで食べられますか？」

私は矢継ぎ早に言葉を重ね、そのまま台所を潜ろうと御前の横をいそいそと通り過ぎようとしたが、腕を御前に掴まれ動きを止められた。相変わらずお力が強いので腕が痛む。

「全て聞こうとは思わないよ。それは野暮だからね。でも、それな

りに言わなくちゃいけないことはあるよ。神足美雪」
その言葉に怒りにも似た鋭い感情が駆け上がってくるのを感じた。
言葉が溢れて止まらない。不思議だ、先程は全くと言っていいほど声が出なかったというのに。
「東瑞希さま」
「何？」
「……私は人生には絶対に間違ってはいけない選択肢というものが存在しているように思います」
「確かにそういうものもあるな」
「私は今日それを間違えてしまいました。指を咥えて見てる場面では……なかったのです。目の前に助けを求めている者がいるのなら助けなくてはならない。だけど私にはそれができなかったのです。こんな私は正しいといえるのでしょうか？　私には私が正しいとは到底思えません」
御前の腕を握る手に力が篭る。がさりとスナック菓子の袋が床に落ちた。振り向くと彼女は酷く冷たい目をしていて、普段の弛んだ唇は酷薄そうなそれに変わっていた。まるで何かを軽蔑しているような瞳。私を矮小な何かと思っているような瞳。その瞳が私にゆっくりと冷たい言葉を投げかける。
「興梠と何があった？」
「今日、奴の家へ行きました。奴を言い負かして、一緒に家へ。それで、私は家を見れて満足したんです。ああ、興梠はこういう家に住んでいるのか。ここに住んでいるのかと納得したんです。そして私は帰ろうとしました。帰ろうとしたら、興梠の姉が出てきました」
「それで」
興梠の表情が浮かぶ。ぼんやりとしつつも眉間にシワが寄っていて、手は握りこぶしを作り、小さく震えていたあの表情が。
御前に語りながら私の手は握りこぶしへと変わり、奥歯がギリギリと痛む。胃がひっくり返りそうなほど痛みを伝え、後悔の念が頭痛を苛む。金属と金属がぶつかり合ったときのような振動が視界を

ねじ曲げていて、心をねじ曲げていて、私は私が何をいっているのか上手く理解できない。ただあの時のことを後悔していて、そのことを言っているということだけが伝わる。

「その姉は興梠の唇を奪ったんです。強引に奪って、見せつけるように奪って、興梠はそれを助けてほしそうに！　助けてほしそうにしていたんです！　なのに、私は声が出なくて、やめろの一言がいえなくて、言えなくて……」

「ほう、それで」

「それで、興梠が、家に、無理やり連れていかれるまで、ただそこで、見てました」

「そうか、大変だったな」

気がつけば御前はそこにいなくて、冷蔵庫から冷えたお茶をコップに移しているところだった。肉厚の透明なガラスに茶色ともオレンジ色ともつかない液体が空気の泡を孕ませながら注がれていく。彼女は無言でそれをさし出して、私はそれを喉に通した。喉を刺すような冷たさだった。

「私は……どうすればよかったのでしょう？　私はあの時、何をすれば正しかったのでしょうか」

「お前はその時に最も正しいことをしたとわたしは思うよ。誰でもそうする。助けることは正しいとはいえないのかもしれない」

「……では！　では、自然のままにあることが正しいと？　御前はどうするんですか？　そういう時にあなたなら、どうされるのですか？」

「美雪、助けることでギリギリのバランスが崩れるのかもしれないよ。興梠が支えになっていろんなものを抑えているのかもしれない。世の中には誰が率先して泥を被らなきゃいけないことがあるんだと思う。美雪はそれを感じたから声をかけなかった。その行ないは正しいとわたしは思う」

「でもそれでは私は納得できません！　目の前で助けを求めているのなら助けたい！　誰かが不幸になることで、周りが幸せを享受す

るなんて、そんな酷いことあってはいけない！　そんなもの、奴隷です！」

「そうかもしれないな」

御前は私から飲みかけのコップを取り上げると小さく笑って私を抱きしめた。その笑いの意味も私にはよく分かる。世界がそんなに甘くはないということを御前は言っているのだろう。そしてそれを私は分かっている。私はわがままとエゴからそれを言っていて、それを御前に見透かされたのだ。

御前は言葉の端々に言っている。興梠を助けることは何かを失わせることであると。私たちがそれをすべきではないと。

御前の言っていることも最もだ。何かも忘れて、明日も今日と同じように興梠と接すればきっと気分はいいし、楽しいし、何も恐れることはない。だけどそこで別の可能性を持ち出すということはその幸福を捨てさせることに他ならないのだ。

不条理さを消すことは絶対にできない。それも分かる。だけどじゃあ、正義という言葉は、私の好きな正しいという言葉は何のためにあるんだ？　見せかけで、何も無い絶望した人間がすがり寄るためだけに存在しているとでもいうのだろうか。

「御前……鈴鹿御前」

「どうした？」

やはり私には不条理さを許すことはできない。それがあることは至極当たり前にしても、それを許せるか許せないかという問題は全くの別問題だと私は思う。だからそれを口にしようとして私は御前を見た。

彼女はきっと私なんかが何を言いたくて何を言わんとしようとしているのかなど分かっているのだろう。だからそんなに困った顔をしていて、悲しそうな顔をしているのだろう。私はきっと幼稚で、何も分かっていないのだ。

解決策も思いつかず、どうしていいのかも分からず、自分の考えに決着もできず、ただ御前に全てを投げかけ、ひたすら駄々をこね

ているのだ、私は。
そう思うと何だか涙が出た。
「私は……わ、わたしはどうしたらいいのでしょう？　わたしは……！」
「どうしたらいいのかねえ」
私はただその場で泣き続けた。

26ページ

空を仰ぎみれば何かが浮かぶような気がした。
しかし、そうしている間にも現実は残酷に時を進ませる。朝起きるのが今日ほど辛かった日もない。学校に行くのが今日ほど嫌だった日もない。足は鉛のように重いし、吐く息は私の内側の肉をそげ落としているような感覚を私にもたらした。御前が行くと言わなければ私も彼女に連れ添って休みたい気持ちだった。
「ほら、ちゃっちゃか歩く！」
「……はい」
胸が悪い。気まずい。まともに顔を見れるかどうか分からない。今直ぐ逃げ出したい。
だけど体は否が応なしに前へと向かう。校舎に入る。上履きに替える。静まり返った廊下を進み、教室の戸を開いた。
「オッス、コーロギ！　久しぶり！」
明るく御前が話しかける。心臓が破れそうなほどドクドクと高鳴った。嫌な高鳴りだ。
興梠はいつもと同じように首をこちらに向けて「昨日も会いましたよ」といって「おはようございます」といった。
「お、おはよう。興梠」
「おはようございます」
変わらない。変わらないことが逆に私には不自然に思えた。
何故、普通にしてられる？　何故、普通にできる？　当たり前のように言葉を返して、当たり前のようにそこに入られるんだ。お前は昨日、あんなことをされて、それを私に見られて、怯えてて、助けを求めてて、嫌がっていて、それでそれなのに……。
私のためか、御前は興梠にいつも以上に話しかけていて、話しかけてくれていて、時折ちらりと私の目を見る。
「まじかー、興梠テレビ見ないのかー。あたしも見ないんだけどね

」

「……」

その目は何を物語っているのだろう？

私も話しに入れといっているのか、昨日のことを聞けといっているのか、このまま忘れていつものように平穏を享受しろといっているのか、あるいは全てなのか。私には分からない。ただじっとりと汗ばむのを感じる。

私は私の責任で私の正しいと思っていることを自分自身で行わなければならない。結果がどうあれ、それをしなくてはならない。それをしないという選択肢も確かに存在してはいるが、だけどそれはただの逃げでしかない。そう昨晩、御前は仰った。

今ここでしなくてはならないこと。

「こ、興梠……！　あの、あのな、私はお前に聞きたいことが……」

そういった途端、興梠は急に席を立ち上がった。

「用を思い出しました」

「待ってくれっ！」

そそくさと興梠は私の横を抜けた。御前は知らぬ存ぜぬといった顔で私たちを見ていた。それはお前たちの問題だと言っているように私には感じた。あくまで手助けしかしないぞ、と。

私は目だけで御前に会釈をすると、小走りに逃げる興梠を追いかけた。廊下を走ってはいけないという校則を律儀に守っているためか、元々足が遅いのか直ぐに追いついた。アイツの首根っこをつかんで動きを止める。ぐっと喉が響くような音がしたが気にしない。

購買部のところまで引きずって行って、壁際に追い詰めると奴を真正面から捉えた。

「なあ、待ってくれ。教えてほしい。昨日のことを」

「知りません」

目が泳いでいる。手が汗ばんでいるのか、神経質っぽく何度も手を服に擦りつけていた。

「昨日、あたしはお前と一緒に下校した。お前の家を見た」

「はい」
「そこでお前の姉が出てきて、お前に……お前の」
「知りません」
「何で隠す？」
「隠してません」
「じゃあ本当のことを言え！」
「……」
「何で言ってくれないんだ！　お前が望むのなら、あんなことくらい……！」
「えっ」
「いや、その、お前が助けを求めてるなら、私はいつでも力になる。だから本当のことを言ってくれよ、興梠。お前は昨日、姉に――――」
「やめて……下さい」
購買部の大きな窓から入る、色の薄い日光が興梠の唇を艶かしく私に見せた。この唇はもう既に女の味を知っていて、誰かの味を知っていて、私以外の誰かの味を知っていて……いや、もしかしたらそれ以上のことをあの女にされているのかもしれない。それ以上のこととというのはつまり……。このつぶらな瞳は、毎夜誰かの為に今のように潤ませていて、頬は熱く火照り、グズグズと泣きながらこの唇は色の入った声で泣くのだろうか。この臭いも、このしょっぱい汗も、何もかも全部、私以外の――――――――
「――――美雪っ！」
バンと何かが破裂するような痛みが頬を襲った。キインと片耳が内側で音を鳴らしていてバランスが取れない。私はそのまま、ずるりと横に尻餅をついた。
音が回帰する。視界が、現実が回帰する。
「……あっうっあっ、うっうううえっ」
興梠が泣いてる？　声を押し殺すように泣いていて、乱れたシャツから覗くうなじを朝日が白く染めていて、興梠は首を変なふうに

ねじ曲げながら、ボロボロと涙を流し、御前に服を直してもらっているようだった。遠目で見れば母親が自分の子供にパジャマを着せているようにも見えたかもしれない。

いや、え？

どうして、いや、だってだってそんな。

「美雪、今日は帰れ。幾ら何でもこれは最低だぞ」

「えっ、いや、私はそんな、そんなつもりは……」

「お前は今、ここで、興梠を」

「ほ、本当なんだ。興梠、私はそんなつもりは！」

「興梠を犯そうとしたんだ」

27ページ

「こ、興梠違うんだ！　私はお前のことを心配して、そんなつもりは毛頭なくて！」

「わーーっ！」

私は興梠の細い足首をつかんで、喋る。御前はその手をパンっと蹴り上げて、興梠を後ろに隠した。何故、御前がそんなことをするのか理解が及ばない。

顔にそれが出ていたからだろうか御前は残念そうな顔で私を見下ろした。

「美雪、みっともないぞ。頭を冷やせ。それに興梠は怯えてる」

怯えている。誰のせいで？

当然それは私のせいで。

興梠は不自然な方向に首をねじ曲げていて、左手の親指を咥えながら、体を前後に揺らしていた。どこも見ていない瞳から零れた涙が、唇から漏れる涎と混ざり合い、顎の先端からポタポタと零れている。

興梠は誰がどう見てもおかしくなっていた。

「御前、わ、わたしは」

言い訳が口から溢れて止まらない。何かの間違いだと私は思うし、そう思いたい。しかし同時に何をしてしまったかを理解していて、それが自分の行いだということを理解してた。そんな私を見透かすように御前は冷えた言葉を吐きかける。

「美雪、わたしに言い訳をしてもしょうがないだろ。それにな、わたしは影でお前達の会話を聞いていた。それで急に会話が止まったと思ったら、興梠の泣き声が聞こえて、覗いてみればお前が興梠の服を脱がして、コイツの体に何かをしていた。怯えて泣いているのにお前はそれすら楽しむかのように……」

「や、やめて下さい！」

耳を遮れど言葉を遮れど、何も現実は変わらない。ただ辛辣にそれは私を責め立てる。

「わたしも自分の目を疑ったさ。お前がしてる最低な行動にね」

そうじゃない、そんなことをしたいんじゃなかった。ただ興梠の匂いをもっと近くで嗅ぎたくて、興梠の体に触れたくて、興梠の味が知りたくて、それを他の人間が知っているのが許せなくて、興梠は抵抗しなくて、誰も見ていなくて、学校の近くに自販機とコンビニがあるから朝の購買は誰も訪れないと私は知っていて、だから、興梠を犯そうとしていたわけじゃなくて、ただそういうことで。

御前はただ哀れな人間を見るような目で私を見下ろしている。興梠は親指をしゃぶっていて前後に体を揺らしながら、涙を流していた。

「あ、あ、私は……」

「今日は帰れ。一週間は家から出るな」

そういうと御前は興梠を連れて歩き出した。近づこうとするも御前の冷えた目が寄せ付けることをよしとしない。

「御前、あの、どちらへ……」

「保健室へ連れて行く。この状態はあまりにも酷いよ」

「わ、私も、その、ご、ご一緒に」

「お前は自分のしたことを本当に理解しているのか？　お前は興梠を強姦しようとしたんだぞ？　興梠の気持ちを踏みにじり、自分の信念をねじ曲げ、私の評価すら投げ捨てて、お前はそういうことをしようとしたんだ。それでも付いてきたいというなら、わたしは知らん。勝手にしろ」

普通は引き下がる。こうまで言われて普通はついて行こうとは思わない。

だけど私は付いて行ってしまった。自分が馬鹿だと思いながらも、脂汗を掻きながらも、ふらふらとおぼつかない足で。

早朝だというのに保健室はあいていた。白衣を着た教師は泣きは

らした興梠を見ると直ぐに何かを悟ったようで、ベットの準備をして興梠を寝かせた。

教師は興梠は先天的な心の病を抱えているのだということを教えてくれた。ストレスに弱く、それを上手く処理することができないのだと。そのことは事前に家族から聞かされていたらしく、時折カウンセリングの真似事のようなこともしていたのだという。

「コミュニケーションが上手く取れなかったり、人の感情とか表情を読み取るのがあの子は苦手なの。あなたが悪いんじゃないわ」

「だってさ。よかったね、美雪」

教師は落ち込んでいる私を見て、そう呟く。御前は私がした行いを知っていて、そう呟く。

胃が締め付けられるような痛み。脂汗、吐き気。

絶望とは何かと問われれば私は今まさにこの状況、この感情を伝うだろう。

教師は家族に連絡を取りに職員室へ向かい、しばらくして興梠の姉が現れた。

スポーツ選手が着ているようなジャージ姿で現れた興梠姉は冷え切った目で室内を進み、カーテンの掛かった興梠のベットへと向かった。会話をしているらしく、聞き取れない程度の声が聞こえた。私はその間、ただ縮こまって自分の指をじっと眺めていた。思考が定まらないのだ。

興梠姉はおかしくなった興梠の手を取り、私の前まで無言でやってきて、頬を拳で殴りつけた。がきりと歯がこすれるような痛みに涙が出るが、私は彼女を非難することも、泣き喚いて同情を誘うことも、すみませんと謝ることもできなかった。驚いて目を丸くしている教師にただ大丈夫です、というだけだった。

御前は私のためか、そのことで何やら姉と揉めているが私には上手くそれが処理ができない。意味が分からない。冷えた目で興梠姉は私を指さし、クズだとか人でなしだとかゴミと言っているのが分

かるが、何について会話をしているのかまでに思考がいかない。そんなことは、どうでもよかった。

何がどうあれ、彼女の暴力には正当性があり、私は性犯罪者と同格であり、興梠は一方的な被害者だった。それだけは確かなことだと言える。

視界の端で親指をしゃぶり続けている興梠と、絶えずオロオロとしている教師だけが瞳に写っていた。

28ページ

パラパラと小雨が窓を叩く。渡り廊下を挟んで見える池にはいくつもの波紋が連なり、春の色香を雨の匂いと共に私に伝えた。御前は少し寒いという。私は少し残念な気持ちを抑えながら視界と窓を隔てた。見上げる空は薄墨色で、不穏ながらも酷く私を安心させる。

私は御前と一緒にしばしの余暇を味わっていた。御前は藍染めのお召し物に身を包み、私の耳かきにただ時間を消費していた。

御前はあれから一言も私を責めるようなことをいっていない。おそらくはきっと、それが私を一番苦しめることだとご理解されているのだろうと私は思う。事実、今も気が狂いそうなほど辛い。飯は喉を通らず、血反吐が口から出る。

普通なら恨み言の一つでも吐きそうなものだったが、私はそれがありがたかった。私をこうやって監視して、責め続けてくれることがありがたかった。

ひとりでいたらきっと耐えきれず、私は興梠の家にいってしまうだろうことは明白で、家の前で何時間も待つことは明らかだった。

分かっていて、私はいう。分かっていて御前は答える。

「東さんは学校にいかないんですか？」

「今日は雨だからいっかなーい」

「もうっ」

弛んだ空気。

その背景にはぞっとするような出来事が溢れているというのに、なんだというのだろう。この停滞した空気は。

「そういえば」

「はい」

「そういえば美雪は知ってる？　この町の図書館には何でも知ってる不思議な人間がいるんだって」

「ああ、私も聞いたことがあります。赤目の白い妖怪の話しですよ

ね？　何でも、それ相応のものと引き換えに世界のあらゆることを教えてくれるとか」
「へー、あたしの方では人間だって聞いたけど、美雪のほうじゃ妖怪なんだ。まあ、何年も前からある話しらしいしね」
「どちらにせよ、この世のことを何でも知っている人間などいませんよ」
　知っているなら、是非とも教えてもらいたいことはいくらでもある。興梠の家族のことや心のこと、好きなもの嫌いなもの。姉との関係や私のことをどう思っているのか。
　御前は耳かきの手を柔く押し退け、部屋の隅から私たちを見下ろしているお面に指を向けた。
「いやさ、そいつってああいうの持ってるのかなって思って」
「同郷の士であるかどうか、という話しでしょうか？　それは現実的ではないのでは？」
「妖怪よりかは現実的だと思うけどねー。ああ、そいつね、実際にいたんだけどさ」
「えっ？」
　私は素っ頓狂な声を上げた。それが面白かったのか彼女は私をからかい混じりに笑う。
「あー、おかしっ。いやあね、まあその何でも知ってる奴は確かに何でも知ってたけど、ただの人間だったよ。話し聞いてみたら、そいつのおばあちゃんの代からそういう道楽やってたんだって。代々受け継がれていく意志……なんていうとちょっとカッコいいよね」
「ええ、まあ」
　私は実際に存在していたという驚きに上手く相槌が打てない。その人物がどこにいるのかということを聞きたくて仕方がなかったが喉の奥で抑えつけて、御前の言葉を待つ。
「美雪はさ、自分の母親とかに会いたいと思ったりはしないの？　両親が恋しいとか思わないタイプ？　あたしはホラ、わりかし一人は辛いからおかーちんが帰ってきたときは何だかんだで嬉しいけど、

でも美雪はあたしよりも長い間、会ってないじゃん？」
「そう……ですね。確かに母には暫く会っていませんね。それどころか父は生まれてこの方一度も見たことはありませんけど、でもどうしてでしょう。そこまで恋しいという気持ちにはなったことはありませんね。幼い時から奥様に可愛がっていただいているからかもしれません」
「……うわー、なんか優等生って感じの答えだね」
御前は起き上がると一頻り笑い、私を抱きしめました。
暖かく、柔らかい。若干の汗の匂い。
「あたしたちは家族だよ」
「嬉しいです」
本心からだった。
「家族だからあたしは美雪を見捨てないし、本気で怒るし、望みがあるのならできる限りの協力はする。今は耐え時だ。美雪は興梠のことが好きかもしれないけれど……」
「す、好きであいうことをしたわけじゃ、ありません。あの、性的に欲求不満だったところにあいつがいただけです」
そこは譲れなかった。かくして通すつもりだった。
御前は一瞬眉を潜め、そして続けた。
「まあ、それでもいい。とにかくお前は人を傷つけたんだ。元の鞘にもどるにはそれなりのリスクと時間を覚悟しなくちゃいけない。わかるな？」
「……はい」
「美雪は今、確かにハイと言ったね。あたしはそれを信じるよ。……うん、大丈夫そうだ。まあ、それでね、その何でも教えてくれる奴にあたしは聞いたのさ、興梠のことを。いろんなことを聞いたよ。まあ、そしたらあいつ土日……つまり明日と明後日、ある時間になると散歩に行く癖があるんだってさ。だからね、明日あたしと一緒に興梠に謝りに行こう」
「はい、ごめんなさい。何から何までご心配をお掛けして……」

「野暮だよ」
もう一度、御前は強く涙ぐむ私を抱きしめて、頭を撫でた。
私はそれから明日の予定を聞き、興梠の散歩のルートを聞き、心構えをして、奥様から“もしもの時に”と預かった薬を明日の朝食に混ぜることに決めた。
これは私の問題で、御前には迷惑をかける訳にはいかなかった。
私は私のケジメを自分自身の力でつけなくてはならないと思ったのだ。

29?

朝食を作っている時から美雪の様子は明らかにおかしかった。私がどうしたのだと問いかけると、あろうことか美雪は「体調が悪い」といって学校を休みたいと抜かした。普段のあたしならば「そうかそうか、それは大変だ」と呟いて、休みをくれてやることもやぶさかではないのだけれど、昨日の今日という言葉があるように、その原因は昨日（さくじつ）の出来事が起因していることは疑いようのない事実なのは明確かつ確定的な事象といえた。

普段の私と美雪の関係を逆転させたような学校に行きたくない、いやいや行こうではないかという会話はなかなかに新鮮で面白可笑しく思えたが、何度も続けていると飽きというものがやってきて、あたしは早々にウンザリし始めていた。なるほど美雪はいつもこんな面倒な気持ちを味わっていたのかとあたしはカルチャーショックを味わうのだった。

トロくさく歩く美雪の手を引いて、早朝のたおやかな朝日を浴びつつ廊下を進むと教室はもう既に目の前だった。

美雪の表情を伺ってみると奴は今にも砕け散ってしまいそうなひび割れたガラスコップのような面持ちで、深呼吸を何度も繰り返していた。頭が重いと呟いたがそれはおそらく深呼吸しすぎの、過呼吸だろうと思ったが何だか可哀想だったので言わないでおく。

美雪は昨日のあれからずっと泣いたりぐずったりブツブツいったり、果てはあたしの布団に潜り込み、どうしようどうすればと呪詛の言葉のようにあたしに言って聞かせたが、あたしはそんなの自分で考えろと言わんばかりに無視を決め込み、それを子守唄替わりにして寝てやった。あたしが寝ている間も真剣にいろいろと考えを巡らせていたようだが、どうやらどうにもどうして、答えは出なかったと見える。

引き戸をガラリと開けると昨日と変わらず、興梠は椅子に座り、相変わらずな虚ろいだ目で黒板を凝視していた。美雪に話しをかけろと顔を見つめるが、奴はアリもしない方向に首を曲げて興梠を直視することを恐れた。あたしはため息混じりに「何故、あたしがこんなことをせにゃならんのだろうか」と思いつつも人形よりも表情の少ない人間に気さくに挨拶をかけた。ちなみに興梠が人形に唯一まさっているところは可動パーツの多さくらいだろう。しかしそれも最近では覆されつつあるらしいが。

奴はつまらない挨拶を返した。流れに乗って美雪がカミカミの挨拶を興梠に向けていった。だからちゃんと目合わせて挨拶しろよあんたら。

挨拶が終わると重苦しい空気がその場を包んだ。いやそれは、凡(およ)そ二、三秒ほどの時間だったのだろうけど、あたしにはそれが苦痛で息苦しかった。あたしは仕方なく妙な焦燥のためにペラペラと喋りたくもない人物と会話を交わし、言葉を進める。中身などなく、面倒極まりない上に退屈な内容だった。さっさと当事者同士で決着をつけるなり、会話をするなりしてほしかったが、相変わらず美雪はモジモジしていて何だがキモイし、興梠は興梠でどこかソワソワとしていてキモかった。

会話のネタストックがどんどん消費され、あたしの限界値まで数値が満たされつつあるところで美雪がバカでかい声で「こ、興梠！」といい、続けて「あの、あのな、わわわ私はお前に聞きたいことが……！」と言った。おお、頑張れ頑張れと少し引いたところで見ていると、興梠は急に立ち上がり用があるだとか何とかいって逃げた。一瞬転びそうになりつつも立てなおして廊下に出る。

「待ってくれ」とまたデカイ声で美雪はいい、あたしをちらりと見たあと興梠の背中を追った。いやあ、青春だねえとあたしは楽観視。

興梠はめちゃくちゃ足遅かったし、美雪もなんか大丈夫そうだったから、とりあえずは一件落着といってもいいだろうと思ふ。うん、一件落着。あとは当事者同士で何とかするでしょう。いや、だから

これは心配とかじゃなくてただ、購買の自販機でジュースが飲みたくなったなのだとあたしはあたしに言い訳をして一人で笑った。

「さてさて、どうなってることかね……」

購買の方へと向かったはずだとあたしは見切りをつけて、フラリフラリと前へと進む。うっすらと反響する美雪の声は誰もいない購買部、自販機の隙間の部分から聞こえているようだった。

我が校の購買部は昼になればそれなりに人が集まるためか、一部広いスペースを取られている。で、そこで美雪と興梠（厳密には一方通行のようだけれど）は何やら言い争いをしているようだった。仲良くしようそうしよう。

あたしは壁に背を預けて、ぶつくさ聞こえる言葉に耳を傾け、微笑んだ。美雪それはもう、まるっきり嫉妬じゃないかとか思うのだ。

ふと急に静寂が包みこむ。かと思えば不思議なことに興梠が何かを言っている。なんだアイツ、やろうと思えば自分から声かけられるのかとあたしが思っているとその声はだんだんと湿ったものになり、ぐずついた声になった。しゃくり上げるような声。

さっと視界が白く染まった。

どこかで聞いたことのある声だった。二度と聞きたくない声だった。もう二度と関わりたくない声だった。

途端に興梠が何を言っていたのかに察しがつく。ついて欲しくはないけれど、そうであって欲しくはないけれど、おそらくはそう「やめてください」の一言だった。

あたしは即座に二人のところに向かう。向かうと、興梠がエグエグと両手で目を擦りながら泣いていて、美雪がふうふうと獣じみた顔で首筋に吸い付いていて、手は興梠の衣服の中にあった。

美雪が興梠を犯そうと、いや犯していた。

我が目を疑った。

30?

「美雪……」

何が起こっている。何が起こっているんだ。何をお前はしている？

獣じみた表情で、獲物を喰らって、お前は何をしている。

あたしの知っているお前は理知的で、大人しく、人を傷つけず、正を愛し、悪を憎む。そんな清い人間であったはずだ。それなのに今のお前は、幼子に手をかける鬼母神ではないか。

頭が痛む。記憶が閃光のように奥底から蘇る。黒い土に埋めた記憶が掘り返されて、あたしの手足を掴む。

やめろやめてくれ、美雪それだけは。

興梠、その表情はやめてくれ。

それではまるで……。

「美雪っ！」

あたしは走り、平の手で美雪の頬を叩いた。美雪はバランスを崩して、その場にゆらりと尻餅をついた。

あたしはそのまま興梠のはだけた衣服を正す。涎と鼻水その他もろもろで濡れそぼっていて、感触が気持ち悪いが、そんなことに構っている場合ではなかった。

首筋の歯型にぞっとする。

まるっきり獣ではなかいか。人を傷つけて何も感じず、当たり前のようにしている獣。自分たちよりも弱いからという理由で儚い花を握りつぶす獣。

美雪は自分が何をしていたのかよく分かっていないといった表情であたしと興梠を見て、歪に笑った。悪夢だとか幻だとか幻影だとかそんな何かを見て「ああ、これは夢だ。よかった」と、そんなことを思っているような笑みだった。しかしその意識は次第に現（うつつ）と気がつき、強張り震えた。自分の罪深さに気がつき震えた。

小さく、そんなそんなと呟くがそう思いたいのはあたしも同じ気

持ちだ。夢、幻であればどれほどよかっただろうことか。

今この現状で何をいっても無駄だろうと踏んだあたしは、今日は家に帰れというと美雪は慌てたように何かを言おうとした。それは現実の否定であり、逃避だった。

だからあたしは言ってやった。

「お前は今、ここで、興梠を……興梠を犯そうとしたんだ」

苦々しく、口にするのもおぞましい言葉をあたしは吐きかける。自分に近しく、最もあたしに長く付き添った人間にそう呟く。それがどういう意味を孕んでいるのか理解しつつも、自分の血を否定することになろうとも、あたしはそう呟いた。その言葉に美雪は唖然とし、次に四つん這いで興梠の足をつかんだ。

弁明、あるいは許しを乞うためか。

興梠は園児のような悲鳴を上げて、あたしの服のシャツをぎゅっと握った。それが苦しい。

お前がいつまでも無表情であり、ただ犯されていることに対して耐え続けているような人間であるならば、あたしもここまで心を揺さぶられることはなかっただろうに。それはただ害意から逃れようとすることを諦めた怠惰な行為だからだ。諦めという愚かな行為だから。

だけどお前はこうやって精一杯嫌だと周囲に伝えている。赤子が自分の意見を泣くことでしか伝うことができぬように、お前は泣いて助けを乞うた。誰かに助けを乞うた。

掴まれた足から悪意が自分に伝播していくかのように興梠命は怯え続け、狂ってゆく。頭をあらぬ方向にねじ曲げ、涎を滴らせ、アーアーと泣き叫ぶ。その泣き叫ぶ声があたしの全身を殴打し、裂き、串刺しにする。我慢ができない。

あたしは美雪の手を蹴り飛ばし、興梠を背中に隠した。美雪は何故といった表情であたしを見つめるが、お前にはこの興梠の戦慄く手や怯えきった表情が見えないのか。お前が引き起こした暴力によって苦しんでいる、息も絶え絶えな者の姿が見えないのか。それは

もう、狂人と同じだよ、美雪。

言い訳をしようと開く口にあたしは辛辣な言葉を掛けてやる。お前が何をして何がどうなって、どうしてこうなったかを冷たく教えてやる。

美雪は現実を、あるいはあたしを否定するかのように両の耳に手を当てて震えた。だけど結果は何も変わらない。真っ赤に染まりきった獣の口は血に塗(まみ)れているのだ。否定しようにも、その血の色香を獣自身が証明してしまう。

「今日は帰れ。一週間は家から出るな」

あたしがそういって興梠を連れながら、移動しようとすると美雪は到底尋常とは言いがたい目であたしに近寄った。その表情は己の獲物を攫われた獣のそれだった。あたしはそれにウンザリとしながら、興梠を保健室に連れて行く有無を美雪にいうと美雪は自分も同行したいといった。興梠を凝視しながら、震える声で。

あたしにはそれが武者震いのように思えて気が気でなかった。ある日、己の力が人ならざる領域にあることに気がついた怪物を見るような、そんな気持ちだった。

あたしは冷たくあしらう……がしかし美雪はそれに動じつつもついてきた。送り狼と言わんばかりの視線で着かれず離れず。

保健室にたどり着く頃には美雪のその高ぶりも収まったのか、獣のような雰囲気は小さく縮こまっていて、押せば崩れそうなほど脆く思えた。自身の罪悪の重さに耐えかねているような青白い表情だった。

白衣を来た養護教諭の女は何も聞かず、興梠を見るとベッドに運んだ。奴はシャクリ上げながらベッドで胎児のように丸まり、外界と己を完璧に隔てた。

その教師曰く、興梠は生まれついての自閉症であり、至極一般的な対応ができないのだというが……あれはどう見ても虐待の結果だろうに。理論ではそう見えるのだろうが、あたしには、あたしの経

験ではあれと相違ない症状は虐待以外の何モノでもなかったし、それ以外のものには到底見えなかった。

それからしばらくして、興梠の姉が来た。

31?

美雪から聞き及んでいた通り、その女は脳の一部が壊死しているのかと言わんばかりに欠けていた。美雪は興梠の姉を「表情がない」だとか「表情が極端に少ない」と評したがそれは間違いなのだと思う。姉は表情がないのではなく、全てを憎悪し、恨み、呪っているが故に表情といったものが欠けているのだ。自分の見ている全ての世界を否定しているから、見ている全てを憎悪しているから表情を必要としていないのだ。

ジャージ姿の女は酷薄そうな唇から「命はどこですか」といった。恐らく敬語を使うことすら煩わしいと思っているに違いない。

教師がカーテンの掛かったベッドまで姉を移動させると、姉は少し二人きりにしてほしいといって教師を蚊帳の外に追い出した。

横で椅子に座っている美雪は落ち着きがなく、自分のしでかしてしまったことが露見することになるのではないだろうかと、何度も目を瞬かせ、怯えていた。それは後悔だとか、自分の罪への恐れではなく、罪が暴かれることに怯えているのだ。

あたしはこれからの美雪との付き合い方を考えねばなるまいと思った。もしも人に噛み付く犬であるなら、噛み付かないようにするのもまた主人の義務なのだ。それに興梠だけに執着をしているのならまだいいが、興梠だけではなく、そこらかしこの少年少女に手を出すようなタチの人間だったのなら、あたしはあたしなりの社会への責任を取らなければいけない。妹を手を掛けることを想像して気が滅入るが、既にこの手は血に塗れているのだ。今更、人でなしが人を気取ってもいか仕方ないだろうと思った。

サッと白乳色のカーテンが開く。姉は興梠の手を引いて、あたしと美雪を一瞥した。美雪はその目とかち合い、そして逸らす。それ

だけで十分だったようで、姉は真っ直ぐと美雪のところまで来ると大きく腕を振りかぶり、拳で美雪の顔を殴った。大きな音を立てながら美雪は後ろに椅子ごと倒れた。鼻血をポタポタと滴らせ、付きそう教師に「大丈夫です」とか細い声で呟き続けた。

無言で去ろうとする興梠の姉を私は引き止めた。興梠の姉はうっとおしそうにあたしを品定めし何だ、と答える。清々しいほどの憎悪と拒否の姿勢にあたしは笑いたくなるも、笑えば全てが台なしなのは眼に見えていたので、シリアスっぽい空気で興梠の姉に「幾ら何でもやり過ぎである」ということを伝えると冷えた目で姉は美雪を指差し「あのクズが何をしたのかお前は知らないわけではないだろう。人でなしはこうなって当然だ。ゴミに生きる価値はない。まだ甘くした優しい方だ。寛大な私に感謝しろ」といったようなことを言った。

寛大どころか尊大なその言葉にカチンときたあたしは「そんなに命ちゃんが大切なのに、命ちゃんに酷いことしてるんですよね」と満面の笑みでいってやった。すると目の前の背の高い女は一度目を瞬かせ、あたしの名前を聞いた。それに律儀に答えてやると女は口端を持ち上げて「ああ、色狂いの家の……。どうりであのゴミも狂ってるわけだ」とのたまった。あたしがその言葉に絶句していると女は続けて「人攫いで色情狂の下衆な鬼どもが偉そうに汚い口を開くな」と言った。はっきりと言い切った。

自分の恥部を見られたかのような焦燥に黙り込んでいると、女は私をカカシを見るような目から、ゴミでも見るかのような視線に変えて見下し、部屋を後にした。

目の端に映った興梠を撫でる表情だけは人間らしかった。

翌日、あたしは少し遅れてから登校した。興梠は休み時間になると毎回屋上まで行き、フェンス越しに青い空をぼうっとした目で眺めていた。飛行機が一筋の白い雲を描くのを見て、奴は手を広げてそれを掴もうとする。なんともその仕草が可笑しくてあたしは笑っ

てしまった。興梠は精神年齢が大分低いに違いない。

お昼休みになると、奴は律儀にも約束を守るためか屋上に来て、日陰に潜り、一人で弁当を開けていた。そこで奴はその日初めてあたしに「なんでついて来るんですか」と口を開いた。あたしが美雪にお前が何をしているのか見てきてほしいと言われたのだと教えると、奴は何故美雪がいないのかと聞いてきたので、あたしが美雪は謹慎処分中だと教えると興梠は少し驚き、瞳をいつもよりも幾許(いくばく)か膨らませてあたしを見た。そしてごめんなさいと謝った。いやまあ、ただ家で蔵の掃除をしているだけだし謝るほどのことではないとあたしは思うのだが、まあ何か説明するのも面倒だったし謝らせておいた。

興梠は「今日の東さんはやけに優しい」といった。人の悪意に敏感なだけあるらしく、そこら辺は流石に気がつくらしい。

あたしは主人なりに美雪がしたことについて悪いと思っているのだと言いながら、興梠はあの時の記憶がちゃんと残っているということ気が付き、驚いた。

何故ならあの手の泣き方をする人間は防御作用のためか別の要因があるのか知らないが、その時のことを“なかったことにする”のが常だとあたしは知っていたからだった。興梠はそれを問われると、恥ずかしそうに俯きながらあたしが興梠を庇ったこと、助けたことを覚えているといい、感謝の言葉を連ねた。

何だか恥ずかしいような痒いような気持ちだった。あたしにとっては興梠自身が大切だったとか守りたいとかそういう善意や好意から来たものではなく、単純に自身のトラウマから行ったものなので、正直それは違うと思ったが、感謝されるのは何となく気分がよろしいので、そのまま感謝されることを選んだ。

まあ折角だしということであたしは興梠に質問でもしようと思い、姉とのそーゆー関係というのは辛くはないのかと聞いてみたところ、何のことだとすっとぼけたのであたしは奴の律儀さを利用して、自

分の秘密と引き換えに話しを引き出してみた。興梠は些か大げさではないかというくらいに驚いて見せたが、まあいつもがアレだし、普通の人間の驚き方に比べれば微々たるものだったからまあ、少ないといえば少ないといえる。

で、興梠は「あたしと美雪は腹違いの姉妹である」という話しの対価に姉との関係をちらりと述べたが、まとめると「姉は仕方がなくボクチンこと命ちゃんを虐めているのです」とのことだった。本当は嫌だけど、でも仕方なく虐めてるとかなんとか。

それ絶対騙されてるよとか思いつつも、まあ本人にとってそれが一種の救いであるなら、それに口出しするのは些か非情であるとあたしは思い、口を噤んだ。

あまり突っ込んだ話しは聞けなかったが話しを聞いている限りでは、性的な接触のかほりがするし、父と母がいるのにどうして気がつかないのかが謎だった。もしかしたら興梠家の闇はあたしが思っている以上に深いのかもしれない。

32？

まあ、あたしのコミュニケーション能力の高さと懐の広さのおかげか、興梠とはそこそこに打ち解けることができた。ような気がした。

奴は無表情ながらも心の中では人並みにいろいろと考えているらしい。いや、だけどそれを人並みの思考といえるかはやっぱり謎だ。やはりどこか普通とは違うのだけど、まあそれをいう必要はないか。

今度、美雪を連れて正式に謝罪をしたいと伝えると、興梠は美雪の名前を聞いて露骨に顔を強ばらせて、震えた。あたしが責任をもって二度とあのようなことをしないようにする、そんなことをさせないようにすると言うと、奴はあたしを一応か信頼しているらしく、少し考えるような仕草をしたあとに「東さんが一緒なら……」といって頷いた。自分の人徳というものに酔いしれそうだ。

空見て心の傷を癒している興梠を後にして、あたしは昼食中の八瀬を呼び出し、この町に住むという情報屋についての話しを（暴力をチラつかせながら）聞き出す。八瀬の一家はあたしよりもこの町に住んで長いらしく、というか長いのでいろいろな情報を知っているのだ。

自分よりも位の低い家の人間にものを頼むというのは何とも言いがたい屈辱を感じたが、同時に八瀬のプライドを刺激したのか事は思ったよりも上手く進んだ。

わりと近しい図書館に白い髪で赤い瞳の魔女（本当に八瀬は魔女と呼んだ）がいて、暇であれば何でも質問に答えてくれるらしい……が、それは十数年前の話しで、微妙にその噂も最近では変わってきているし、今もその魔女が生きていて、まだそこにいるのかは分からないとの事だった。半世紀近く続いてるらしい話しに信ぴょう性が一気に消え失せるが、八瀬の阿呆はわりかし真剣な顔で「結構、

マジらしい」と言った。
　いやいやよく考えてみろ。相手が二十代の頃から始めたとして、半世紀近く……まあ四十年やってるもの好きだとして六十歳。生きていたとしても、その年齢まで同じことを続けているとは到底思えない。暇人すぎるだろそれ。他人が妖怪とか言い始める気持ちもよく分かる。

　半信半疑どころか九割嘘だろとか思いつつ、その場所へとバスに揺られて行ってみる。意外や意外、建物は美しく、築十年以上とは到底思いがたい近代的なデザインをしていた。夕闇の森に佇む魔女の館のようなものを想像していただけに拍子抜け。
　二階と一階が吹き抜けになった清潔感溢れる図書館をうろついていると、それらしき人物に出会った。そいつは人のまったく寄り付かないだろう論文のまとめられた個室で一人で何かを読み耽っていた。
　スラリと伸びたブロンドの髪に青みがかった瞳（赤ではない）でモロ外国人様といった風体。窓から漏れる光を浴びた少女は、小さな椅子に座りながらあたしに天使のような微笑みを零し、口を開いた。
「何見てんのよ、ばーか」
　殺意が沸いた。
　天使のような美しさと天使のような微笑みを持った少女の言葉はまさに悪魔と呼ぶに等しく、あたしがキレやすい十代とやらならば金属バットで此奴（こやつ）の頭に三回ぐらいはフルスイングをカマしていただろうが、あたしは平和的かつ大人しい黒髪の乙女なので、そういう野蛮な行動には至らなかった。代わりに読んでいる本を取りあえげ、閉じてページを分からなくしてやる。これが淑女の喧嘩のしたかでございます。
　ギャアギャアと何かを叫ぶコイツを何とか黙らせ（暴力的行為は存在していなかったとあたしは主張したが、意見の相違が発生した）

たあたしは噂の情報屋かと問いかけると、目の前の悪態女はあっさりとそれを認めた。何でも祖母の代からやっている道楽のようなものだったが、いつの間にかやらなくてはならいことに決定され、週一はここで本を読んで時間を潰しているのだという。

情報屋というわりにはペラペラと「今日はお母さんの番なのにお兄ちゃんとジオラマ作りに熱中しちゃって、二週連続でこんなダルいことやらされてるわけよ」とか何とかいっているが本当に大丈夫なのだろうか。他人の家族事情という奴はなかなかに面白いが、同時に不安になる。情報漏えい、ここに極めり。

天使のような悪魔は情報を知りたいのならまず自分のことを述べよといったので、しょうがなくあたしは自分の情報をいろいろと教えた。嘘八百で乗り切ろうかとも思ったが、その後のことを考え、真実を述べたほうがいいだろうと判断して、答えられるものはなるべく答えた。

どこから取り出したのか分からないノートブックに女はあたしの情報を打ち込み、それが終わると興梠の情報を教えてくれた。あたしの状況を考えると明らかに知ってはいけない情報とか知らなくていい情報まで教えてくれやがったので、殺してやろうかとも思ったが悪意があったわけではないらしかったので、そこは我慢する。というかわりとイイヤツくさいので許す。

一通り情報を聞き終わると女は天使のような声と顔で「ねえ、人を殺した時ってどんな気持ちだった？　お婆ちゃんもお母さんも何でも教えてくれるし、何でも答えてくれるんだけど、それだけは教えてくれなくてさあ」と言ってくれたのであたしは「バーカバーカ！　ブラコン性悪なんちゃって外人のバーカ！」と答えて、走り去った。

後日、美雪にその情報屋が実際にいた事を話すと美雪は滑稽な顔と声で大げさに驚き、あたしを存分に笑わせてくれた。よじれる腹を抑えつつ、美雪に母親のことを聞く。美雪は少し考えて、両親に

は執着がないと答えてくれたのが私には嬉しかった。いや、嬉しいというよりも救いと呼べたのかもしれない。

あたしはそこで己の母親を殺したのはわたしであるということを言おうかと思ったが、やはり言葉は喉の奥で留まり、別の言葉を押し上げた。

美雪に嫌われることが何よりも恐ろしかった。このあたしに対する美雪の感情が消え去って、それが憎悪に変わるのかと思うと恐ろしくて恐ろしくて仕方がない。だからあたしは、ただ美雪を抱きしめて、何時までも一緒にいようと心に決めるしかなかった。

償いだとか、後悔ではなく、ただそうしたかったのだ。

33ページ

のん気に興梠は大きなドブ沿いの道を歩いていた。ドブ沿いといっても汚らしいものではなくて、無駄に使われた税金のおかげか、大きな曲線を描く道は綺麗で水の色も透き通って見える。鴨の親子が流水に逆らってのびのびと泳いでいた。それを興梠はぼんやりと眺めている。口が少し開いているのが大変、愛らしかった。

私の家からこんなにも近い場所を毎週、散歩していただなんて知らなかった。

予定だとこのまま道をしばらく進んで、畑だらけの遊歩道に入り、小さな山の頂上で一休みするらしいが、そんな場所まで行く気は毛頭ない。

「今日は午後から雨が降るらしいぞ」

「……っ！」

私は興梠の腕を後ろから掴んで言った。

興梠は大きく体をはねさせて、私の顔を見た。見て、怯えた。あからさまに怯えて首を左右に動かす。どうやら御前を探しているようだったが、残念ながら御前はここには来ない。それを教えてやると奴は蛇に睨まれたカエルと言わんばかりに脂汗を流してヒュウヒュウと掠れた息を吐いた。

「あの……離して、ください」

「だめだ」

「あっ、わ……あの、僕を、どこへ連れてくんですか？」

「どこってそれは……私の家に決まってるだろ」

興梠が息を呑んだのが手を通して伝わる。奴の体は生意気にも抵抗しようと試みるが、圧倒的に力が弱い。寧ろ心地良いくらいの抵抗だった。

「あ、あの、あああ、あのあの、僕お腹空いたので、家帰らないと、行けなくて……その」

しめたと思った。私は足を止めて振り返る。
「何で嘘を吐くんだ？」
「えっ」
「お前は今日このまま散歩を続けて夕方まで帰らない。土日はいつもそうすると決めているんだろ？」
「あ、え？　何で……」
「なるほど、つまり今お前は私を騙そうとしたのか。嘘をついて騙そうとしたのか！　私はこんなにも正直に話しをしているというのにお前は私に嘘をいって、私を傷つけたわけだ。そうか、お前はそういう人を傷つけても何とも思わない卑劣な奴だったのか。可愛い顔して心の中では舌を出して私を嘲笑っていたわけだな！　ああ、幻滅だ。ああ、うんざりだ。最低だよ、興梠。
　私はお前が雨で濡れないようにと、家に招待しようとしただけなのに、お前はその善意を裏切ったわけだ。お前にとって私はその程度の人間で、裏切ろうとも傷つこうとも、どうでもいい存在ということか。お前にとっては私という人間は友人でも友達でも親友でも知り合いでもなくて、代変えの利くその他に分類されるんだな。
　がっかりだよ、興梠。悲しすぎて涙が出るな。私を傷つけた責任、どう取ってくれるんだ？　まさか、ここでハイさよならというわけじゃないよな？　お前はそこまで腐った人間じゃないよなあ、興梠。それとも何か、お前はそんな優しさの欠片も持ち合わせていない鬼畜生なのか？」
　興梠は自分が何をすればいいのか混乱しているようで、視線を右往左往させ、目尻には涙が溜めて慌てふためいた。本当に自分は相手を心底傷つけてしまっていて、申し訳なく思っているようだった。
　なんと愛らしく、清いのだろう。私は処女だが、正直欲情する。
「私の家に来てくれるよな？　嫌だとかいうはずがないよな？」
「は……い」
「何だその返事は。何だその目は。そうか、嫌なのか。嫌ならいいぞ、来なくても。お前なんて絶交だ。最低な奴だなお前。御前にも

興梠は最低な奴でしたとはっきり伝えておく。ああ、きっとがっかりされるだろうなあ。友人だと思っていた奴がこんな卑劣なことをやってのけるのだから、それはもう残念がるだろうし、きっと軽蔑なさるだろうなあ」

「あの！　あの……う」

私が振りほどいた手を興梠自らが掴む。汗ばんだ手が私の手を握る。片方の手で私の手首を捕らえ……そしてもう片方の手で私のブラウスの背中を掴んだ。

唇が持ち上がり、ほくそ笑みたい気持ちになるも、ぐっと堪えて私は振り向く。興梠は打ち捨てられた子犬のような目で私を上目遣いに見ていて、少し肩が上下していた。絶交という言葉が効いたのか、御前というキーワードが効いたのかは分からないが、興梠は今にも泣き出しそうだった。あの興梠がここまで表情を出していることに興奮を禁じ得ない。

私は今、自分が出せる最大限の冷酷さで興梠を見つめて言った。

「何だ？　何かようか？　卑怯者」

「あ、あ、の……行きます」

「聞こえない」

「行きます」

「どこへ？　どこへなりとも行けばいい」

「神足さんの家、行きます」

「それが人に物を頼む態度か？　相手に失礼なことをしたというのに随分と上から見た物言いだな」

「ごめん……なさい。あああ、あの、僕、喋り慣れてなくて、その、神足さんの家、に連れて行って下さい」

「……まあ、お前がそこまで頼み込むんだったら、私も連れて行くにやぶさかではない。ほら、私の手を握るんだ。違う違う、指を……そう絡めるようにな」

切羽詰った顔で興梠はウンウンと小さく首肯しながら私のいうことを聞いた。嫌われるのが怖いのだろうか。

興梠が上目遣いに私を見ていることに気が付き、私は奴を見る。
「なんだ？」
「あの、神足さんの家に、その、東さんは居ますか？」
「……いらっしゃるが？　何だ？」
「あ、あ、なら、いいんです。ごめんなさい」
奴はほっとした。ほっとしたのだ。緊張にあった表情が少し柔らかい顔になったのだ。
その仕草に私は何とも何とも何とも何とも何とも何とも何とも何とも形容しがたい気持ちになった。いいや、いやいやそれを私がするのは大変おこがましいし、あの方は特別で、いやそうなれば逆にそういう目で見るのもある種の正当性を持っているようにも感じる。うん、ならば思うくらい許されるだろう。この感情はつまり、つまるところ、うん、そうだ。
嫉妬だ。
私は御前に今、少しばかり嫉妬した。いや、御前に興梠が恋などしようはずがないし、したところで到底叶わぬものなのでどう仕様も無いことなのだが、私は今の興梠の心やすらぐ一瞬の表情を見て確かに御前に嫉妬した。怒りがふつふつと湧いてくる。興梠が指が痛いという、可愛らしい囀りさえも、腸（はらわた）に突き立てられた鋭い刃のように思えた。
いやしかし、興梠が何故、御前のことを聞いてきたのか。何故、御前の名前を聞いて安心したのかが非常に大変気になるところだ。いや、これは私の任に御前の露払いという項目があるから気になっているわけであって、個人的な感情から来るものではない。従ってこれは嫉妬とはまったくもって関係のない感情だといえる。
だからこそ、露払いのために、その辺の事情ははっきりと聞く必要があるな。場合によっては暴力も許されるだろう。なんせ、これは御前の為なのだから、当然だ。
私は自宅の扉を開き、興梠を家に入れて、鍵を閉めた。
虫かごはもう、開かない。

３４ページ

「あの、やっぱり僕、帰ります」
「大丈夫だ、何かするわけじゃない。ほら、御前もお待ちしている。早く、ほら早く。……早くしろ」
「う、う」
玄関で帰ろうとする興梠を無理やり上がらせる。もう、ここまで来て逃がすつもりはない。ああ、鼓動が五月蝿い。
廊下の途中で興梠は動きを止めて、申し訳なさそうに私を見上げた。
「あの……さっき玄関」
「玄関がどうした」
「靴が、あの、僕と神足さんのしかなかった……ですけど」
ああ、なるほど。よく見ているな。確かに今この家には私と興梠の二人しか居ないのだから当然、玄関には二足分しか靴はない。
御前がいると言ってしまった手前、どう誤魔化したものかと思い、正直に答えることにした。どうせ、直ぐにバレることだ。
「ああ、そんなことか。今この家には私とお前しか居ないのだから当然だろう」
「……えっ。だって、さっき、ああ、あのご両親とかは」
「ここはずっと私一人だよ」
「えっ」
「大丈夫、私は優しい。優しいからお前にも優しくできる。優しくするから、だから大丈夫だ」
興梠の手汗が酷くなる。あるいは私の手汗かもしれない。ただ確実に興梠を引っ張る手は重くなった。だが今更道は引き返せない。もう後には退けない。
軋む板張りの廊下を奥まで進み、私は自分の部屋のノブを捻った。窓から漏れる光だけが部屋を明るく染める。

「どうした？　どうしてそんなに興梠は震えているんだ？」
「……」
「なあ、興梠。私のこと嫌いか？」
「うー……うっうっ、嘘つきは嫌いです」
「……私のこと好きだって言ってくれないか？」
「や、やです」
「じゃあ私を美雪って呼んでくれ。今だけでいい」
「……あの、な、何なんですか？　僕、帰りたい」
私は横の本棚から国語辞書を取り、ポンポンと手のひらで手応えを確かめた。うむ、丁度いい。
おい興梠と呼びかけ、奴がこちらを向いたのと同時に辞書の背の部分で思い切りこめかみを叩いてやった。面白いくらい興梠は横にすっ飛び、床にうずくまった。
ぐうぐうと鼻水混じりのうめき声を上げる興梠を見つめ、辞書を本棚に戻し、背中を摩ってやる。
「大丈夫か？　痛かったな、よしよし。だけどそれは興梠が悪いんだからな。私は優しい……優しいが調子に乗るな。分かるか？」
「あ、あ、ぐう」
興梠の顔を真横で眺めていると何とも言いがたい気持ちになる。端正な顔が歪むというのは何とも背徳的だ。
ああ、胸の高鳴りの抑えが利かない。心臓が口から飛び出そうだ。
「興梠、あのな、あの、私はな、お前のことが、その、好きなんだ。好きなんだよ。愛しく思ってる。なあ、お前はどうなんだ？　ん、嬉しいか？　嬉しいなら笑え」
丸まって全身をモゾモゾと動いている様はまさにダンゴムシで、何とも滑稽だった。
数秒待っても興梠はウンともスンとも言わない。聞こえていないのではないかと私は思い立ち、興梠の髪の毛を掴んで顔を上げてやった。ブチブチと音を立てて髪の毛が幾分か抜けてしまったような気がするが、これは致し方ないだろう。

グズグズ泣いている興梠の頬を一度、殴った。ゾクゾクした。
「嬉しいなら笑え。私はお前のことが好きだぞ」
「ううううううっ」
「もう一度だけいう、私はお前のことが好きだ。嬉しかったら笑え」
「あっ！　あっあっ、うれっしいです。だから、もう痛いことはしないで……しないでください」
「そうか、お前が嬉しいなら私も嬉しい」
興梠は涙目になりながら、歪に頬をねじ曲げた。笑ってくれている。
頬が熱くなった。興梠は私の告白で嬉しく思っているのだ。これは告白が上手くいったと思ってもいいのだろうか。
私は振り上げた拳を元の位置に戻して、興梠に抱きついた。
もう、誰にも渡さない。これは私のものだ。私だけのものだ。ああ、興梠。愛しい愛おしい興梠。

包み紙を丁寧に解いていくように興梠の服を一枚一枚丁寧に脱がしていく。興梠はその頃には上の空で、天井をぼうっと眺めていた。抱きついた時に泣き喚いたのが煩くて少し殴ってしまったからか、黙り込んでいるが脳震盪を起こしているのかもしれない。
シトシトと降りだした雨音が現状と相まって何とも官能的で、興梠の産毛の生えた柔い肌は何とも表現しがたい触り心地で、私を興奮させた。瑞々しいというのはこういうことをいうのだと思った。
「ああ、興梠。お前をずっとこうしたかったんだ私は。初めて見た時から危ういお前をこうして私の手で滅茶苦茶に壊したかった。このやらしい体を私色に染めたかった。ずうっと前からお前を暴力的にねじ伏せて、嫌がるお前を滅茶苦茶にしたかったんだ。いつか誰かに壊されるのなら私が壊したかった。誰かにその役を譲るのは我慢ならなかった。私は変態だよ、人として終わってる。長い間、それを隠して生きてきた。自分にすら偽って生きてきた。でもお前なら、きっと私を受け止めてくれる。許してくれる。なあ、そうだろ

？」

今にも崩れそうな積み木をそっと指先で押した時のようなあの不安定な感覚、それが興梠命だった。

崩れるか崩れないかの境界で息をしている興梠を見た時のあの圧倒的な違和感が、私には眩しく何モノにも代えがたいものに見えた。人はその感覚を疎ましく思うかもしれなかったが私は違った。私は興梠を見た時、あのハンカチを私に渡したあの瞬間、この純粋で清らかな人間を完膚なきまでに崩し、犯し、ひねり潰したいと思った。

お前のことを執拗に追いかけたのもお前の弱みが知りたくて、お前を襲える場所を探していて、お前に垂涎してたからだった。

ずっとずっと探していたんだ、お前のような人間を。私の願いを叶えてくれて、それを黙っていてくれる人間を。私のこの衝動を限界まで受け止めてくれる人間を。

35ページ

間違っても性的な接触はしない。それはまだだ。まだ我慢しなくてはいけない。今日はあくまでも興梠を傷つけるだけだ。

ゆっくりと咀嚼するようにじわりじわりと傷めつけて、興梠が私だけを見て、私に救いを求め、私に期待し、愛を感じ、依存した時……その時に私は興梠の気持ちを踏みにじるようにこの体を犯すのだ。その時、きっと興梠は何故、自分がそんな目にあっているか分からないといった顔で世界を呪い、私に抱かれる。人形のように抵抗することを諦めて、ただ快楽に身を任す。そして決定的な楔を打ち付けられた興梠は私だけを見て、私だけの為に生きる。

人が聞いたら狂人と指をさすだろう。あるいは誇大妄想狂と笑うのだろう。御前ならきっと呆れ返り、私を軽蔑なさるだろう。

そんなことはありえないとみな口々にいうだろう。私も“そちら側”に立っていればそういう。だけど、今私は狂っている。狂っているのだから、これが正しいのだ。もし自分の思い通りにならなければ、そうなるようにするだけだ。

「お前はなんて可憐なんだ……」

私はデジタルカメラのファインダーから目を離して、興梠を見た。頬が少し赤く腫れていて、怯えきった表情の興梠は白いワンピースを着ていた。私が自分の為にと買って、結局着なかったものだ。私には似合わないと思いつつも、憧れで買ってしまったこれが今ここで役に立つとは。

興梠の化粧栄えする顔もあってか、私の衣装はよく似合った。悔しいくらいに似合うのだ。これを目の前にして我慢をしないといけないのかと思うと溜息が出る。

庇護欲を誘う怯えた表情が眩しいくらいに私をそそらせる。緩いカーブを描く胸のラインと細い生足が何とも卑猥だった。高価な西

洋人形を思わせる。
　足首から人差し指の腹でつうっと太ももまで撫でると興梠は目を瞑って、鳥肌を浮かばせた。羞恥に耐えているのだと思うと自然と笑みが漏れた。三着ほど着せて、撮影したがもういいだろう。
「興梠ぃ……ああ、ああっ！」
　私は興梠に覆いかぶさった。うなじから化粧とは違う、甘い香りがした。乳製品のような優しい香りだった。じっとりと汗ばんだ肌に唇を鼻を押し付けて胸いっぱい息を吸った。ちろちろと舌先で舐めると興梠は肩を震わせた。表情はぼんやりとしているが、やはり私を意識していて怯えているようだった。
「泣くな、化粧が崩れる」
　パンと頬を叩く。興梠は呆けた表情のまま鼻水を滴らせ、ぼろぼろと涙を流した。
　先程までは暴力を振るおうとすれば何でもいうことを聞いたのだが、今では糸の切れた人形のようだ。暴力から逃げる為に卑屈になる興梠も何とも面白かったが、今の退廃的な様はまた一段と魅力的だった。
　純真無垢な少女に現実を突きつけているかのような背徳感。正義を信じる少年から光を奪うような背徳感。
「私のこと好きなんだろ？　じゃあ何してもいいよな、興梠。お前は嘘つきじゃないものな」
　まるで独り言だ、と私は心の中で笑った。人形に話しかける狂人のようだと。
　ワンピースの中に手を入れて、興梠の太ももを両手で撫でながらじわじわと上に登らせて、下着を掴む。ゆっくりと脱がして興梠の反応を見た。目が何度も瞬かれている辺り、もしや自分が今から犯されるのではないかと思っているのかもしれない。視線が右往左往している。
　ああ……なんでお前はそう私のツボを抑えているんだ。何でそんなにそそらせることをするんだ。それじゃあ我慢ができなくなるだ

ろうが。
　脱がしたての下着を裏返し、興梠の顔を見ながらクロッチの部分を舌でねぶる。興梠は本格的に自分が犯されると思っているらしく、歯をカチカチと揺らした。それが私には非常に不愉快だった。
　何故、興梠は犯されるということが分かっているんだ？　やはり、お前は犯された経験があるのか？　誰かに。私以外の誰かに犯された経験があるというのか！？　誰かと寝たことがあるのか？
　そうなると相手は誰だ？　やはり姉か、それとも八瀬か？
　まあ、お前が見知らぬ誰かに強姦されたことがあったとしても不思議じゃあない……が私は許さん。お前の体に誰かが触れたことがあるのかと思うと奥歯がへし折れそうになる。お前を犯すのも犯していいのも虐めていいのも、壊していいのも私だけの権利で私だけのものだ。誰にも許さん、誰にも譲らない。
「なあ、興梠。……そう怯えるな。正直に答えればお前が恐れていることはしない」
「……」
　興梠はそれが真実かどうか考えあぐねているようだった。別に元より犯すつまりは……まだない。今犯してもお前は逃げればいいだけだ。犯されているのに、嫌なのに逃げられない現状。壊れていくのに壊れることしか選択を許されないような状況が私の望むものだ。
　返答を待たずに私は話しを進めた。
「ええっとそうだな……、お前、御前をどう思ってるんだ？　正直にいってくれ」
「……う、あ」
「喋っていいぞ。寝たままじゃ辛いか？　起こしてやる」
　軽い体を抱き起こしてやった。興梠は後ろに後ずさってガラスに後頭部をぶつけた。
　雨が上がった夕日を背にしたワンピースの乙女。スカートの部分から覗く、暗闇が何とも卑猥だった。
「早く喋ってくれるか。私は優しいが待つのは好きじゃない」

「あ、の、あず、まさんは……やさしいです」
「ああ、そうだ！　あの方は優しい方だ。優しくて聡明で素晴らしいお方だよ。お前に言われるまでもなく知っている。何年も付き添って私は見てきたのだ。この二つの黒い目であの方のすることを全て。あの方は自分が全力を出してしまえば良くないことが起こると知っているから怠け者を演じているが本当は凄いんだ。神代の血を色濃く受け継がれているだけある。私の憧れで私の誇りなのだ、あの方は！」
　熱が入りかけて私は、少し気分を落ち着けた。興梠は私を少し意外そうな目で見ていた。いつもの冷静沈着な私からはかけ離れていたからだろうか。
　御前を褒められたのが嬉しくて、本来の目的を忘れかけている気がする。はて、何を聞くのだったか。
　ふと興梠を見ると何か言いたそうな目で私を見ていた。何だと聞くと奴は恐る恐るといった感じで口を開いた。
「あの、何で僕に、こんな……こんなことするんですか」
「好きだからに決まってるだろう？　お前の姉と同じだ」
「ぼぼぼぼ僕の……お、おね、お姉ちゃんは違う！　お姉ちゃんは違います」
　何だ、その目は。お前らしくない煌めいたその目は。何にそんな希望を持っている。
　何故、特別扱いをする。あんな女、私と何も変わらんだろうが。
「何も変わらない。何が違うというんだ」
「ち、違い……ます」
「……」
　私はその言葉に苛立ちを覚えて興梠に飛び乗った。手首を押さえて、唇を奪う。唾液をねじ込み続けて、興梠を溺れせた。息を吸う暇も与えず、ただ唾液を流す。
　目を白黒させて鼻から私の唾液を出している興梠が大変面白い。白い顔がどんどん青白くなる。

唇を離してやる。器官にまで唾液が入ったのか興梠はまたダンゴムシのように丸まってコンコンと咳をした。

「ぷあっ……どうだ？　私とお前の姉、今の行為に何か違いはあったか？　ああ、姉の方が“上手”だったか？

何だろうと、お前を壊すのは私だ。壊していいのは私だけだ。私が一番お前を上手く壊せる。私が一番お前を綺麗に壊せてやれる。愛でもって壊せてやれる。愛でもって犯してやれる。どうせあんな女お前の体が目当てのアバズレだ。私は違うぞ、それにあんな女の体よりも私の方が……。なんなら、今すぐ試すか？　お前が求めるなら私は……」

本当はお前を完膚なきまでに壊したい。だけどもしもお前が、お前から望んでくれるなら私はそれでもいい。いいのに……お前はどうしてそんなに悲しそうに泣いているんだ。何故そんなに泣いているんだ。私よりもあの女の方がいいというのか。ふざけるな。

私のことがいいというまで殴り続けてやろうと拳を振り上げた瞬間、家のインターフォンがチープな音を告げた。

嫌な汗が額を流れた。

「そ、そんな……」

時計を見る。あと二時間は起きないはずだった。

東瑞希様は。

36ページ

「汗臭いね……」

そういって御前は壁に背を預けて笑いました。だらしなく足を前に投げ出していて、縫い針を三倍ほど大きくしたものを仰々しいお面の目の部分に差し込んで、遊んでいました。横には古びた木箱が雑に置いてあります。

御前は逆光のためか私を眩しそうに見ていて、その表情はどこか気怠そうだった。

私はただその視線は正面から正座で受け止め続け、肩をビクビクと震わせた。これから起こりうるだろう出来事が恐ろしくて仕方がないのだ。

「さっきさ」

「は、はい」

「さっきすれ違ったのさ。泣いてて、くっちゃくちゃの服着てて、顔に痣できてた子。あの子、興梠だよね」

「……はい」

「お前さ、あたしの飯に何か混ぜたでしょ」

「いえ、あの、私が自分でどうにかしないとと……」

「おい」

夕日の光に白く輝く針先を私に向けて、御前は笑みを濃くした。私の言葉はそこで遮られ、動きは石のように硬くなった。恐ろしくて震えが止まらない。

興梠に服を着せて、慌てて追い出した時のことが遥か昔のことの出来事のように感じられた。ほんの数分前の出来事だというのに、遠い出来事のように思える。

「誰が言い訳をしろっていった。わたしはお前の言い訳を聞きにここにいる訳じゃない。お前は正直にイエスかノーのどちらかを答えればいいんだ」

「……ま、ま、混ぜました」
「そう、それでいい。お前はわたしの朝食に薬を混ぜた。で、興梠に何したんだ？　わたしが寝ている間に何をしてたんだ？　この汗っくさい部屋でさあ、何をしたんだよ神足美雪！」
御前はお面を被り、黒い穴から私を見つめる。鬼のお面の金色の瞳の奥の、二つの黒い穴から私を見つめる。
手に握られた針は罰を与えるためのものだ。話には聞いていたが、まさか自分が使われる立場になろうとは思いもしなかった。
計画通り進んでいれば、こんな恐ろしい目に遭う必要はなくて、御前の信頼を裏切ることにもならなかったはずだった。
「……あっあ、あああ」
「別に答えなくてもいいよ。どっち道、することは変わらないけどね。眠くて眠くて仕方ないからさ、何かミスっちゃったらごめんね、美雪。大丈夫、そうなっても痛いだけだから」
御前は私の手を掴み、針を指の爪の間に添えて、そえ、そそそえっ。
「あああ、あああああ、ゆるし、ゆ、して」
「許しを乞う相手はあたしじゃねーだろがよ、阿呆」
ぐしゅ。
――――――――っ！
――――――――――ふっ！
――――――――――――ふぎゃっ！
「あっあっあっあっ！」
脂汗。涎。飛沫。歯ぎしり。
涙。強ばり。声にならない叫び声。そして激痛。
激痛激痛激痛激痛。
爪の間を白い、何かが蠢いていて、ピンク色の肉がぶちぶち……
血が出てて。あ、うううううっ。
「あがあああああああああああ、ぐうううううううううぎいいいいいいぎゃぅ」

「痛いよな、そら痛いだろうよ。爪の間ぶち抜いて、指貫いちゃったらそりゃあ痛い。でもさ、お前はさ、約束したよな。このわたしと約束したんだぜ？　わたしに言ったんだぜ？　もうこんなことを二度としないですって泣いていったんだ。興梠を犯そうとした日、お前は言ったんだよ！　あたしはそれを信じた。なのに何だよ、この体たらくは。おかしすぎて笑い声もでねえよ！」

針箱……針が山ほど入った箱から新しい針が出される。私は嗚咽しながら御前の顔を見た。当然それはお面で、表情は変わらなくて、次に何をしようとしているのか、考えているのかが分からなくて、ただ恐ろしかった。

「しかもお前は、このわたしの善意を利用したばかりか、薬を盛った。バレないように興梠にナニして、あたしの信頼をそのまま保とうとしたわけだ。卑劣にもほどがあるよなあ！？　わたしはそんな馬鹿に育てた覚えはねえさ。お前には、それなりの礼儀と正しさを教えてきたよなあ？」

「ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなあああああああいだいだいいいいいぃ」

新しい針が添えられて、刺されて、私は叫んで、顔を歪ませて、許しを乞い、また針が添えられて、添えられて添えられて添えられて、左の指がボロボロになれば、右の指に移る。両手の指がダメになれば足の指に移った。それはまさに拷問と呼ぶに相応しくて、痛くて辛くて、冷や汗と脂汗と叫び声が止まらなくて、全身が無理やり収縮させられているような辛さが、ただ私を責め立てた。

罪人を裁くための針の刑。私は御前の中で罪人にまで成り下がったのだ。

何故こんなことに。何故だ、何故。

本当に本当に最初は興梠に謝ろうと思っていたんです。でも興梠があまりにもか優しくて……。

「簡単に丸め込めて、弱いから、興梠を犯したのか？」

ちが、あああああああ、違うん、違うんです。興梠は私の全てを受け入れてくれると思って、私を決して拒否しないと思っていて、だから、誘ったらやっぱり否定しなくて。

「だから犯したのか？　あいつが自分よりも弱いことが分かっていて、それで暴力を振るって、思い通りにしてそれで悦に浸ってたわけか？」

おか、犯してないです。指一本触れてません。そんな気持ちにもなっていません。本当です、本当にそんなことはしていません。間違っても、間違っても興梠にそんなことはして、してあああああああしていません。あ、あ、あ、ううう。

だからだから、どうか許して下さい。

もう、針は嫌です。

「ふざけろ、阿呆」

ぐしゅぐしゅ、ぶすり。

37?

目を開けると外は明るかった。色素の薄い光が緩やかに部屋に伸び、休日の生ぬるい空気が部屋を満たしていて何とも退廃的であった。いつもこの光を見ると金魚鉢の中の金魚を思い浮かべるのだけれど何故だろう。前世か何かだろうか。

少し厚めの布団に若干の鬱陶しさを覚え、あたしは布団を横に避ける。そろそろ季節の変わり目なのだろうか、寝苦しい。

ユルユルと重い足を運ばせて、茶の間に向かい、クロールでもするのかと言わんばかりに机に手を伸ばして頬をつけた。机の冷たさが頬に伝わって何とも心地良い、と小さな幸せに浸っていると盆に朝食を乗せた美雪がそっと台所の方から現れた。今日はいつもよりも朝食の準備が早いあたり、美雪も美雪なりに緊張しているようだった。

細い声でおはよう御座います、今起こしにいくところだったんですという美雪に「さようか」と述べてあたしは、さっさと飯にしたいという気持ちを暗に伝えたが、美雪は聞いてもいないことをベラベラと話したのであたしは勝手に両手を合わせて「いただきます」と唱えて飯を頬張った。鮭のハラミと白い飯のコンビネーションは相変わらず完璧すぎるほどに輝いている。後光が差して見えるよねー。

美雪は目の前に親の敵でもいるのかと言わんばかりの辛気臭（しんきくさ）さで、今日は朝食はいらないというので、美雪の朝食は私が嫌々食べてやった。

美雪の返答を待たずに口に運ぶが美雪は何も言わなかった。いつもならば、太りますよだとか意地汚いとなかなか手厳しい一言をあたしに投げかけるのだけど、今日はただぼうっとあたしの口に運ばれる食事に目を向け続けていた。

やはり興梠のことを意識しているのだろう。あるいは自分の罪の重さに押しつぶされそうになっているのかもしれない。美雪は実は結構純粋な奴なのだ。

食事が終わり、そのまま座布団を枕に畳の上でごろ寝をする。腹が膨らみ、心は満たされ、空気の温かさも手伝って少しばかり眠くなってきたのだ。

約束の時刻まで時間はたっぷりあるものの、今回の謝罪はあたしのメンツも掛かった一大事業といえるので、遅れるようなことはあってはならないとあたしは寝ないことを選択しようと心に決めたが、二秒後にその頑(かたく)なな意志はあっさりと破られ、頭は美雪の膝の上だった。

枕よりなにより、人の膝の上というのは何故こうも落ち着くのだろう。膝枕という枕を誰か作って売ればいいと一瞬思い、次にスプラッターな映像が脳裏を掠め、あたしは考えるのをやめた。食事のあとにする想像には相応しくない。

「つーわけで時間が来たら起こしてね」

「……はい」

妙に気の抜けた表情で美雪はあたしに返答し、頭を優しく撫でた。

瞬きをした。そんな感覚だった。

目を開けた頃には周りの景色が変わっていて、あたしの頭には膝ではない枕が乗せられていて、色素の薄い朝日は黄金色の混じった午後の光に変わっていた。空気も若干湿ったものを感じる。

この体に超自然的な能力が備わっていて、未来に跳躍したとかいうことでもない限り、あたしが寝過ごした可能性は大だった。いやでもしかし、タイムスリップしたような感じだ。

妙に体が重い、体の節々に見えない枷(かせ)がはめられているような動きの鈍さに若干の苛立ちを感じるし、思考が上手くまとまらない。自分が次に何をすべきかが分からない。家の中を壁伝いにうろつき

ながらあたしは眠さと格闘した。
水を張った桶に頭を突っ込んで、あたしは何とか思考の気怠さからは脱却せしめる。そして家のどこにも美雪がいなかったこととアイツがあたしを起こさなかったことを思い出し、あたしはイヤイヤと自分でその答えを否定しつつも、最終的にそれに納得せざるを得なかった。
「あんっの阿呆め」
自分一人でアイツは興梠のところに向かったのだ。それだけなら、まあ馬鹿だなあと思うだけだったが、体の異様なほどの気怠さに美雪があたしの飯に何かを混ぜたことは明白で、それは心暗いことをしますという美雪の宣言のように思えてならなかった。あたしは少し冷たい気持ちになって客間に飾られている鬼のお面と、倉の中のお仕置き道具を引っ張り出した。
噂には聞いていたが、まさかあたしがこの禍々しい針を使うことになるとは思いもしなかった。しかも自分の妹に使うだなんてねえ。まさに狂気の沙汰だよ。

根巻きのまま、あたしは美雪の家に向かう。どこにいるかは分からないが、先程まで雨が降っていたし、朝に美雪と見た天気予報で午後から雨ですとニュースキャスターが飄々（ひょうひょう）とした口調で述べていたのを鑑（かんが）みれば、賢く愚かな美雪のことだ、家に連れ込むという選択をするに違いない。アタクシったらほんと天才。
恣意的に神様があたし限定で重力のパラメーターを二倍近く増量してくれてやがるのではないかと思いたくなるようなダルさを抱えながら、あたしは湿った道路を老婆のごとくゆっくりと進み、美雪の家の前に立った。
扉には鍵が掛かっていた。鉢植えの下の鍵に手を伸ばしかけ、あたしは何にもない庭の方に周り、美雪の部屋の窓のところまで向かった。体は出さずに窓際に隠れ、会話に耳をそばだてる。ポケットに入れたボイスレコーダーのスイッチオン。

「……はあ」

まあ有り体に言えば興梠がグズグズと泣いていて、美雪の頬を張るようなビンタの音が鳴り響いていた。おい、近所に聞こえるだろ黙れって十分に聞こえてしまっていますよ美雪さん。

あたしはもう一度玄関に向かい、頭を抱える。美雪は本格的に阿呆のようだった。

暴力を行使して弱い人間を従わせようなんて、そりゃ強姦じゃないの。今日日小学生だってそんなことしないっての。

あたしは大きな欠伸を噛み殺して、一本の針を握った。お仕置き決定。

38?

ベルを押して息を吐く。吐くと頭の感情を司る部分が過冷却された液体のようにじっくりと凍り始めていくのをあたしは肌で感じた。五感がクリアになっていく。自分の持っている木箱の表面の模様が指先で感じ取れるほどあたしは今、機械的になっていた。面をつけても面をしているという感覚が持てない。私を包む空気すら、それが私自身であるかのようだった。

美雪が出てくる気配がないので、あたしは鉢植えの鍵を使って勝手に上がり込んだ。冷たい廊下を裸足で進み、美雪の部屋の前でその足を止めた。ドアノブを捻るのと同時に何かが飛び出てきて、あたしは条件反射的にそいつの脳天に針を刺してしまいそうになり、手を止める。

相手は興梠だった。口の端を赤く腫れさせて、目は真っ赤で、妙に汗臭くて、服が乱れた虚ろな目をした興梠だった。

あたしの一番嫌いな顔。あたしが一番近くにいてほしくないと思う顔をした人間だ。

そいつはあたしに体当たりするように横を通り過ぎ、家を出て行った。戸はちゃんと閉めていくあたり、興梠らしいと思う。

部屋に入ると美雪がガマのように脂汗を浮かべて正座していた。元気かと問うと美雪は口を横一文字に固めて首をゆっくりと首肯した。どうやら元気らしい。元気すぎておイタをするほどに元気が有り余っているようだった。

美雪の瞳孔は大きく揺れていた。今から何を話すべきか考えあぐねているようだったので、話しを先に進めるべくあたしはボイスレコーダーのスイッチを入れて、先程の痴態諸々を知っていることを無言で教えてやった。美雪の表情がどんどん青くなっていくのが面白い。いくつか言い訳でも考えていたのかもしれない。

「馬鹿だねえ、お前は本当に大馬鹿だよ」

あたしはそこでお面を取って、ドアを背中にその場に座って笑ってやった。美雪はごめんなさいとすみませんを延々と繰り返して私に頭を垂れてくたが、今更それは遅いし、悪いと思ってるならやるなよと言うのがあたしの意見だったので、それはあたしの苛立ちを増長させるだけにしかならない。

しかし、会話を進めても二口目には言い訳というのが何とも悲しく思えた。美雪株は今絶賛大暴落中で公的資金の注入でも防ぎきれない勢いだ。

まあそんな言い訳どーでもいいから、とっととお前に指オシャカにさせんかいとあたしは美雪の白魚のような指を掴み、爪と爪の間に針をぶっ刺した。じっくりコトコト煮込んだスープと言わんばかりにじわじわとやってみると美雪は聞いたことのないような音域でギャアギャアと叫んだ。獣じみていて、ちょっと可哀想になるけど、まあ仕方ないよねとあたしはそのままピンク色の肉をかき分け、グリグリしてやる。爪の中を鉛色の針が血を吹き出させながらゆっくりと進んでいるのが何とも痛ましい。

鼻水と涎と涙をミックスさせた汁をボタボタ床に零しながら濁音混じりのごめんなさいが部屋に反響する。

こらこら、女の子がそんな顔しちゃダメだよ。元気よくいこー。

そうこうしている内に左の指が使えなくなったので、次に右の手を潰し、足を潰した。その際に美雪はひっくり返った昆虫のようにバタバタと抵抗し始めたので、あたしが首に手をかけ持ち上げてやって「ごちゃごちゃ、うっさいな。因果応報、自業自得だろ。そんなに痛いのが嫌か？　じゃあここで今すぐ殺してやろうか？」と優しく言ってあげたら静かになった。

本当ならここで舌ベロに針を二、三ぶち込むのが恒例らしいのだけど、あたしは優しすぎる為に掌の中心に針をぶっ刺すところまでで留めてやった。美雪も流石に舌ベロは嫌だったらしく泣きながらセンキューベリーマッチを日本語訳した感じの言葉であたしを讃え

ていた。主に涙は痛みから来ていると推察。
いくつか爪が剥がれちゃったり、床がベッチョベチョになったりしたけど、それを含めてお仕置きなので掃除は美雪自身に任せてあたしは、何もしないことにした。帰るまでが遠足みたいな感じ。
とりあえず金輪際、あたしのいないところで興梠に近寄るなということと、話しかけるなということは約束させたが、この約束もどれほど拘束力を持つのかは謎だし、美雪がどこまで興梠を傷つけたかも謎なので、今のところ明確な処罰は出せないでいるアタクシ。
もしも興梠に性的なことをしていた場合は、一子相伝の拷問もといお仕置きである、一週間ほど暗闇の中で暮らしてもらう刑が始まりそうな勢いなので、どうにかそれだけは避けて欲しいものだとあたしは欠伸を噛み殺す。いやでも本当にアレは人が狂ってしまうらしいので、最終手段だ。
盛りのついた犬を去勢するのは簡単だけど、でもそれをしてしまえば二度とその盛りは戻ってこないのだ。判断は冷静に行わなくてはならない。

とりあえず明日は興梠にあたし一人で謝りに行こうと決めた。興梠はまた心を閉ざしているだろうし、あたしが美雪を差し向けたとでも思っているかもしれない。だから明日はあたしも身を削らなければならないだろう。誠実さを見せなければ興梠は一言もあたしと口を聞かないだろうことは想像に難くない。
ああ、いやだなあ。できればしたくないなあ。
人を殺した時の話しなんてさ。

39？

高い青空の元、興梠は両端を道路に挟まれたドブ川を眺めながら、咲き散った桜並木を歩いていた。その瞳は相変わらず泥水のように濁っていて、先日見た時よりもその目は薄汚れていた。美雪のせいなのか、あの姉に家でこってり絞られたせいかは分からないにしても、尋常でないことは確かだ。

あたしが後ろからポンと肩を叩くと興梠は肩をびくつかせてゆっくりと振り向いた。さながらその仕草はホラー映画で最初に犠牲になるモブキャラクターのそれであった。つまり映画ならここでコイツは退場だ。

「あ、あ、あ、あず、東さん」

「へろー、ぼーい」

流暢な英語で奴に挨拶してやると、流暢すぎた為か奴は固まり、数秒後にブルブルと震えて辺りを見回した。美雪はここには来ない有無を伝えても奴はまだ怯えて「何でもいうことを聞くから痛いことはしないで下さい」とか細い声で鳴いた。おまけに無理やり頬を持ち上げて人に媚びへつらうような、醜い笑みを見せた。

何とも醜悪だ。例えるなら車に引かれた蛙の死がいのようだった。

あたしはその表情を作らせたのは他でもない美雪なのだということに、恥を感じた。身内の恥である。

ただでさえ死んだような表情で醜い顔をしていた興梠が、今まで以上に醜く染まってしまっていることにあたしは苛立ちと焦燥と、良心の呵責は……感じ無いにしても何ともまあ恥ずかしい気持ちでいっぱいだった。

すまないすまない、とあたしは平謝りを繰り返して興梠をちょいと我が家へと手を引っ張ると興梠は真っ青な顔で「嫌だ嫌だ」といいだし、もたついた足で散歩ルートを進もうとしたので、どうしたんだと引っ掴んで白状させると「家に連れ込んで何する気よ！」み

たいな女々しいことをいった。ああ、そうか美雪はこういう感じに連れ込んだのか。

それではと「それがしも散歩に連れていってくれまいか」と進言すると、興梠は少し考えた後に上目遣いに体を揺らしながら「変なことしないなら」とあたしに許可を与えたもうた。

その仕草はちょっとアレな趣向をもった大きなオネイサンやオニイサンだったら、即誘拐と言わんばかりの破壊力があっただろうとあたしは推察に推察を重ね、答えを持ち引き出したが、おしむらくはあたしにはそういう性癖はないので残念ながら所詮推察の域を出ない。できればその領域には近寄りたくはないと思うし近寄らないでくれとあたしは願った。

何とも奇妙で無言でどこか張り詰めた散歩が始まった。

興梠はいつでも逃げ出せる用意がありますといった感じにあたしを警戒してくれやがっていて、美雪が何をしたのかといったことには全然答えてくれなかった。その際に「あれは美雪が勝手にやったことで、あたしは一切関係ございません」ということも可能ではあったのだけど、それを選んだところで恥は消えず、結果は何も変わらないのであたしはそれは言わなかった。言わずともあたしの態度が屹然（きつぜん）していればそれもその内に伝わるであろうと楽観視しているわけなのである。決して説明が面倒とかではない。ないよ。

「昨日見た時よりも傷、増えてない？」

「……」

「家でお姉ちゃんに虐められてるのかい。姉弟で仲良くえすえーむですか？」

「……姉さんはそんなことしません」

「じゃあ、お父さんとお母さんに虐められてるの？」

「……」

分かりやすい奴。暗黙の了解よろしく沈黙の了解であるとあたしは思った。

どうやら虐待は姉だけに限らず、家族ぐるみの恒例行事として成り立っているらしかった。そのことがあたしを苛立たせた。でもしかし、それに対してあたしが憤りを感じることも、怒りをぶつけることは叶わない。美雪のように悲しんでやることもできない。そうするに足りるほどの答えを今だ見つけていないのだから、それも当然と言えた。

バス停の側にある古めかしいタバコ屋でジュースを二本買った。腰の曲がった店主らしき老婆は興梠を顎で指して「あの子、いつもこの時間になると歩いてるけど、大丈夫かねえ？　いっつも葬式みたいな顔しちゃってさあ」と心配なさり、あの子をどうかよろしく頼むと自分の娘を嫁に出すような面持ちであたしに興梠を任せた。その為かジュース代はタダだったのだけど、その代金の割りには任せられたことは予想以上に大きいように思われる。っていうか興梠の値段はジュース二本分なのか、安いなー。

ジュースを受け取った興梠とバス停のベンチに腰を掛けた。興梠は散歩ルート以外へ行くことは頑なに拒んだが、決まったルーチン内であるならばある程度の自由は許されるらしく、ここの川辺を一時間ほど眺めるはずの予定にあたしとの会話を割り込ませてもらうというかもらった。

「話って……何ですか」

バス停は屋根付きのトタンで覆われていて、雨とひと目を防ぐことができそうだった。つまり興梠は警戒しているのだ。

「いやまあさ、さっきから言ってるように別にとって喰おうとかじゃなくてさ、その何ていうのかねい。えっと興梠は人、殺したことある？」

何をいうのだというような顔つきで見られた。それもそうだ。

「いやさあ、あたし……わたしさ、昔ね、人を殺したことがあってさ」

当時のあたしはまだ己がそこそこ由緒正しい家柄の人間であるということは理解していなかった。由緒正しい家柄であり、その恩恵に預っていたはずの母親は自分の故郷でとち狂ったことをやってしまったらしく、里から追い出された者であり、東家とその故郷は十数年間、互いに連絡を取ることは無きに等しかったらしい。

そんな女の娘であるあたしがその島に呼ばれたのには跡継ぎ的な理由があったらしく、一度追い出した手前、母は呼べないにしてもその娘ならまあ後釜にしてやっても問題ないだろうという判断らしかった。

俗世間に染まりきった非お嬢様的あたしはその退屈な島でそれなりの作法やらなんやらを学ぶことに時間を費やすことになり、少しの間、祖母と美雪の母親に世話になることとなった。祖母に会ったのはその時が初めてだった。祖母は半身に酷い火傷の跡があったが、その容姿は恐ろしいことに十代であるあたしと然程（さほど）、変わらないように見え、大変美しく、健康的な顔立ちだった。

ある日、あたしは美雪の母親に何故この島には男が異様に少なく、いても何故それがみな少年や青年の年頃なのかと聞いてみた。麗しいダンディーな大人はいないのかと。

すると美雪の母親は「成人するまで耐えられないんですよう」と舌足らずな声で言った。その時は意味が分からなかったが、それからして暫くのこと、桃でも食べようと裏の森の奥へと進んでいると虚ろな目をした傷だらけの辛気臭い少年が木々の間でガタガタと震えていた。その仕草はまるで狼に見つかった子ヤギのような瞳だった。

あたしが人を呼ぶかと聞くと少年は首を振った。立って逃げたいらしかったが、足が竦んで動けないらしい。あたしはまあ大丈夫だろうと思い、早く家に帰れと伝うと少年を後に池の小さな畔の桃の木に向かった。

桃を啜りながら、先程の道を歩いていると、草むらで先程の少年の上に美雪の母親が馬乗りになって“何か”をしていた。美雪の母

親は普段のポワポワした雰囲気とは打って変わって大変嗜虐的な顔であり、少年は人形のように動かなかった。

死んでいるのかと思った。思ったけれど、その瞳からは涙が流れていて、よくよく耳を澄ませばか細い声で泣いていた。泣いていて、犯されていた。強姦されていた。男が女に。少年が女に。

「こわいよぅ、たすけてぇ」

美雪の母親が少年を煽るようにフザけた声色で笑う。少年はただ泣いて、時が過ぎ去るのを待っていた。心臓が握りつぶされると言わんばかりの胸の痛みと、立ちくらみに気が遠くなりかける。

状況は全くもって分からないにせよ、良くないことが起こっていると義憤に駆られたあたしは近くに落ちていた手頃な棒で美雪の母親を気絶させて少年を助けた。どういうことかと説明を求めると少年は涙ながらに答えた。

この島の男はみな幼少の頃から女たちに性処理の道具として扱われること、大半はそれに耐えきれず死んでしまうこと、死んでも道具のように扱われること……。

そんな吐き気のするような酷い話しを信じられなかった。信じたくはなかった。里のみなはどれもみなしっかりとしていて優しかったし、とてもそんなひどい事をするようには見えなかった。だけど、だけれど、美雪の母親のあの形相と行いを見てしまったあたしにはそれを真っ向から否定することはできなかった。被害者を目の前にしてそれは夢物語であると否定することはできなかった。何かの間違いだと思いたくて、信じたかった。

もしも自分の尊敬している人がとんでもない悪人だと言われたら普通は否定するし、そんなこと許容できようはずがない。

少年は答えた。涙ながらに答えた。虚ろな目で答えた。傷だらけの体と傷だらけの唇で答えた。

「どうか僕を殺して下さい。他の鬼女にいつか殺されることになるくらいなら、あなた様のような立派な方にここで殺して頂いた方が僕は楽になれます」

「そ、そんな、生きていれ……いればきっと！」
「僕は家主様から逃げてしまいました。帰ればきっと死ぬよりもひどい目に遭います。だったら、ここで死んだ方がいい。どうか僕を助けて下さい」
そういって少年は土に頭をつけて手を揃え、あたしに土下座した。死ぬことで助かるのだと懇願した。否定しても、断ってもその意志は変わらず、ただ爪のないイビツな指が揃えられていた。
あたしはそこで。
そこで。
そこで、初めての殺人を行った。

40?

……それでね、わたしは美雪の母親を起こしたんだよ。人を殺してしまったという罪悪感に絶え切れなくて、誰かに責めてもらいたくて、首を閉めた手が固まっていて動かなくて、まだ鼓動が、温もりが手に残っていてさあ！　びっくりするよ、人ってこんなに簡単に死んでしまうんだって。風船の空気が抜けていって萎れちゃうみたいに、こんなに簡単に。

ああ、それで美雪の母親はさ、ちょっと馬鹿なのかな。美雪と違ってトロくてさ、自分が何で森の中で寝てたか疑問も抱かずに「お嬢様、こんにちは」っていうんだよ。半裸の状態で。それがおっかしくてさあ、自分以外の全てが狂っているような、そんな不思議な気持ちだった。

いやね、それでね、美雪の母親はあたしが何も言えずに呆然としてたらね、その少年の……死体、そう死体のところに行ってこういったんだよ。今でも覚えてる。なんてことのない会話のように「お嬢様がこれ、壊しちゃったんですか？　あーあー、使えなくなちゃった」って言ったんだよ。

ぞっとしたよっ！　凄く当たり前のように、しかも人の命をモノ扱いして、それで、日が暮れるといけないから帰りましょうって私に笑ったんだ！

あたしが死体はどうするのかっていうとさ、何そんなに必死になっちゃってんの、みたいな顔で「さあ？」って首を傾げたんだ。その後、森の中だから動物がどうにかするでしょうって言った。言ったんだよ。

あたしはその時に悟ったね、かあちんが狂ってたんじゃなくてコイツらが狂ってたんだって。本当に本当にさっきの少年がいった言葉は事実で、疑いようのない事実で、この島の悪習なんだってさ。

人を人が飼っている？　人を人が支配してる？　おかしいって。

それは奴隷だよ。
　気がついたらさ、美雪の母親が血ぃ吐いて、地面に倒れてて、あたしはぐうぐう唸り声を上げながら泣いていた。
　万能バサミがダーツの矢みたいに美雪の母親の胸に刺さってて、美雪の母親は虫みたいにビクビクしてて、その内動かなくなった。
　それから、あたしはその里を歩いたよ。歩いたらいろんなものが見えてきてさ、うん、そう、今まで気がつかなかったものが見えてきた。怯えた表情の男とそうでない女。傷だらけで今にも壊れてしまいそうな濁った目。時折、どこかで聞こえる叫び声、泣き声。
　それにあたしは幸福にも気が付かなくて、視界に入れようとしなくて、それでそれで、気がついたらさ。気がついたらね、気がついたら……。
　沢山おっちんでた。手が血まみれで、今みたいに自分の服はゲロまみれでさ、髪の毛は血でパリパリでさ、男も女も見境なくあたしはやったよ、やったんだよ。
　女はきゃあきゃあ騒いで逃げて、男はみんな嬉しそうに死んでいった。それが気持ち悪くってさ、自分は憎しみから殺してるのか、助ける為に殺しているのか訳分からなくなちゃってさ。あたしはその場で泣き崩れて、げえげえゲロ吐いたよ。ゲロ吐いて血反吐吐いて、気がついたら変な牢屋にいてさ、ばあちゃんに「気でも狂ったか」って言われたよ。
　これほど滑稽なことってあると思う？　気が狂った奴らに気狂いって言われたんだぜ？　腹がよじれるよ、まったく。
　あー、それでね、暫くしたらかぐや姫みたいな女の人と黒いスーツ来たお姉さんが来て「可哀想だけど罰」ってことで、牢屋の目の前で少年が代わる代わる犯されて、悲鳴を上げて、バットで血まみれになるまで殴られてたり、腕の骨折られてるをずっとずっと見せられた。助けたくても助けれなくて、やめてっていっても誰もやめてくれなくて、わたしが代わりになるっていっても、誰もわたしを殺してくれなくて、いっその事死にたかったけど、死ねなくて。

わたしね、叫んだんだよ！　声が枯れるくらい、喉が潰れるくらい本当に叫んだんだよ！　どうかその子たちに酷いことをしないで下さい、殺さないであげて下さい、犯さないであげて下さいって。手がボロボロになるまで鉄格子を、壁を殴り続けて言ったのに。

それなのに、それなのに……その子はその内、動かなくなった。そしてら別の子どもが連れてこられて、それで……！

それで母と同じように追放されてさ、なんにも知らない美雪をうちで引き取って、それで堕落した日々を送ってたんだ。

「どう、これ。最高にイカレてるでしょ」

ゲロにまみれたバス停は些か悪臭が漂っていたが、誰も通らなかったし、興梠は嫌な顔一つせずその場に佇んでいたので問題はないだろうと思われた。

奴はただ、あたしをじっとほの暗い目で見ているだけだった。あの時の子みたいな目でじっとあたしを見ているだけだった。

瞬間的にあたしは悟った。あたしは興梠を見ながら興梠の向こう側にいる彼らを見ているのだと。だからこんなにもコイツに心をかき乱されるのだと。

「あたしは……わたしは！　わたしは今でも自分がしたことが正しかったのか分からないんだよ！　あの時、本当に殺してやるべきだったのか分からない！　殺すことで救ってやれたのかも分からない！　あのクソみたいな連中を殺したことも正しいのか分からない！　あの場所では今でも悪夢みたいなことが続けられていて、全員を救うことなんてできやしないし、できないなんてことは分かりきってたってのにさあ。……それなのに、あたしは殺した。殺したんだ。本当にそれが救ったことになるかなんて、誰にも分からねえってのにさ」

黙って聴きに徹していた興梠は、小さな声で少し驚いたと前置きして「でも」と続けた。表情は変わりない。手にはもう温くなっただろう封の切られていないジュースの缶。

「でも、あなたは間違いなく救うことができたと思います」
「人を殺したのに？　もしかしたらもっといい未来があったかもしれないのに！？」
「僕、同じだから、分かります。僕も生きることよりも辛いこと、知ってますから」
　ぶつりと頭の血管が切れたような気がした。何をこいつはいけしゃあしゃあと言ってやがるんだと。見たこともない癖に、体験したこともない癖に、あの地獄のような光景を見たこと無い癖に、よくもまあ知っているなどと口にできたものだとあたしは思った。
「一緒にするなっ！　お前の地獄とわたしの、彼らの地獄を一緒にするな！　見たこともない癖に知ったような口聞くんじゃないよ！
　どうせ、お前ははあれだろ、姉ちゃんのネンネに付き合わされて、オヤジとオカンに殴られて、ぴいぴい泣いている程度だろう！？　お前に分かるか！？　虫けらみたいに人が扱われて、夢も希望も抱けず成人するまで生きられないような奴らの気持ちがさあ！」
「……それは分からないです。でも、少なくともあなたは最初の子供を救って、それで彼の望みを叶えてあげた。それは事実です」
「殺したことで救いなんて言えないんだよ……。それは甘えだって」
「でも、東さんが殺した人の中で、その先ずっと不幸なままで終わることになった人もいたと思います。その人は救えたんじゃないかと僕は思います」
「だけど、だけどさ……！」
　結局それは自己満足でしかないのだ。そう思うことで自分が救われるから、人はそう信じる。もしかしたら幸福を掴むチャンスすら踏みにじったのではないかということに目を瞑り、信じる。その方が自分に優しいから、良心の呵責を苛まれないで済むから。所詮は詭弁に過ぎない。
　ぶうんと車が通り過ぎ、あたしはじっと遠くを眺めた。風は生温かくて、光は白っぽい。
　そんな中、興梠は呟く。

「……あなたが欲しいのは、理由じゃないですね。あなたが欲しいのは彼らの許しなんだと思います」
「……分かんないよ、そんなこと」
そうかもしれない。
「だから、僕が代表して、いいます」
……殺してくれて、ありがとうございます。
お前生きてるじゃんとか思ったし、関係ないしとか思ったし、あたしを慰めようと必死だなあとか思ったし、ゲロ吐いちゃったよとか思ったけれど、でも何だかそれが凄くありがたくて、涙が溢れて、笑いながらあたしは泣いた。号泣してしゃくりあげて、興梠の涙を馬鹿にできないような醜態を晒して、背中をさすられて、何だか凄く助けられて、本来の目的があやふやになってて、でも後悔はなくて、それであたしはその日、興梠を守ろうと心に誓った。

41ページ

「えっ……」

私は箸を握る指が痛むのも忘れて御前に聞き返した。御前は至極当たり前のように笑って、もう一度唇を開く。

「だから、興梠のこと好きになったわけですよ。ラブですよ、ラヴィーな感じで愛してるってことなわけですよ」

「いや、でも……え？」

冗談のように思えた。御前は興梠が嫌いで、興梠は凡そ人に好かれるような人間ではなくて、誰も狙わないという意味で安牌（あんぱい）だったのだ。

どこかへ向かった御前は洋服を汚して帰ってきたかと思えば、お腹が空いたといい、夕食を食べながらいつものように堕落しきった言葉を吐いたかと思えば、今度は興梠を好きだと言った。

自分の聞き間違いではないか、と考えた。昨日の御前があまりにも恐ろしすぎて、今もこうして緊張している私に聞こえた幻聴の類ではないだろうかと。

「本気ですか？」

「本気も本気の大マジですよ、これが」

頭の中で大きな鐘が木槌によってごうんごうんと低い音を鳴り響かせる。目眩と吐き気が津波のように私を攫っていく。つまり大変気分が悪かった。

ありえない。御前のようなお方には釣り合わない。それこそ私のような人間にこそ、あの精神病の固まりのような人間不信は相応しく思える。いや、実際そうなのだ。

「そ、それは大変よいことでございますね……でで、ですが」

「ん、ですが？」

「神足の人間としてはとても許容できることではございません」

「えー、なに美雪、嫉妬？　興梠のこと好きだったとか？」
何を馬鹿なと私は冷静に切り替えした。そして御前には八瀬の一族のようなちゃんとした家格のものこそ相応しいと強く説いた。興梠の家は確かに財もあり、家も立派だが所詮は庶民であり、高貴な家柄の東家とは到底釣り合うものとは思えなかったのだ。そういった誤りの修正も私の役目であり、恐れ多くも私は間違っていると訴えた。
御前は呆れたように頬を弛ませて「お前さあ」とため息混じりにいい、言葉を紡ぐ。
「お前、人を好きになるのに家格だとか家柄を判断基準にしてるの？　極悪人でも家柄がよければオーケーってことにはならないでしょーが。美雪はあれかい、あたしのことを好きでいてくれるのは東で瑞希だから好きってことなワケかい？」
「そ、そういう訳ではありませんけど……」
「だろうよ。誰かを好きになるってことはそういうことじゃない。好きになるってことはハートが大事なわけなのよ。キングオブハート」
ぐうの音も出ない。私は開きかけた口を静かに閉じた。
俯いた頭を起こしてもう一度口を開くが、御前の海の底のような瞳の前では掠れた声しか出なかった。

私はその日、泣いた。
御前と私では明らかに開きがありすぎたし、御前は魅力的すぎた。私に持っていないものを全て持っているように思えた。
美しさ、聡明さ、暖かい両親、心のゆとり、家柄。あらゆるものが私は劣っていて、比べるまでもないように思えた。悔しいというよりもどうしようもない気持ちだった。
空から隕石が降ってくるように、時間の流れを変えられないように、それは必然的なもので、私にはどうしようもないのだ。
私が興梠であったのなら、私は御前を選ぶ。それが何とも心苦し

い。

「ああ……」

真っ暗な部屋で意識が戻った。肩で息をしていて、酷く汗ばみ疲れている。どれほど時間が経っていたのか検討がつかない。

嗅ぎなれた部屋の臭いにそこが自分の部屋だと気がつく。

部屋を歩くと細かい何かが足の裏を刺し、痛む。私は暗闇の中、壁伝いに部屋のスイッチを探し、明かりを灯した。

「……なんだ、これは」

部屋は酷い有様だった。お気に入りの茶色のテディベアには幾重にも鉛筆や鋏が刺さっていて首はもげかけ、白い綿が外に飛び出ていた。誰かを思わせる黒いつぶらな瞳は片方がない。不意に口の中に違和感を覚え、ぺっと吐き出すとそれはテディベアの片目だった。

本棚は倒壊し、ありとあらゆるものが床の上にぶちまけられていた。

「私が、これをやったのか。ははっ、狂ってる」

いや、最初から狂っていたのだ。それに今まで気がつかなかっただけで。

自分の着ている服を見る。先程の服とは違い、全身が黒ずくめで、部屋を荒らす前にどこかに出かけていたようだった。

私は私を推理するために部屋をつぶさに観察した。テーブルの上の大きめの茶封筒、カードのないデジカメ。ポケットからはインターネット喫茶のレシートが出た。プリントアウトが一枚、十円とはボッタクリだな。

ああ、そうか。私は興梠の“あの写真”をプリントアウトしたのか。

「……で、その写真はどこだ？」

家中探しまわってもその写真は見当たらなかった。

漠然と私の頭の中に、興梠の家のポストが浮かび上がった。妙にその記憶はリアルであり、大変恐ろしい妄想だった。

また悲しみの波が喉から湧き上がりそうになるのを、深く息を吸

うことで抑えこむ。
何を悲しむことがある。私は御前のしもべだ。他人を許容しないあのお方が他人を認めたのだ、これを喜ばずして何を喜ぶというのだ。
「だから、我慢するんだ私」
ぎゅうぎゅうに詰まった何かが腹の底でグツグツと煮えたぎる音を鳴らした。
気を紛らわす為にいろんなことを考える。考えた。考えたがどんどん腹が膨れ、喉から溢れそうになった。
私はそこで興梠のことを考えた。興梠と手を繋いで、夕焼けの川辺を歩き、御前にからかわられる幻想を考えた。
すうっと気分が和らいでいく。
何とも心地良いが、何と悲しい妄想だろうかと私は一人で笑って、結局泣いた。泣きながら今度は興梠をベッドで喘がせている妄想をした。興奮に鳥肌が穿つ。
今度は興梠を林の中に追い立て、追いかけている妄想を浮かべた。興梠は泣きそうな顔で私を見ていて、必死に逃げ惑う。私の手が奴の服を掴み、破き、悲鳴を轟かせた。しかし助けは来ない。そういう筋書きなのだ。興梠は何度もやめて下さいと血まみれの顔でいう。やめて欲しければ服を脱げと私はいって……。
「ははははははっ」
確信した。私は狂っている。
気狂いだ。
冷静さはどこにもなく、胸の悪さだけがそこにはあった。
胸の奥に何かが詰まったような異物感が私を苛んでいた。しかしそれは同時に先程の破裂しそうな何かを払拭してくれていた。
暴力的な妄想を暴力的な妄想によってかき消すというのは愚かで矛盾しているようにも思えたが、不思議なことにこれが恐ろしいほどに心地良かった。

42ページ

早朝、学校に来ると興梠は自分の机を雑巾で拭いていた。どうしたのかと明るく御前が問いかけると、奴は学校に来たら机やら椅子に泥水がかけられていたのだと目の縁にクマをのせていった。

「酷い奴もいたものですね」

「そう、だね」

私の声に御前は少し言葉に詰まったように笑い、興梠の憔悴した表情を心配なさった。興梠は昨日は忙しかったのですと平坦な口調で答えたが、無理をして通常通りの声を出そうとしているのはありありと見て取れた。御前が軽く肩に触れるだけで痛そうに眉をしかめた。

まるで一晩中誰かに折檻でも受けたようだった。

その後、御前と私は掃除を手伝い、そして私は正式に興梠に謝罪をした。興梠は掃除をしている間も私を避け続けやがったが、御前に推されて私と対面し、渋々といった感じに私を許した。

「本当に……すまなかった」

「いいです。平気、です」

何ともそれが気に食わなく思えた。自分の意志ではなく他人に言われて許すということは誠心誠意から謝罪している相手にとって失礼な行為であるとは考えないのだろうか。まあ、考えないのだろう。コイツに他人の気持ちを推し量ることなどできはしないのだ。強者に媚びへつらい、命令されなければ自分の意志すらまともに伝えられない出来損ないなのだから当然か。

逆にいえば命令する側が間違っていてもコイツはそれを疑問にすら思わずにそれが正しいと信じるというわけだ。まるで意志を持たぬ人形。

「これからはどうか仲良くしてやってくれ、この通りだ」

「あ、わ、は……い」

興梠の汗ばんだ手を握り、私は懇願するように、今にも地に額をつけかねんと言わんばかりの勢いで興梠に謝った。頭を下げて謝り続けた。包帯巻きにされ、指先は血が滲んでいる手で、震えるようにして、謝った。

そうしないともっと酷い目に遭わされるのだと言わんばかりに。

「……わっ」

「あっ……く！」

「あああ、ごめ、ごめんな、さい」

興梠は私の血で滲んだ手を見てぎょっとしたらしく、手を引っ込めようとした。私はそこでさも傷口に興梠が触れたかのように痛がってみせる。想定通り奴は顔を青くしてあべこべに私に謝罪をした。その表情が何とも良かった。

「いや、謝るのは私の方だ。本当に、本当にすまなかった」

「い、い、いいです……！　いいです、から」

赤い絵の具で一筋の線を描いたかのように興梠の手は赤く濡れた。私はそれでも謝り続ける。許しを乞う。血を興梠に擦り付けて、興梠を観察する。コイツは何がダメで、何を恐れているのかを。

良心の呵責を恐れているのか、血を恐れているのか、暴力を恐れているのか、性的なことを恐れているのか、異常さを恐れているのか、嫌われることを恐れているのか、他人の評価を恐れているのか、生を恐れているのか、死を恐れているのか、失うことを恐れているのか、得ることを恐れているのか。

私は瞳を覗いてそれを観察する。言葉を微妙にずらしながら、それを探り当てる。ボロボロと崩れていく分厚い壁の向こう側に何を守っているのか、私は顔を押し付け、穴をほじくりそれを見ようとした。

見える、そう思った瞬間。

「美雪、ちょっとお前、怖いよ。それに興梠、完全にびびっちゃってるしさあ」

後ろから肩を掴まれ私はそこで謝罪を止めた。あと少しであちら

側を覗けたというのに惜しい。
「あ、私としたことが、すみません」
「いや、あたしに謝っても……って、これじゃあ無限ループだし、なんだか妙ちくりんだあね」
苦笑いをして御前は頭を指で掻いた。
私も御前に合わせて、笑うもその意志は別のところにあった。目尻は弧を描きながらも、瞼の下は冷静に別のものに意識を向けていた。どうすれば興梠の心をへし折り、粉砕し、蹂躙できるのだろうというところに己の意を。
暴力はとても効果的だった。だけどそれだけでは駄目なのだ。絶対に足りない。誰かが癒せる程度ものでは到底私の望む崩壊を見ることは叶わない。
では何が必要なのか。何を陵辱すれば、お前は私に心をさらけ出す？　どうすれば服従して、私に壊されることを望むんだ？　いつになればこの腹の中に溜めたものをお前にぶち撒けることができる？
それを考えれば考えるほどに私の握りこぶしはぎゅっと硬くなり、腹の底の魔物は強く唸り声を上げた。感情が溢れでないように冷静を装いながら、興梠を陵辱する妄想をするのは大変だった。精神を酷く消費する。
お前の泣きながら喘ぐ姿、嫌だというのに私を求むる手、拒絶したいのに拒絶できないお前の唇、煽（あふ）るる涙を堪えようとしながらも零れ落ちる瞼、血を迸（ほとばし）らせながらそれを悦ぶ柔肌、それらは何時になれば、どうすればこの手に届くというのか。
どうすればいい？　どうすればいい？　どうすればいい？　どうすればいい？　どうすればいい？　どうすればいい？　どうすればいい？　どうすればいい？　どうすればいい？　どうすればいい？
私の為に喜び、私の為に怒り、私の為に哀しみ、私の為に楽しむお前を見るのにはのはどうすればいい？　何を支払えばいい？　お前から何を奪えばいい？
どうすれば私を好きになってくれるんだ？　興梠命。

「興梠、私を許してくれてありがとう」

43ページ

次の日から、積極的に私は興梠を責めた。体操着はズタズタにし、ノートや教科書はカッターで切り裂いた。アイツの机だけ露骨に泥だらけにしたりもしたし、卑猥な雑誌を机の中に放り込んだりもした。あの時に撮った写真をばら撒き、クラスから孤立させてもみた。

しかし奴は動じなかった。少し嫌そうな顔をする程度で大したダメージは感じていないようだった。てっきり御前に泣きつくものだと思っていたが、そうでもなく、奴は指摘されるまでずっと黙っていた。私にも泣きつかなかった。だから御前はたまに興梠は嫌がらせをされているようだ程度の感想しか抱かれなかったようだった。写真のばら撒きがあったせいで、クラスから酷い目で見られるようになったからそのせいだろうと。

ある日、いつものように興梠に嫌がらせをしようと夜の学校に忍びこむと、アイツの机に雑誌の切り抜きがセロテープで固定してあった。よく目を凝らしてみると、それはあの時に私が撮った写真の興梠の首と、ティーンズ向けのファッション雑誌のモデルらしき女の首を削げ変えたものだった。プリントしたものを無理やりリサイズしたのか顔は少しモザイク調で遠近が取れていなかったが、その服は確かに興梠に似合うだろうと思えた。

「……私以外にも興梠に執着している者がいる」

私は誰だろうと考えた。誰が私に乗っかかる形で興梠に嫌がらせをしているのだろうと。誰がアイツに欲情しているのだろうと。あれは私のだ。私のものなのだ。誰にもくれてやるものか。髪の毛一本、まつ毛一本くれてやるものか。臭いも涙も涎も体液も私の物なのだ。誰だ、誰が？

ああ、そうかと私は行き着く。答えは単純だ。とても単純で、とても分かりやすかった。

御前以外に誰がいる？　御前は興梠を好きになった。好きだった。

だから私に嫉妬したんだ。私がアレを思い通りに、舐り、叩き、犯していたから、自分もしてみたいと思ったに違いない。羨ましかったのだ、きっとあのお方は。だから私に辛く当たり、あのような罰を私に課したのだ。本当は自分がそれをしたいから、本当は我慢しているから。それを誤魔化す為に私に辛く当たった。

そう思うと笑みが零れた。部屋でくくっと笑った。

「御前も言ってくれれば……ははっ」

主人である手前、言い出せなかったのだろう。あのような凡夫に欲情しているなどと高貴な血が流れている立場としては言えなかったのだろう。先日、好きだと言ったのは、そういう意味だったのか。私としたことが主人の意味を汲み取れなかったとは何たることだ。

でも、もう大丈夫ですよ。私にお任せ下さい。あなたの望みは私が叶えて差し上げましょう。

「なーに笑ってんのさ？　イイことでもあったの？」

「いえいえ」

私と一緒に興梠を犯して、陵辱して、心を引き裂きましょう。私とあなたで興梠を飼いましょう。蔵に閉じ込めて、毎日毎日、日が暮れるまで遊びましょう。

ええ、分かっていますとも。

次の日、学校から誰もいなくなっただろう夕闇の時間に私は教室に入った。興梠の机の上に、アイツの筆跡を真似た手紙を置く。文面には素っ気なく理科実験室で待つと書き記した。実に興梠らしい文調だと自分でも思う。

翌日、手紙がなくなっていることを確認した私は、放課後になると興梠を誘拐した。襲うのは簡単だった。馬鹿なアイツはいつものように屋上にいて、じっと遠くの空を見つめていた。気づかれないようにそっと忍び寄り、後ろからビニール袋を被せて、動かなくなるまで蹴り飛ばした。それだけで奴は大人しくなった。

捕獲した興梠を実験室のテーブルに寝かせ、半裸にした。口にボ

ールギャグというものを入れ、手足を縛り、目隠しする。豚の鳴き声のように穴の開いたボールから涎を垂らして震える姿は滑稽だった。滑稽で扇情的だった。なめしたような白い肌は息をする度に美しく動いた。思い切り拳を叩き込むと、私の手の形に赤く染まり、興梠は涙でアイマスクを濡らした。

興梠は誰に誘拐されているのか分からないのだ。これから何をされるのか知らないのだ。だからビクビクといやらしく怯えている。

悪いな、興梠。最初は御前に譲ることにした。お前の最初は私と思ったが、これは必要不可欠な出費なんだ。許してやってくれ。その後、たっぷり壊してやるからな。滅茶苦茶に壊してやるから。

そう、隠れた私がボイスレコーダーに御前の言葉を録音し、写真を撮り、証拠を押さえたその時に、その後に、たっぷりしてやる。普段から絶望したような顔のお前が更に絶望するような、そんな表情に私がしてやる。御前のことなんて直ぐに忘れてしまうようなくらい、とびきりな奴を私が、私がお前を愛してやる。私が忘れさせてやるからな。私色にお前を染めてやるから。

理科実験室の教壇の下の机は広く、隠れるにはうってつけだった。私がそこに隠れていると、扉の開く音がした。私は息を殺し、存在を殺し、御前のレコーダーの録音ボタンを押した。感度は折り紙つきで、準備は万端だった。

靴音が興梠のところで止まる。興梠に手を出し、少ししたところで私は飛び出す。そしてニヤリと笑い、御前に「私は分かっていました。御前が何を欲していたのかを。さあ、一緒に興梠を壊しましょう」と言うのだ。御前に拒否権はない。落とし所は明らかに、それ以外ないのだから、当然だ。

私はわくわくしながら今か今かと待った。待って、氷ついた。

「命ちゃん……、そんな格好しちゃダメだろ。反則だって」

その声は、この声色は。

「もう、我慢できねえよ、俺」

八瀬の声だった。

４４ページ（前書き）

修正とかまだしてない。でもそのうちすると思うよ！

44ページ

八瀬は迷わず、カチャカチャと安っぽい音を立ててベルトを外した。外しているようだった。

興梠はやってきた八瀬に対して低い唸り声を上げて、じたばたと抵抗をしているようだった。いや、そうじゃない。御前はどこに？

そもそも何故、八瀬が？　いやいやいや、興梠が、じゃなくて、え？　どうすれば、え？

「大丈夫、俺はあいつらとは違うから。俺はちゃんと命ちゃんを女の子扱いしてやるからさ。ははっ、ぶるぶる震えてて可愛いな。この前みたいに叫んでみろよ。ほら、わーってさ。手を振り回しながらわーって」

せせら笑うように八瀬はそう言って、いや次第に息を荒くして、それで。

興梠も。

「最高だよ、命ちゃん」

興梠もグズグズ泣いてるだけで、ああ……なんだろう、凄く頭が痛い。吐き気もする。目が重い。目の前が揺れてちらつく。ええっと、今日の夕飯は何にしよう。ああ、カチャカチャうるさい。金具の音？　そんなのはどうでもいい。それよりも夕飯はどうしようか。明日の弁当もどうしよう。まだ冷蔵庫に野菜はあっただろうか。煮物のあまりがあったが、弁当に回せるほどの量はなかった気がする。御前が美味しい美味しいと言ってたくさん食べたからか。ああ、なら明日はカロリーの低いものにしないといけないな。あの方はいつもぐうたらしていて、食べたら直ぐ横になるし、運動は面倒だというし。

「おつかれ、命ちゃん」

うるさいな。うるさい。うるさいんだ。

今、私は忙しいんだ。何も聞きたくないし、何も見たくない。何

もしたくないんだ。忙しいから。
「ああ、やっぱここに隠れてたのか」
「あっ……ああ！」
八瀬は私に笑いかけた。にやにやした顔で私に。
腰を小さく屈めて、小さな洞穴で怯える私を見下ろしていた。
「そんなに驚くことじゃねえだろ。ここで隠れる場所っていったら掃除用具入れか、ここの……ああ、もしかして自分はバレてないとか思ってたのか、お前。ばっかだなあ、お前のゴシュジンサマも俺も……それにクラスの奴も何人かは気づいてたって。お前が興梠を虐めてたの。だって……ははは！　おっかしいだろ？　毎日、見てるこっちが鬱陶しくなるくらいいちゃついてたお前らが、急に不仲になって、興梠の机が泥だけとかになってるんだぜ？　バレバレだって。誰でもフラれた腹いせだって気づくって」
「あ、の」
息を吸う。浅い呼吸を止めて、すうっと大きく息を吸った。
部屋中に充満している汗の臭いが口に入る。
「ん？」
「こう、ろぎは」
八瀬は笑った。馬鹿馬鹿しいと笑った。
「自分で見ろよ。自分の目で確かめろって」
嬉しそうに笑って、おっとと八瀬は言った。
「忘れてた。神足、ありがとな。ごちそうさま！　ははは！」
「……あっ」
ガラガラと教室の扉が開かれて、またガラガラと音がして扉は閉まった。
むせ返るような生ぬるい空気にかび臭くて冷えた廊下の臭いが混じった。混じったけれど部屋に満ちた汗の臭いは濃密で、それだけでは消えなかった。消えてくれなかった。嘘であり続けてくれなかった。
こわい。見るのが怖い。この暗い箱から頭を出して、テーブルに

横たわるアレを見たくない。見なければきっと答えが現実にならない気がするのだ。箱の中の猫の死が、箱を開けるまで分からないように。

私にはそれを見る勇気がない。ただ私は、小さく丸まって、震えて、頭を掻きむしった。

ガラリと音がした。

「興梠……そんな、嫌だ。嫌だよ」

よく知った声だった。

「守るって決めたのに」

あの方はふらつくような覚束無い足取りで、ぶつぶつ呟いて、それへと近づいていった。

「守るって決めたばっかりなのに……どうして」

すがるような音がして、事実あの方はすがっているようだった。すがりついているようだった。泣きながら、すがって、悔しそうにすがって。

「誰が、こんな、酷いこと。興梠が何したって言うんだ！　ただコイツは、お前は、普通にしてただけなのに。弱いからってどうしてっ！」

弱いからですよ。弱い奴が悪いんですよ。強くなければ、いけないのです。世の中の悪意は強いから、強くなければいけないのです。

「美雪がやったの？　また美雪が？　いや、これは男だよね？　……ああ、ひひひひ。あたし分かった。誰がやったか分かった。両方？　ねえ、両方だよね。よし、殺そう。あいつら殺そっか。殺そうよ。殺さないとダメだよ。……もう、嫌だ。もう、誰かが苦しんで、無理してる顔見るのはもう嫌だよ、わたし」

「いいんです。平気……ですから。ぼくは、平気ですから」

ああ、何だか、久しぶりに声を聞いた気がする。そういえばずっと聞いていなかったような気がする。この水底のような声を。この深海のような静かな声。

「そんなワケないでしょ。そんなことあるわけないよ。そんなこと

言っちゃダメだって。だって、興梠はそんなに辛そうな顔してる。言ってよ、あたしに今直ぐ言ってよ。あいつらに復讐したいって。あいつらぶち殺して欲しいって言ってよ言ってくれれば絶対必ず殺してやるから。殺すから。興梠の為に、あたし殺すよ。だから！」

「いいです。いいですから。ぼく、誰にも何も……されてないですから」

「……馬鹿だよ、大馬鹿だよ！　本当は辛いくせに、本当は苦しいくせになんで、そんな。私に命令してよ、わたしに復讐さしてよ！　嫌なんだよ、許せないんだよ！　アイツらみたいなこと、平気でしてる奴がわたしは！　人を踏みにじって平気で笑ってるような奴が、許せないんだよ……」

しばらく、ずっと、誰も何も言わなかった。私はただ声を殺して、息を殺して、頭を抱えて、爪を噛みながら、狂気してしまいそうな、張り裂けてしまいそうな、そんな殺意に震えていた。少しでも息をしてしまったら、私の位置がバレてしまうのではないだろうか、と震えていた。レコーダーを握りしめて震えた。

「ひとつだけ、いいですか」

「うん、何でも言ってよ。何でもするから」

「ぼくが、生まれ変わったら、普通の思い出、作ってあげてください。嫌な思い出とかじゃなくて、辛い思い出とかそういうのじゃなくて、もっと普通で、楽しい感じの思い出を作ってあげて下さい。やっぱり、少し、うん、こういうのはうん……つらい、よぅ」

そう言ってくぐもった声で興梠は泣いた。きっと御前の服に顔を押し付けて泣いた。声を堪えながら、声を上げて、泣いた。ああ、きっとしわくちゃにしてしまっているのだろうな。アイロンかけないとな。

「分かったよ、分かったから」

「ほ――とは、いやだ。こういうの、嫌です。嫌なんです。でも、ぼくは――」

「分かってるから、分かったから、絶対守るから、もう二度とこん

なこと、誰にもさせないから」
「ううううっうぅう」
しばらく泣いて、泣き合って、御前と興梠は泣き合って、教室を出て行った。私はしばらくずっとそこに隠れていて、日が暮れるまで隠れていて、大分時間が経ってからそっと顔を出した。御前がいた。尻餅をついた。
「やっほお」
「ひっ」
「興梠はあたしのジャージ着せて帰したから。……まあ、そういうことだからさ、美雪は死ななくていいんだよ」
「うぁ……うう」
「殺したいけどさ、ぶち殺したいけどさ、もう全部壊して、引きちぎって、どうにかしてやりたいけど、興梠がしちゃダメだって、しないでくれって言うからさ。アイツなんなの、聖人か何かの生まれ変わりなのかな？　あ、でも慈悲とか優しさとか、そういうのじゃないから、聖人は言い過ぎだよね。前世は多分、蹴りやすいサイズの石ころか何かだろうね、多分」
「あああああああああ、の。あのあの」
「いいから黙れ、口を開くな。反吐が出るよ、お前の愚かさを見てると。明日から普通にわたしはお前に接する。お前に普通に話しかける。その話題も口にはしないし、知らんフリをしてやる。けど忘れるな。お前は一度死んでるんだ。忘れるなよ」
そういって御前は音も立てずに消えていった。私はまた頭を掻きむしった。

45頁

空を仰ぎみれば何かが浮かぶような気がした。
しかし何も浮かばず、ただ時間は無為に過ぎ去り、鼓動に音が塞がる。天井はただ白く、その平坦さと無機質さをわたしに知らしめました。
つまりわたしは現実逃避に必死だったのです。
体を滑る神足さんの汗ばんだ手に本当は叫びだしたい気持ちなのですけど、わたしはそれを堪え、じっと黙ります。神足さんもそれを分かっているのか、わたしが泣きそうになると一旦、手を止め、わたしの調子が戻るとまた手を動かしました。
「わ、私は何でも知っているぞ。お前のことなら何でも知っている。私とお前はそういう仲だったんだ。恋人とはいかなかったが、それなりの仲だったんだ。だから、何でも知ってる。知りたいだろ？　知りたいから私のところに来たんだろ？　なら、覚悟はできているはずだ」
「うっううっうううう……」
彼女に背を向けてわたしは、丸くなりました。それでも彼女は撫でることをやめてくれません。わたしのお尻に手を伸ばし、ふうふうと重く熱い息を吐き出しました。わたしはあまりの恐怖に口を両手で押さえて、嗚咽を堪えました。布団に顔を包んで、口を押さえます。どろっとした何かが口から溢れでてしまいそうでたまりません。悲しみが溢れてしまいそうでたまりません。
「偉いぞ、興梠。成長したじゃないか。前のお前は、そんな反応は見せなかった。そんな可愛らしい反応は。それとも、そんなに真実という奴が気になるのか？　みんながお前に嘘をついているという言葉が、気になってしょうがないんだろ。大丈夫、私は、私だけはお前の味方だ。今も昔も……」
「あ、あ、ああの。本当のこと、教え……教えて下さい」

布団を頭に被ったまま、私は涙混じりにお願いします。神足さんの服を脱ぐような衣擦れの音に震え、身を縮ませながら、御願します。

何が起こるのか、何をされるのかを察しながらも、それを否定しながら、私は懇願するのです。

「……真実か。そうだ、お前にいいものを見せてやろう」

何をするのだろうと私はそっと布団を上にあげて、そちらを見ました。布団の隙間から見えた神足さんは半裸の状態でした。私はそれにぎょっとして、また布団の中に顔を隠したのですが、神足さんの手の中に何かがあったのを思い出し、もう一度恐る恐る、布団に隙間を作りました。

「これが真実だ」

神足さんは何か割れ物でも扱うような手で薄黄色の封筒を手にしていました。薄ら笑いを浮かべながら封筒から何枚かの写真を取り出し、わたしに差し出しました。わたしはそれをそっと受け取り、見ます。

「あっ……わっわっわっ！」

「よく撮れてるだろ？」

「何で、これ、僕が……」

「御前の注文だ。そういう写真をあの方が欲したんだ。本当は嫌だったんだぞ、仕方がなくだったんだ。でもあの方の命令だからな、私が撮らざるを得なかった」

その写真、そのプリントアウトされた写真には、わたしがいました。わたしがこの部屋の床で寝そべり、少女趣味の服装に身を包んでいる姿がありました。

わたしは頬をこれでもかというくらいに熱く染めさせ、その羞恥に耐えます。

白く丈の短いワンピース姿のわたし、黒いドレスに身を包んだわたし、ハイソックスとショートパンツのわたし。わたしわたしわたし。

どのわたしも諦めたように床に寝そべり、頬に痣を乗せて、黙っていました。

「クラス中にばらまかれたこともあった。それで、お前は随分と苦労しているようだった。その時も私だけはお前の味方だったんだ。お前が家で、あの嘘つきの姉にいろいろされている間も私はお前だけの味方だった。本当だ、嘘なんかつくものか」

クラス中のみんなが知っていて、この写真を見ていたということに寒気を覚えました。そして恥ずかしくて死にたくなりました。きんっと冷えた物がわたしの手と背中と脇に汗をかかせて、焦燥に駆らせました。どんな生き方をしてきたのだろうと思うと、苦しくて、恥ずかしくて、死にそうでした。

そっとわたしを後ろから包んだ神足さんは言います。すうっとわたしの匂いを吸って言います。

「だから、だからな、今からすることは清めなんだ。内側を清めるんだ」

「き、きよめ？」

「お前の体は、手垢にまみれてる。汚れてるんだ。本当は私と付き合って普通に暮らしているはずだったのに、お前は御前にボロボロにされてもう駄目になっている。だから私が今から、お前の体を清めるんだ」

「あの、よく分かりません」

「治療だと思えばいい。大丈夫、任せておけ。嘘ばかりついているあの方よりも、私の方が信用できるだろ？」

「あ、あの」

抱きしめる手をより、強めて、触手のごとく私を絡めとりました。汗で蒸れる彼女の体は震え、声は震え、心臓の音は緊張に打ち震えました。わたしはどうしていいかも、何を信じていいかも分からず、ただ困惑し、身を縮めるばかりです。シーツをぎゅっと掴み、体を揺らし、じっと考えをまとめようとしました。まとめようとするのですが、彼女の耳をはむ行動に思考が追いつきません。あ、いや、

です。あの、その。

「大丈夫だ……邪魔者は来ないから、安心するといい。私と一緒に入れば安心だぞ。私はお前のことを知り尽くしてるからな。お前の嫌なことも、好きなことも何でも知ってるぞ、だから、頼むから、私から離れないでくれ。お願いだ、私はお前が好きで好きでたまらないんだ。興梠、好きだ。好きだから、いいだろ？　お前は私の知識が知りたくて、私はお前のことが好き。両想いみたいなものじゃないか。ならいいだろ？　なあ、いいだろう？」

「あ、あわ、ううーっ……」

46頁

外は夕焼け空に染まっていて、空気の肌を滑る生ぬるい感覚と、どこかの家庭から漂ってくる夕飯の焼き魚の臭いはどこかちぐはぐで、幻想的で、懐かしくて、わたしを孤独にさせました。わたしはぼんやりと帰り道を歩き、自宅に戻ります。戻って、シャワーで体を洗い流しました。ぶるぶる濡れそぼった子犬のように、あるいは人を信用できなくなった獣のように震えながら、息を大きく切らしながら、小さく膝を丸めて、泣きました。泣きました、沢山。いっぱい泣きます。

声を殺して、息を殺して、自分を殺して。

泣けば、この悲しみが体の内側から過ぎ去ってくれると信じて泣きます。けれど、わたしの脳裏に浮かぶ生々しく、残酷な記憶は決して消えてくれません。決してわたしの元から去ってはくれません。辛辣で、生臭い記憶はわたしの体に起こったできごとを光の瞬きのようにピカピカとフラッシュバックさせるのです。汗と体の汚れと臭いをシャワーは流してくれるのですが、その記憶だけはどうしても消してくれませんでした。

「どうしたの？」

わたしは水を吸ったような重い頭を持ち上げて、姉様の顔を見ました。姉様は相も変わらずけだるそうで、ジャージ姿で、少しだけ微笑を浮かべてわたしを見ていました。

ゆったりとした仕草で腰をかがめて、姉様はもう一度わたしに口を開きます。

「どうしたの？　何でスカートのまま、お風呂に入ってるの？　出て行った時に着ていた服はどうしたの？」

「……あ、う」

「鼻血、出てるよ」

そっと指先で鼻を擦ってみるも、お湯で流れてしまって血が分か

りません。鼻をすすってみると、ほんのりと血の味が舌を汚したのが分かりました。わたしは何かを言おうとして、声が出ないことに気がつき、少しパニックになりました。泣き叫び過ぎたせいかもしれません、先ほどに。

姉様は湯気の立つ浴室にスリッパのまま足を踏み入れ、わたしの髪の毛を両の手で掻き上げました。姉様にもシャワーのお湯がかかるのですが、姉様はまったく気にしてはいないようでした。目にお湯が入っても、一度足りとも瞬きをしません。

わたしはいろいろなことが重なっていただけに、少し身を引かせてしまいました。怖いのです、何が真実で、何が本当で、何が嘘で、何が虚実なのか分からないから。

姉様のわたしを見ているようでわたしを見ていないような遠い瞳がわたしに語りかけます。なにがあったのかと。

十分だったでしょうか、二十分経ったのでしょうか、あるいは一時間もの時間が経ったのかもしれません。ただわたしと姉様はじっと視線を交わし合い、言葉を待ちました。気がつけばわたしの口から自然とさきほどあっただろう出来事が語られていて、ぽつぽつと英語の分からない生徒のような言葉がこぼれ落ちていて、それを姉様はビスクドールのような冷淡さと生々しさを持って、ただ聞いておられました。

「そう、分かった。早くお風呂出なさいね」

全てを聞き終わった姉様はそれだけいうと、来た時と変わらない様子でお風呂場から出て行かれました。

その頃にはわたしの涙も、わたしの血も、いつの間にか止まっていて、声も出るようになっていました。けれども悲しみの波は未だ、その流れを止めることはありませんでした。

「昨日の残りのカレーしかないから、それ食べようか」

姉様はそういってわたしに優しく接します。わたしが濡れ烏（がらす）のように身をぶるりと震わせてクシュンとくしゃみをすると姉様は小さ

く笑って、ちゃんと拭かないと風邪引くよとわたしに教えてくれました。そうか、いつもは濡れたままだったから。

「あの」

「どうしたの？」

「学校」

「学校が何？」

「が、学校……行きたくないです」

わたしはつま先を見つめながら姉様に恐る恐る申し上げてみます。そっと見上げるようにカレーをよそうエプロン姿の姉様に言ってみます。姉様は小さく首を傾げ、わたしにどうしてと態度で表します。わたしは、その理由を自分の口からは言えなくて、分かっているし、心の中では饒舌にそれを説明できるのですが、なぜか口にだしていうことは憚れるような、そんな気持ちになって言い出せませんでした。

ただ体を揺らして、手を揺らして、懇願するように姉様を見ているだけでした。

言いよどむわたしにしびれを切らしたのか、姉様はいつもと変わらない口調で言いました。

「強姦されたから、行きたくないの？」

わたしは答えません。

「何で強姦されたら行きたくないの？」

わたしは答えられません。

「強姦した人が許せないの？」

わたしには答えが分かりません。

「イヤなら、イヤなやつ、刺しちゃえばいいんだよ。ほら、包丁でも何でも持ってやっちゃえばいいんだよ。そう、それを持って、明日学校に行って刺してきなさい。そうすれば全部丸く収まるから。イヤなことは全部さ、壊しちゃえばいいんだよ。もうね、君はずっとずっと我慢してきたと思うの。イヤなことをずっとね。だからもうそろそろいいんじゃないかなってわたしは思うな。そうすればも

う悩まされることもないし、ぐっすり眠れると思うし、君が泣く必要もないんじゃないかな」

包丁を握ったわたしの横を、虚実にまみれた姉様が通りました。お侍のようなまげを生やしたジャージ姿の姉様が横を。わたしに嘘をつく姉様が。

「嘘つきなわたしを刺したいのなら、そうすればいいんじゃないかな」

「……っあ」

わたしはその言葉にぎょっとなって、包丁を手から零しました。包丁はからんと安っぽい金属音を立てて、フローリングを鳴らしましたが、姉様は見向きもせず、いただきますと言ってスプーンでカレーを口に運びました。ターメリックの独特な香りがわたしの空腹を揺らすような気がしました。

「……嘘をついているんですか」

包丁を拾い上げるわたしの言葉に姉様は小さく笑い、言いました。

「カレー、冷めちゃうよ」

その言葉は確かにイエスと言っていて、姉様も自覚的にそう答えていて、わたしの手の中で包丁は鈍く光っていて、わたしの手は汗ばんで、イヤなことは全部なくなってしまえばいいのに。いいのだ。どうすればいいのでしょうか？　分かりません。

ただわたしは包丁をきつく握り、真っ直ぐ前に進みました。

47頁

目が眩むような色素の薄い朝の光りは冷たくて、わたしの学生鞄の中に入った包丁は重たくて、前へと進もうと試みる足は硬かった。わたしはイヤだイヤだと首を振る足を前へと向けて、歩きます。

交差点に差し掛かり、私はやっと足を止めることができました。歩き疲れたような、足の裏の熱に少し、体の疲労を感じます。真っ赤に光る信号を眺めていると後ろから足音が聞こえました。

ああ、きっとあの人だと推察して、悩みました。どう接すればいいだろうと考えます。きっと彼女はわたしが真実を知っているとは思わないのではないでしょうかと思うのです。なら、わたしは知らないフリをすべきなのかもしれません。あるいは軽蔑すべきなのかもしれません。

どうしましょう、と悩んでいるうちに、彼女はふわりとわたしの髪を掻き上げて頬を撫でました。冷たい指先にぞわりと肌に鳥肌が浮かびます。

「やっほー、興梠！」

「あの、あず……」

……息を呑む、とはこういうことを言うのだと思います。

彼女はわたしの頬から首筋に手を滑らせながら、冷えた目尻を歪めて笑いました。

「なかなか似てるだろ？」

神足さんでした。

わたしは信号が変わったのにも気がつかず、呆然とそこに立ち尽くしました。足を動かそうと思っても、足が動かないのです。叫び声を上げて、走って逃げようと思っても、その手を振りほどこうと思っても、わたしの肩から二の腕を滑る手を振り払おうと思っても、体が言う事を聞きません。まるでそれは、サーカスの調教師とライオンのように……あるいは人形師と人形のような。

わたしはただその恐ろしいものを目の中に入れないように、下をうつむいて、涙のように、雨のようにパラパラと地面を濡らす汗を眺めていました。

「あ、の、手……やめ、あの」

「ははは、どうしてそんなに怯えているんだ？　何か嫌なことでもあったのか？　ほら、信号が点滅してる。渡ろう」

彼女はそういってわたしの手を握り、歩道の上を歩いていきます。指を絡めて、きつく絡めて、わたしの心をその手に絡めとって、歩くのです。

「いくら朝が早いからと言っても、そんなにゆっくり歩くと遅刻してしまうぞ」

「……」

吐きそうです。頭が痛いです。喉の奥がつんとします。熱いのに寒いです。汗がぬるぬるして気持ち悪いです。しゃがみ込んで、耳を塞いで、声を上げて、ただ泣きたいです。

「ああ、そうだ。鍵を渡していなかったな」

「えっ」

「もう、私たち付き合ってるようなものだろ？　だから鍵だ、私の家の」

そういって彼女は私のポケットに鍵をねじ込んで、手を抜く瞬間に太ももを人差し指で撫でました。

「私が御前のお世話で忙しいこともあるだろ？　だから、そういう時は先に家に居てくれていい。流石に私も外や学校でお前に言い寄るほど無粋じゃないからな」

「これ、いらないです」

「クローゼットにある服は右から順番に日替わりで着ていくようしろ」

「あの、これ」

「お茶とかお菓子は好きにしていい。場所は……まあ言わなくてもいいな」

「あの、いらないですから！」
　ぱんと風船が割れるような音がして、転びそうになりました。なりましたけど、手を握っていたおかげでしょうか、転ぶことはありませんでした。俯いていたわたしは何が起こったのだろうと、顔を上げます。顔を上げたところで、もう一度、その手が頬を突きました。ぱん。
「興梠、恋人の家の鍵をいらないなどと言うものじゃないぞ」
「うっ」
「う、じゃないだろ？　そこは“はい”だ。……ああ、また“泣き”か。泣けば許してもらえると思ってるのか、お前は。泣けば優しくしてもらえるとか思ってるんだろう。そういう甘えが、お前を成長させないんだ。分かるか？　お前は未熟なんだ。だから私がこれから正しいことを教えてやるからな、よく聞くようにしろ。まずは毎日、私の家に来ること。ああ、他の奴にバレないようにだぞ？　バレたら不味いからな。次は……そうだな」
「い、いー……いーやー、です」
「次は、ああそうだ。私の家についたら先にシャワーを浴びること。服に着替えておくこと。御前が勝手に入ってこられることもあるから、そういう時は機転を利かせろ」
「い、いっ、い、……い、や……ふぎっ！」
　目が、景色がぴかりと光りました。
「……興梠、手が汚れたぞ。お前は鼻血を出すことと、泣くことが趣味なのか？　いい加減にしろ、温厚な私でも許せることと許せ……人が話しをしてるのに何でお前は地面で丸まってるんだ？　踏んで欲しいのか？　うーうー、泣いたってこの時間じゃ誰も助けてくれないぞ。聞いてるか、興梠？　ちっ……ほら、興梠、私が悪かった、この通りだ。ほら、行こう、な？　早く、立て。立てと言ってるだろ早くしろ」
「ううううううぅぅう、ええぐっあああああ」
「早くしないと言いふらすぞ。ああ、学校中に言いふらしてやる。

興梠命は昨日、裸で凄いことをしてたってな。ほら、昨日の写真もみんなに見てもらおうか。顔真っ赤にして、鼻水と鼻血で助けてって、許してって叫んでた写真を。……だから、早く立てぇぇ！」

お腹が痛いです。顔が痛いです。くつが固いです。

「仮病か、お前？　嘘泣きか？　そうやって私が諦めることを待ってるか？　そういう狡賢いことを考える奴だったのかお前は。先生に言いつけるぞ。ああ、もしかして御前が来ることを狙ってるのか？　御前は今日、学校に来ないから安心しろ。今日は一日中、一緒だからな。むしろ、喜べ」

めのまえを、ちいさな、ありが、通りました。もう、春も終わりかも知れません。

48頁

空を仰ぎみれば何かが浮かぶような気がした。
夕焼け空を背に、空っぽの砂場を眺めながら、わたしはブランコに座り、ぼうっと空を眺めました。
喧騒と呼べるほどの子供たちの笑い声は、もう既になく、あるのは近所を通り過ぎる車の排気音だけです。なんだか寂しくなって、わたしは一度、ぽんと地面を蹴りました。少しだけわたしの体が浮きましたが、すぐにざらついた地面に着地しました。
「おいおい、ガン無視かよ。一応俺も心配なんだぜ？　あー、あれか。クソ東が俺のことテキトーに何か言ってたとか？」
腰をどっさりと据えて、わたしの隣で八瀬くんは退屈そうに呟きました。先ほどまで食べていた、チューブ状のアイスはないようで、今その手にあるのはボーリングのピンを思わせる炭酸ジュースの小さなボトルです。
八瀬くんは額を手で撫でて、優しく笑いました。わたしは彼を無視して、地面を小さく蹴ります。
「アイツが俺のことなんて言ったか知らねえけどさー、多分事実じゃねえよそれ。いや、事実もちょっとくらいはあるかもしんねえけどさ。なんていうのかな、アイツんちと俺んちって昔から仲が悪いんだよ。遺伝子レベルつうの？」
まあ、それはどうでもいいけど、と彼は区切り、重たそうなため息を付いたあと、強く地面を蹴りました。
「やっぱ、俺のことも忘れてるんだな」
「……え？」
「あ、やっと俺の方、向いてくれたな。興梠は俺のこと忘れちまったかもしんねーけど、俺は忘れてねえよ」
忘れるわけがねえ、と彼は笑い、その長い足はまた強く地面を蹴りました。小さな石がいくつか前に飛びます。わたしの足は止まっ

ているので、土埃も、石も、何も飛びません。
　わたしは随分、不思議そうな顔をしていたらしく、彼は少し寂しそうに笑いました。あるいは傷ついたような、そんな顔で。
「俺とお前、友達だったんだぜ？　少なくとも俺はすげえ友達だと思ってた」
「……」
「本当に記憶、ないんだよな。記憶がなくなったって聞いた時、すげえ悩んだ。俺は前と同じようにお前と接すればいいのかどうかってさ。でも、それってお前を傷つけるだけだろ？　今のお前は前のお前とは違うんだからさ」
　漕ぎ出したブランコは静かにその揺れ幅を狭めながら、わたしのブランコと同じように静寂へと近づいて行きました。
「だから前ほど、お前には接しなかったけどさ、でもやっぱ心配だわ。最近のお前、変だぜ？　あのクソ東も学校来てねえし、神足も何かニヤニヤしてて変だし、お前らどーしたんだよ。喧嘩でもしたのか？　……なにげに興梠、アザとか擦り傷、多いし」
　わたしは彼に何と言っていいのか分からなくて、何を言えばいいのか分からなくて、ただその場で縮こまって地面を俯きました。
「言いたくないことは絶対言わねえのと、人見知りなとこは相変わらずか。ああ、でも何か安心した……なーんて言っちまうとお前は、混乱するか。……あー、他人が何でも知ってるような感じって気持ち悪いよな。俺も今、想像してぞっとしたわ」
　歯を見せて彼はケタケタと笑います。わたしは相変わらず、石像のように地面を、小さな石ころを見つめます。
　八瀬くんは笑いを止めて、少し真剣な顔つきでわたしの方を見ました。
「さっき、神足が鬼みてえな顔でお前のこと探してたけどいいのか？」
　……目眩がします。
「お前、虐められてるのか？　神足の奴に」

……お腹が痛いです。汗が止まりません。
「おいおい、大丈夫か？　本当に生理か？　顔色悪いぞ」
わたしは空を眺めました。赤い空を眺めます。赤い空は深い青と混ざりつつあって、空はゆっくりと星々の光に変わりつつあるようでした。近くの街灯もちらほらと無機質な光が灯りつつあります。
ひかり。ぱっぱっぱっぱとわたしの頭の中を光りが瞬きました。
数日前の、あるいは少し前の、神足さんとの……。
「オーケー、分かった。この話題は、お前にとってタブーなんだな。じゃあ、別の話しにしよう。……えっと、なんだ、なんかねーかな。ああ、そうだ。東はどうして最近学校に来てないんだ？　あの脳筋女もついに風邪でも引いたか？」
「……分かりません。多分、しばらく来ないと思います」
「そっか。なあ、学校、楽しいか？」
八瀬くんはどうやらわたしのことを心配して、話題を変えてくれているようです。それはつまり、わたしが八瀬くんを不安にさせてしまっているということです。わたしは凄く申し訳ない気持ちになり、泣きたくなりましたが、表情は変えません。目尻に溜まった涙を隠すために、街灯に群がる虫を眺めました。
「……好きでも嫌いでもないです」
「俺ってカッコイイと思う？」
「分かりません」
「はは、そこはカッコいいって言えよ」
「すみません」
八瀬くんは爽やかに笑って、炭酸ジュースを口に運びました。わたしの口の中にも頬を刺しながら、パチパチと弾けるような炭酸の感覚が伝わります。
「お前、チョコ好き？」
「好きです」
「あ、俺も俺も。晴れと雨、どっちが好き？」
「選べません」

「だよなー、選べねえよなあ」
「選べないです」
腕を組みながら、うんうんと首を振って、八瀬くんは言いました。
「えっと、じゃあ次は、あれだ。お前さ、自分の過去に興味あるだろ」
「えっ？」
八瀬くんの顔は優しくもなく、また爽やかでもなく、どこか挑戦的な表情でした。あるいは野心的と表現すべきでしょうか。言葉も冗談のようなものとは違い、「そうである」という“てい”の断定です。同意や否定は求めておらず、その言葉は決定的な何かを相手に突きつけるような、そんなものでした。
少しだけ重苦しい、息苦しい、間がわたしと八瀬くんを包みました。わたしは気持ちを悟られないように、視線を元の位置に戻しますが、いささかそれはわざとらしいようにも思えます。
「それ関係で神足と揉めてるんだろ？」
「……」
「知りたいか？」
「ぼくは」
八瀬くんは大きく目を開き、思い切り噴き出しました。まるで道化を見たかのように笑います。
「“ぼく”ね。いやあさ、お前、記憶をなくしても、それなのか。いや、俺は別にそれでもいいけどさ。いい加減、そろそろどっちなのか決めた方がいいんじゃねえの？」
でも、それはしょうがないです……とわたしは反論したくなりました。誰もそれは選べないのです。白い鳥もいれば、黒い鳥もいます。鳥の子供は、初めて見たものを自分の親と認識するのです。それはそういうものなのです。
そう思いました。そう反論しようと思いました。でもわたしはただ小さく口を開けて、彼を見ているだけでした。実際のわたしは勇気のかけらもなく、反論しようとする気概もなく、またその会話の

先にある放棄し続けてきた選択が目の前に鎮座(ちんざ)することを恐れているのです。

「俺には何もできないかもしれないけどさ、それくらいの答えは教えてやれるかもな」

「答え？」

「前の命ちゃんがどういう感じで、どういう風だったか教えてやれるってことだ。元親友としてな」

「本当、ですか？」

「ああ、嘘なんてついてどうすんだよ」

「じゃあ、あの、教えて……下さい」

「もう暗いし、まずは俺んちいこうか。そこで教えてやるよ」

「親友として、ですか？」

「ああ、元親友としてな」

八瀬くんはもったいぶったように笑い、わたしに手を差し出しました。

誰も教えてくれないわたしの過去、わたしの人間性、わたし足りうる何かを教えてくれると彼は言います。意味はないのかもしれません。自己満足に過ぎないのかもしれません。でもわたしはその自己満足を欲していて、心の隙間を埋めたくて、だから。

だから、その手を。

49P

空を仰ぎみれば何かが浮かぶような気がした。
しかし、何も浮かばず、何も形にならず、ちぎれ雲のように消えていった。
「退屈だ」
人生は退屈の連続だ。退屈は不幸だ。それ故に退屈をどれほど誤魔化せるか、あるいは紛らわせることができるかが、人生を幸福に生きるための術らしい。
不幸な奴は神様は何もしてくれないと叫ぶ。だから神様はいねーんだとよ。でも俺から言わせれば違うね。そもそも神様って奴のことを全然そいつは考えてない。神様は万能で、不死身で、何でもできて、頭がいいから、何でも退屈に感じる。そんな奴に唯一できないことは何か。それは自分の退屈を殺すことだ。退屈を紛らわせる為に神様がすることは何か。人間が退屈を紛らわせる為に、映画や小説に逃げるように、神様もまた他人の不幸や享楽を眺めて愉悦に浸る。これだね。
そんなんだから、俺も精一杯、退屈に抗って生きようと思った。あんまり深くは考えないし、快楽主義的に生きようと思った。好きなものを食べて、自分の感じるままに生きて、自分の思うままに行動する。別のやつに言わせれば俺の人生は「まるで動物」らしいけどよ、でも深く考えてあーだ、こーだ悩んで苦しむよりも、絶対こっちの方が人生の総合幸福値は多いと思うね。ストレスや悩みからは無縁の生活だからな。
突き詰めれば、人生とは三大欲求に支配されていて、三大欲求さえ満たせば幸福であるということじゃねえのかと俺は思った。特に男として生まれてきたら「性欲」のくくりは大きな割合を占める。
元々、運動は得意で、身長も高い。顔もそこまで悪くはないらしいから、女に困ったことはない。女と寝て、喰って、また寝る。こ

れ以上の幸福はどこにもない。
唯一、俺の中で問題だったのは一度も、一度足りとも“恋”をしたことはなかった。
燃えるような恋って何だよ。身を焦がすような恋って何だ。動悸息切れ目眩なんてのはただの風邪じゃねえのって思う。
だから、それは、衝撃的で。俺はそれに対して全くと言っていいほど無防備だった。

入学式初日。時間的にも、校舎の静けさ的にも、クラスでは俺が一番だと思った。俺が最初の闖入者だと思った。事実、長い廊下を歩いている途中、誰一人見なかった。
教室の扉を引いて、近くの机にカバンを置いた。教室は少し埃っぽくて、木工ボンドのような工業的な臭いが充満していた。俺は薄暗い教室に明かりを入れ、半歩進んだ。
「うわっ」
「……あ」
「……い、いるならいるって言えよ」
そいつ自身も、人がいることに今気がついたようだった。ゆるやかな動きで窓側から視線を俺の方に移した。
瞳の奥はぼんやりとしていて、焦点が定まっていないような、あるいは目を開けて寝ていたと言わんばかりに弱々しかった。
「すみません」
小さな体躯を丸めて、そいつは椅子に座りながら器用に頭を下げた。
一言聞いて、一声聞いて、一目見て、恋に落ちた。
胸が高鳴るんじゃない。胸が鼓動を止めそうになった。息が止まり、呼吸するのも勿体無く、瞼を閉じればそれは今すぐにでも掻き消えてしまいそうなほど、儚げで美しく、また清廉（せいれん）に映った。
春の風にたなびく薄茶色の栗毛は気品に満ち満ちていて、その桜色の唇と長いまつげは愛くるしく、柔和な朝日に照らされる柔肌は、

陶器の色に近い。退廃的な教室の色合いは、その美しさをわざとらしい程演出していて、俺は震えた。

そんなものを前にして、俺は何もできなくなっていた。声をかけることすら、おこがましいような、直視することすら許されないような、そんな感覚に浸っていた。しかし、それが苦しいわけじゃない。むしろ心地よかった。

何がそうさせるのかが分からない。俺の好きな女は馬鹿で、明るくて、いい体をした女だ。少なくとも、こんな小さくて、今にも崩れてしまいそうな奴とは違う。

ひんやりとした声が小さな唇から漏れた。

「どうしましたか？」

「ああ、いや、その……」

理想と現実は違うという言葉が駆け巡る。現実は今までで、本当の理想はここだ。

何かしなくてはいけないという全細胞の命令に俺は顔を赤らめながら、かすれた声で、名前を聞いた。目の前のそれは、不思議そうな顔をしながら、自分の名札を指さした。

興梠命、という名前だった。

ある種の崇拝めいた愛を持って、一日中興梠を見つめていた。一日が二日になり、二日は一週間と伸びていった。

そこから少しづつ、俺は興梠に冷静さを装いながら話しかけた。柄にも無く、相手に合わせて自分を変えた。ピアスも止めた、長かった髪も切った。

時間が勿体ないから女も切った。悪い遊びも止めた。興梠が怖いというから、喋り方も変えた。

東とガチレズ神足は昔の俺を知っているからか、その“変わりよう”をせせら笑ったけど、興梠は肯定してくれた。

「いいと思います」って。

学校ではあまり話せないから、階段の踊場や、水道や、休み時間

のちょっとした合間のほんの数分だけだけど、それだけが俺の全てだった。

50P

興梠とはよく話す。興梠は心を許してくれている。俺のことを元でき損ないのケンカ坊主みたいには見ない。立派だ、カッコイイと褒めてくれる。

親父の敷いたレールに乗るのは嫌なんだというと、自分の好きなことをすればいいと言ってくれた。嬉しかった。

親父がお袋をよく殴るから嫌いだというと、暴力的な人は怖いですと同調してくれた。

神足に付きまとわれているのをからかう口調で聞くと、あいつは顔を赤くして慌てた。その姿がとても愛くるしくて、今すぐ抱きしめたくなった。

自分は何よりも無価値で、何よりも劣っていて、何よりも矮小なんだと信じているアイツを俺は違うと言ってやりたかった。お前は立派な奴だって。

だから。

「……は、え？　いや、俺たち仲いいよな？　お前も俺のことカッコイイっていったよな。ああ、いった。俺は覚えてる」

「でも」

「“でも”じゃねえよ。何で俺じゃダメなんだ？」

興梠はフェンスに身を預けながら、俺をびくついた顔で見た。

「あの、好きとか、嫌いとかじゃ……」

「だ、だったら俺と付き合ってみてから考えればいいじゃねえか。分からねえなら、まずはそこ、はっきりさせようぜ？　なあ。それとも何か、お前はもしかして……ハハッ、そんなわけねえとは思うけどさ、神足とか好きなのか？　もしかしてソッチ系？」

「あの」

「悪いようにはしないって。絶対しねえよ。神足がお前に触れたら俺がぶん殴ってやる。アイツはいっぺん痛めつけた方がいいんだよ。

興梠があんなに嫌がってんのに、つきまとってよ。この前の授業中だって興梠のこと晒し者にしやがって！　ふざけんなよ、あの女」
「八瀬くん、怖いこと、やめて」
興梠は青い顔をして首を振った。俺はなんだかコイツが可愛く思えて、我慢できなくて、腕に抱きしめた。
暖かくて、小さい。甘くて、柔らかい。
「冗談だよ、俺がそんなことするわけねえだろ。俺はお前にもアイツにも、東にだって優しいぜ？　お前と一緒になったら、俺が守ってやる。だからさ」
もう一度興梠を見る。俺は中腰で、まるで子供に大人が言い聞かせてるみたいだった。
「八瀬くん、目怖い。……あっ、いたっいです」
「だから、俺と付き合ってくれよ」
「ごめんなさい」
申し訳なく思うなら、俺と付き合えよ。
「お願いだ」
「ごめんなさい」
「おい、ふざけんな。俺は真面目に言ってんだぞ」
「ごめんなさい」
何が不満なんだ？　何故、俺がふられる？　俺は顔もそこそこだ。運動だってできるし、女にもモテる。なのに何で、コイツは俺のことを見ないんだ？　こんな奴に俺がふられる？　そんなわけねえ。何か理由がある。絶対にある。じゃなきゃ、おかしい。じゃなきゃ、今まで俺は何をしてきたんだ？　道化か、俺は。
「な、何が悪かった？　何がダメなんだ。せめて、それだけでもいいから教えてくれないか？」
俺は精一杯の笑顔で、興梠にはにかんで見せた。興梠は申し訳なさそうに、理由はないと言った。
理由がない。そんな理由があるかよ。
「そ、そっか。ハハハハッ、興梠らしいわ」

俺は納得して見せる。余裕をもたせる。
「ごめなんさい」
「いいって。……まあ、じゃあさ、明日からもいつも通り接してくれよ」
でも視界は揺れていて、今にも泣きそうだった。頭の中でベートーヴェンの悲愴（ひそう）が鳴り響いていた。
悲愴ね、傑作だわ。
「はい。あの、もう行きますね」
「ああ。……あっ！　いや、その今日のことは内緒にしてくれないか？　あの、他の奴に言ったりしないでくれ。なんつうかさ、すげーカッコ悪いなーみたいなさ、な？」
「分かりました」
既に俺のセリフと行動自体がめちゃくちゃ最高にかっこ悪くて、俺は泣いた。

次の日から俺はいかに俺が優良物件であるかを興梠に知らしめた。自分の家が名家であること、この前も女に告白されたこと、女から頻繁にメールが来ること、部活での成績、友達の数、自分の経験人数、自分のやってきたこと、自分の行った場所の話し。多少は誇張や脚色もあったけど、でも大きな目で見れば事実だ。
俺の話しを聞いた興梠はいつも「凄いですね」と言った。冷たそうな目で。
その目は、どこか俺を疑っているように思えた。いや、事実、疑っていたのだろう。疑っていたに違いない。俺はその度に汗をかき、無理に笑って、道化を気取った。道化、道化だと。この俺が？
この俺が馬鹿にされて黙っているのか？　黙っていたのか？　どんなタッパの差があろうともケンカに負けなかった俺が？　ざけんじゃねえ。
でも相手は興梠で、男のケンカとは違う。じゃあ、どうすりゃいいんだ。どうすれば俺のものになってくれるんだ。

「なあ、今日一緒に帰ろうぜ。久しぶりにさ」
押しても引いても、ダメで。
「ココらへんも変わったよな。って興梠分かる？　ほら、あそこなんてさ、昔はこんな藪なかったんだぜ」
ご機嫌取りもダメで、デートにはそもそも来ない。
「あっち行ってみようぜ、暗いから怖いって……お前、小学生じゃねえんだからさ」
神足みたいにバカ見たく、付きまとって、好きだっていやぁいいのか？　それこそ馬鹿だろ。
「いいから黙れよ！　静かにしてろ……っち、だから、大人しくすれば、すぐ、噛むなって！」
じゃあ無理やりするしかないだろ。無理やり犯すしか。
興梠は今まで見たことないようなアグレッシブさでバタバタと動いて、俺の手の隙間からムームーと騒いだ。キラキラとダイヤモンド見たく光る目は涙で揺れてる。
あれ、思ったよりもレイプって難しくないか？　口にモノ突っ込むだろ？　手を縛るだろ？　足を抑えつけるだろ？　体を押さえつけるだろ？　じゃあ、いつどこで、俺はコイツにぶち込めばいいんだ？　漫画で見たのと結構ちがくね？
ああ、そうか。
「わかった、わかった」
俺は手を離す。興梠はバタバタと地面の上を死にかけのゴキブリみたいに暴れた。
俺は少し離れて、軽く走る。加速をつけるんだ。つけて、横腹を蹴った。丁度サッカーボールを蹴った時のような音がして、興梠は丸くなった。
「次、暴れたら腹パンな？　ああ、そんな顔すんなよ。俺も泣きそうになっちゃうだろ？　大丈夫、大人しくしてれば、俺も優しいからさ」
優しいから、顔には何もしねえよ。

51P

濁った唾液をドロドロと口からこぼしながら、興梠は逃げようとした。半裸で芋虫のようにケツを振りながら、俺から距離を置こうとする。

ひくひくと泣き止まない子供のように、曇った声で叫びながら、逃げようとする。口の中はアイツの下着が入っていて、しゃべりにくそうだ。

「命ちゃん、どこ行くつもりだよ」

ベルトを捨てて、俺は興梠の足をつかんだ。無様に転んだ興梠の目は死にかけているように見える。猛獣に襲われる奴ってこんな顔をするんだろうな。

土にまみれ、鼻水と涙とヨダレで顔を染め上げて、顔は悲愴に満ちている。それでもなお、美しさは濁らない。いや、そうだからこそ、美しいのかもしれない。きっと、今の興梠はいつもの興梠よりも何倍も美しい。俺の体はそれを理解しているからか、興奮していた。

それを直に近づけてやると興梠は目を見開いて、震えた。

「大丈夫、俺さ、経験豊富だから」

興梠は一層、暴れて泣き叫んだ。

いくらでも泣けばいい。どうせ、お前の声は誰にも聞こえない。俺以外の誰にも聞かれない。お前がいくら暴れた所で、誰もここには来ない。そういうところを俺が選んだんだから。

俺がいくらコイツを殴ろうと、コイツを蹴ろうと、踏みつけようと、犯そうと、誰も来ない。

「ああ、何かすっきりしちまった。あれ、興梠起きてる?」

事実、興梠が動かなくなるまでボコボコにしても、誰も来なかった。そういうのは趣味じゃないけれど、でも大人しくしないならしょうがない。俺だって辛いんだ。

「おーい、命ちゃん。気絶中？」
興梠は地面に突っ伏したまま、ピクリとも動かなかった。息はしているみたいだし、多分生きてはいるだろう。
「問題です。本来、軍事利用を目的に開発された衛星による、ナビゲーションシステムといえばＧＰＳですが、正式名称は何というでしょう？」
「は？　命ちゃん、何いってんの？」
ピクリとも動かないで、興梠は言った。いや、この声は興梠じゃ。
「正解はグローバル・ポジショニング・システム。うちの子の携帯にも入ってるの」
硬い何かが俺の目の前を通りすぎて、喉に食い込んだ。それが俺の捨てたベルトだと気がつくには、少し掛かった。そしてそれに気がつく頃には既に遅かった。
俺はのけ反るように、相手に背負われていた。首にベルトを食い込ませたまま。
「あの子には同情しない。あの子には何も抱かない。あの子には関心を持たない。それが約束だった。だからね、あなたが命ちゃんを気絶させてくれたおかげで、助けることができる。こんにちは、畜生ども。わたしの妹を犯そうとしておいて、無事に済むと思うなよ」
「うっ……くあ」
抑揚のない冷えた声が背中から聞こえた。
何でここが分かったんだ？　ああ、携帯。持ってたのかよ。俺、番号知らねえぞ、クソ。つか興梠って姉ちゃんいたんだ。いや、そうじゃない、このままじゃ、死ぬ。殺される。つか、なんつー怪力。いや、そうじゃねえのか、俺の体重を利用して首絞めてるのか、すげーなコイツ頭いいな。
頭の中に何かが詰まったような圧迫感が徐々に和らいでいく。本格的にやばい。これは死ぬ。
ああ、興梠。興梠興梠興梠

事してゴメンな。でも、このままじゃ、きっと同じことをする。最低だよな俺。お前を傷つけて、裏切って。でもそうしたくなるほど、お前のことが好きなんだ。じゃあ、しょうがないだろ？

俺がこんなに思ってるのに、俺のこと何とも思ってないとか、フツー、キレるって。じゃあ、そうなって当然だろ？

諦めきれないんだ。諦めたら、また退屈になる。こんな気持ち初めてなんだ。

だから、死ぬのはもっと先かな。

俺はポケットに入っていた、ボールペンを思い切り、振り上げて、俺を背負ってるコイツに振り下ろす。女だろうが、痕が残ろうがしったこっちゃねえ。殺そうとしてるんだ、俺が殺したって問題ないだろ？

「あっ」

短い悲鳴と共にベルトが緩んだ。手が緩んだ。俺の足は地を踏みしめて、そいつの呪縛から逃れる。そして振り返り、そいつの目を見た。見て、逃げた。怖くて、逃げた。恐ろしくて逃げた。あんな目、普通の人間がする目じゃない。あんな顔、普通の人間じゃ。

痛みで、力を緩ませたわけじゃない。ただ驚いたんだ。少しびっくりした。相手が武器を持っているのなら、この方法じゃダメだと思ったんだと思う。証拠とか残るからか？　絶対に、痛みからじゃない。ただ、他の方法の方が確実だと思ったからだ。だから、あっさりベルトを緩めて、包丁に切り替えたんだ。

俺がもしあそこに今でもいたら、きっと死んでいたと思う。どんな奴でもまっすぐ殺しに行くなんてことはできねえ。そもそもしない。なのにあの女は、あのちょんまげ頭のあの女はまっすぐ俺を殺しにきた。そんないかれた奴に勝てるわけがねえ。

もし興梠がいなかったら、あの女は俺を追い詰めて、追い立てて、殺しに来るだろう。もし興梠を犯していたら、あの女は俺を追い詰めて、追い立てて、殺しに来る。

よかった、未遂でよかった。

52P

あれから毎日、夢に見る。自分の死を、夢に見る。

俺は俺を俯瞰（ふかん）の位置から眺めている。静かな森林公園で、興梠に手を出そうとしている。俺は叫ぶ。後ろを見ろと。後ろにいると。叫ぶけど、誰も気が付かない。いや、興梠だけが丸くなりながら、笑ってる。見たこともないような笑顔で、笑ってる。俺に隠れて笑ってる。気絶したふりをして、小さく笑う。後ろから伸びた手に、もう一人の俺の首が絞められるその様を……、俺が糞尿を垂らして、死ぬ様をジャージ姿の女とにやにやと笑う。俺が死んだあと、二人は俺の方を見て笑うんだ。嘲笑するようにニタニタと笑う。

俺はそこで飛び起きて、大量の汗を拭（ぬぐ）う。毎日毎日、同じ夢を見ているはずなのに、一向に慣れない。

きっと呪いを掛けられたんだ。あの女はきっと俺に呪いを掛けたんだ。あの興梠の姉は俺に。

未遂だというのに、何でここまで俺が苦しめられなきゃならないんだ？　人の家の前に動物の死骸（しがい）を毎日毎日置いていきやがる。番犬を置いても、次の日には番犬が死骸になってる。どうやら家の中にも入ってきているようで、微妙に物がずれている。この前は、蛇口の水が出しっぱなしにされてた。鉛筆が違う場所にあった。テレビから俺の名前を呼ぶ声がするし、壁と天井が少しずつ近づいてきている。確実に呪いのせいだ。

警察に訴えても無駄だった。何度言っても、相手にしないし、むしろ俺が可哀想な奴かのように扱いやがる。親父も遠まわしに俺に病院を奨めてきた。だから何度も言ってるだろ、これは呪いなんだって。

どうすれば、呪いを解くことができるのか調べた。自分の状況と照らしあわせて、呪いを調べた。聞いた。

魔女は言った。

「自分のしなきゃいけないと思っていること、すればいいんじゃないの？」

しなければいけないこと。そうか、俺はまだ興梠を犯していない。だからだ、そうに違いない。

呪いを解くために俺は興梠に近づいた。あれから俺を避け続けている興梠を捕まえて、訳を話した。この前はすまなかったということと、呪いを解くために俺と寝て欲しいということを。

「……何、言ってるんですか？」

返ってきた言葉はこれだった。確かに唐突だったかもしれねえ。だから俺は一生懸命、話した。壁の中に何かが潜んでいて、俺を追跡してくることや、テレビのニュースキャスターは買収されていて、ニュースを読み上げるふりをして、俺に呪文を掛けていることを説明した。興梠は余計に困惑して、逃げようとした。俺がその場で興梠を犯そうとすると、興梠は両手をぐるぐるバタバタ回して、泣き喚いて逃げた。

何で分かってくれないんだ。お前にも呪いが移らないようにしないといけないんだぞ。

少しでも呪いが引くように、興梠の机にいつものように精子をかけようと思った早朝の教室でのことだった。興梠の机の上にピンク色のファンシーな便箋が置いてあった。内容は実験室で待つと一言書いてあるだけだ。

俺は考えた。昨日もちゃんと興梠が家に入るまで俺はアイツを見ていた。こんなものをこしらえる暇はあったか？　いや、そんなところ見てないし、教室から出る時も、こんなものはなかった。つうことは、興梠じゃない。最近、興梠は呪いの影響を受けて、神足に虐められて、いろいろされているのは知ってる。

ということはこれを書いたのは神足で、アイツが何かしようと企んでいるわけだ。

「チャンスか？」

最近の興梠は俺を避けるために、四六時中誰かと一緒にいた。隙があるのは登下校くらいだが、アイツをどこかに連れ込めるような場所はない。

上手く神足の虐めを使えば、ここで興梠と俺の呪いを解くことができるかもしれねえ。このチャンスを逃してたまるか。

呪いを解いたあとの世界は見違えるようだった。そもそも空気が違うし、見えている世界も違う。すげー、清々しい。

壁の中の怪物も、俺を追跡してくるスパイもいない。アナウンサーは普通に文書うを読んでいて、天井と壁は遠く、鳥は俺の命を狙ったりはしない。

俺の命……“みこと”もこれで神足から虐められるようなことはなくなったはずだ。全てが順調。全部がいい方向に向かっている。

そのはずなのに、神足は随分と悔しそうに俺の前に現れた。

「許さない。お前だけは絶対に許さない。興梠にあんな酷いことをして！」

呪いのことを説明してもコイツには分からなそうだ。だから普通に俺はアイツをけなしてやった。

「お前だって同じことしようとしてたじゃねえか」

「なっ」

「ハハッ……ハハハハハッ！何でって言いたいのか？　何で知ってるか？　何でも知ってるよ、何でも知ってる。興梠がお前のことを嫌ってることだって知ってる。ほんと、ウザそうにしてたよ」

「こ、こここっ、興梠は、そんなこと、思わない」

言葉自体は否定だったが、明らかに同様しているのは分かった。確かにお前の言うとおりだよ、興梠は他人を評価しないし、何も……何も思わない。

でもお前には効く“嘘”だろ。

「じゃあ、お前には心を開かなかったんだな」

「お前に、お前ごときに興梠が心を開くわけがない」

「そう思えばいいんじゃないか？　嘘の事実を本当のことだと思えばいい。その方が幸福だろうな」
「嘘？　お前の言葉全てが嘘だ」
虚勢を張ったように強く俺を睨んで、神足は吠えた。馬鹿馬鹿しい。
「でも、お前がしたことは変わらないよな？　お前が興梠を犯そうとしていて、興梠を虐めていて、興梠から嫌われていたのは事実だろ？」
「それも……嘘だ」
「はあ？　嘘じゃないだろ？　お前、この前から、すげー興梠に避けられてたじゃねえか。お前、興梠を犯そうとしたんだろ、だから嫌われたんだろ？　だから避けられてたんだろ？　興梠から聞いたよ、お前は気持ち悪いってさ」
「そ、そ、そ、そんなことあるわけ」
「おいおい、否定していいのは最後のだけだぜ？　俺の言葉は最後のだけだろ？　前の言葉は全部事実じゃねえか。お前自身が一番分かってることだろ」
唇を震わせて、神足は視線を落とした。何度も目をぱちくり開いて、どうみても挙動不審だ。
神足は不自然に視線を右往左往させたあと、思いついたように俺を見て、睨んだ。
「そ、その話しはどうでもいい。お前がしたことは許されることじゃない」
「話しを逸らしても、意味ないんだけどな。つうか、俺のしたことって言うけど、お前それこそ“嘘”じゃねえの？　責任転嫁じゃねえかよ、そもそもお前が興梠にあんなことしなければよかったんじゃねえの？　いや俺が何もしなくてもお前がしてたわけだろ？　ハハハッ、どっちに行こうとも結果的にお前のせいじゃねえか！」
「ち、ちが」
「ハハハッ、違わねーよ！　お前の存在自体が興梠を不幸にしてる

んだろ？　ほんと、おめでたいなお前。周りから嫌われてて、騙されてて、みんなみんなお前に嘘ついて、せせら笑ってるのに気が付かねえなんてさ。本当は気がついてるんだろ？　じゃねえと、不憫すぎるわ、流石によお」

「何だ、何だ急にお前は！」

虚勢だ、虚勢に過ぎないぜ、その叫び声は。

「お前、最近自分の母親に会ったか？」

「それがお前の何に関係がある！」

関係ねえよ？

「お前の母親さ、もうとっくに死んでるって知ってた？　お前の家に届く親の手紙な、あの誕生日とか元旦に届くとか言う奴。あれな、ハハハハッ、全部作り物だぜ？　おいおい、どうしたんだよ、そんな驚いた顔して。誰がそんなことをって、東に決まってんだろ？　お前の母親殺しちまったの、ハハハハッ、アイツだからさっ！　罪悪感つうの？　それとも酔狂っていうの？　俺、そういうの分かんねえけどさ、お前ってそういうことなんだろ？　ハハハハッ！」

「う、そ」

「嘘だといいよな。俺も初めて聞いた時、びっくりしたよ。東ってそんなに最悪な奴だったんだってさ」

「あの方が、あの人が、そんなこと、だって」

「さっきさ、おれんところに東が来たんだよ。お前だけは殺すってさ。興梠の為にーとか言ってて」

神足は全身をブルブル震わせて、顔を真っ青にして、俺の話しを聞いていた。俺の言葉を疑わず、俺が本当に全てを話しているかのように思いながら、聞いている。

ほんと、お前は反吐が出るほど、興梠とよく似てるよ。その純粋さは。

賢い嘘のつき方ってのは真実の中に嘘を混ぜることと、全てを話さないことらしい。東なら、こんな子供だまし引っかからなかっただろうよ。

「ホント、鬼みたいな顔で、来てさ。俺もこれは殺されるって思ったぜ。でもさ、お前が神足の母親殺したこと、神足にバラすぞって言ったらよ、すっげえ悔しそうな顔して帰ってったわ、いやー、ありゃ面白かった！　ハハハハハハハハッ！」

「みんなが……私に嘘をついてる？」

「可哀想になあ、みんなが嘘ついてるんだよ。お前に」

俺も含めて。

「そんな、私は、どこにいけば」

「死ねば？　お前、生きてても誰も幸福にできないんだからさ、死ねよ。つーか死んで詫びろ。ホント、興梠のこと見てて可哀想だったわ。お前みたいなウザイのに好かれてさ」

「……ごめんな、さい」

「はあ？　俺に言うなよ。ホント、お前クズで、馬鹿だな。そりゃ東にも騙されるし、友達もできねえし、あの興梠にも嫌われるわけだわ。興梠なら自分を受け入れてくれるって思ってたんだろ？　こんな自分でも一人前として扱ってくれるって思ってたんだろ？　こんなどうしようもなくて、みすぼらしい自分でもって。で、嫌われたから……アイツは自分のことを好きになってくれないから、興梠にひどい事したんだろ？　興梠は大人しいから、何しても黙ってるって、最初から壊れてるから、何してもいいんだって思った。いや、そう思い込んで、興梠にいろいろしたんだろ？　何でって顔してるな、幼稚なお前のことなんて、考えりゃすぐ分かるよ」

急に耳に手を当てて、神足は小さく丸くなってわーわー泣いた。澄ました顔した高飛車女が、鼻水流しながらわーわー泣いているのを見て、俺は腹を抱えて笑った。

ばっかだなあコイツ。ホント面白いわ。

53PAGE

空を仰ぎみれば何かが浮かぶような気がした。
現実はこれっぽっちも変わらないけれど、何かが変わるような気持ちは凄く大切だと思う。
何かが変わるような気がするという気持ちは、多分希望とかそういう感じのものじゃないかなって思うから。
「がんばれえ、がんばれえ」
私はトイレにいく途中で、風呂場から聞こえた自分を鼓舞させる為の悲痛な声にあくびを漏らした。朝から大変だこと。
自分の妹が家庭で当たり前のように酷使されるようになったのは何時からだっただろう。私が妹を無視するようになったのはいつからだろう……なんていうことを毎日思っている。毎日思っているから、その答えは単純にして明快だった。父がいなくなってからだ。
父が行方不明になってから、母は荒れた。荒れたといっても暴力に訴えるようなことはしなかった。簡単にいえば私とミコトはネグレクトつまり、育児放棄を受けていた。ネグレクトと言っても奇妙なもので、会話をしないのと顔を合わせないだけで、毎日食事はあったし、几帳面な母らしく掃除を怠ることもなかった。今思えば、この時が私とミコトの幸福な時期だっただろう。
父がいなくなってから母は気が変になった。いつも何が問題だったのか、何がいけなかったのかとブツブツ考えるようになっていて、自己批判ばかりしていた。そんな母を私たちは心配した。顔と行動にこそ出なかったが私は心のなかで母の身を案じていたし、ミコトもよく母が心配だと私に話していた。母は自分によく似ている私達を好ましく思ってはいなかったみたいだけど。だって自己否定の最中だから。
ある時、太った男が家にやってきた。母はそいつにまるっきり興味がないようだったが、私達から見て、男は母に気があるのはよく

分かった。なんとか母の近くにいようと男は言葉巧みに母に語りかけたが、流石に学者を名乗るだけあって母は聞く耳を持たなかった。

それがある日崩れた。

「先生、思いついたんですよ、僕。この子たち、ちょうどいいじゃないですか。先生の旦那さんのテーマって感情についてでしたよね？　そうだそうだ、感情についてでした。共著の予定だったんですよね？　ああ、それで、感情の発展について調べるにはやはり、実験が必要だと思うんです。この子たち、感情がないように見えますよね？　でもこの子たちにも感情があるわけですよね？　今までと今現在の感情とこれからの感情の変化を調べたら面白いと思いませんか？　発展を……？　いや、それは非常に恣意的になると思うんですよ。必要なのは何が失われていくか、ということじゃないですかね。僕達人間はあるものに対しては凄く鈍感ですよねえ？　でも失っていくものに対しては凄く敏感ですよね。まあ分かりやすいってのもあると思うんですけど……ああ、そうです！　その通りです！　いやあ、先生は話しが分かるなあ。もちろん、僕もお手伝いしますよ。ええ、面白い結果になって、それが発表されれば旦那さんもきっと帰ってきますよ。ええ」

そういってその男は私とミコトを見て、どちらかを今からカラッポにするといった。人として扱わないと断言した。感情が完璧に失われるように、その過程が見られるように、心を壊すと。

母は弱っていたのだろう、八方塞がりだったのだろう。それに同意した。男は母の近くにいるためにはそれしかなくて、私達を壊すことに決めた。

私はそんなものが終わるわけがないと思った。そんな実験、被験者が死なない限り、ずっと続くものじゃないかと思った。感情のあるなしなんて、本人以外の誰が分かるというのだろう？　ミコトも私も手をつなぎながら震えた。

「二人でよく決めるといい」

男はそう笑った。

私はくじ引きを作った。赤を引いたほうが、感情を消される方で、赤じゃない方が普通に生活をするということだった。恨みっこなしということで、私たちは引いた。ミコトも私も赤を引いていた。でも私は黙っていた。黙っていて、ミコトのくじを覗いて、頑張ってねと言った。

しょうがなかった。怖かった。嫌だった。得体のしれない実験は子供心にも確実に熾烈なものだと分かっていたし、苦しくて辛いものだと分かっていた。自分がそんなものを、いつ終わるか分からないようなことを延々続けさせられるというのは絶対に嫌だった。母がついているから大丈夫だと言われても、納得いかなかった。

数年の間に、ミコトは性別を奪われた。私たちはある時は女性として扱い、ある時は男性としてミコトを扱った。服装も、言葉もその都度変えさせた。男はミコトを犯し、母はミコトを犯した。

数年の間に、ミコトは尊厳を奪われた。テーブルで食事することを禁止された。人の言葉を話してはいけないと言われた。家の中で服すら着せてもらえず、犬として扱われた。守れない時はひどい事になった。

数年の間に、ミコトは無視され続けた。物置として扱われ、みんなが寝静まったあとに勝手に食事をし、勝手に寝て、みんなが起きるよりも早く、元の場所にいた。

数年の間に、ミコトは希望をなくした。若干狂いかけていたミコトにセキセイインコを与えた。可愛がらせ、手入れをさせ、ミコトの心が戻り、鳥がなついた頃に、羽をむしらせ、首をはねさせ、料理をさせ、食べさせた。吐き出したものを何度も食べさせた。

数年の間に、ミコトは罵倒され続けた。名前は呼ばれず、ゴミのように扱われ、蹴られ、ねじ伏せられ、意味もなく激怒され、陵辱された。まるで自分が悪いかのようにミコトは謝り続けた。

数年の間に、私はミコトを意思の中から消した。最初のうちは男に囃(はや)されるがまま、頑張れと泣き叫ぶミコトにいい続けていたけど、

ミコトが陵辱される横でささやき続けていたけど、私が耐えられなくなった。そのうち、ミコトは自分で自分を勇気づけるようになった。

数年の間に、ミコトは息を殺すように家の中で生きることを覚えた。足音立てずに、誰ともあわずに家の中を移動する術を身につけていた。どこで寝てるのかも、分からないくらいに、ミコトはどこにも自分の痕跡を残さなかった。

ミコトを人間扱いすると私が殴られた。ミコトの心配をするなと怒られた。ああ、なりたいのかと脅された。

最初はみんな酷くなかった。次第にみんな酷くなった。私も酷くなった。ミコトは完全に人としてダメになった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5011l/

誰かにとっての君は。

2012年1月4日06時47分発行